

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第634集

この まち ुरあ 1 小野遺跡・町裏Ⅰ遺跡・町裏Ⅱ遺跡発掘調査報告書 まち ुरあ 2

経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査

2015

岩手県南広域振興局農政部一関農村整備センター
(公財) 岩手県文化振興事業団

小野遺跡・町裏Ⅰ遺跡・町裏Ⅱ遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されております。先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業日形地区に関連して平成25年度に発掘調査を行った小野遺跡・町裏Ⅰ遺跡・町裏Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものです。

今回の調査によって古代の畠耕作跡や近世の掘立柱建物跡を構成する柱穴状土坑などの遺構が検出され、その周辺からは生活に使われた土器や陶磁器などの遺物が見つかりました。これらの結果から、当時、この地で暮らしていた人々の様子的一端が明らかになりました。この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財行政に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センター、一関市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成27年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例 言

- 1 本報告書は岩手県一関市花泉町日形字町裏 159 - 2 ほかに所在する小野遺跡、同花泉町日形字町裏 71 ほかに所在する町裏 I 遺跡、同花泉町日形字町裏 22 ほかに所在する町裏 II 遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センターとの協議を経て、(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センターに農家負担分を補助している。
- 3 本遺跡の調査成果は、すでに『平成 25 年度発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 630 集) において発表しているが、内容については本書が優先する。
- 4 岩手県遺跡登録台帳に登録されている遺跡番号と遺跡略号は次の通りである。
小野遺跡 遺跡番号 O E 39 - 1017 / 遺跡略号 KN - 13
町裏 I 遺跡 遺跡番号 O E 39 - 0161 / 遺跡略号 MU I - 13
町裏 II 遺跡 遺跡番号 O E 39 - 0086 / 遺跡略号 MU II - 13
- 5 野外調査の面積・期間・担当者は次の通りである。
小野遺跡 平成 25 年 4 月 8 日～5 月 17 日 / 423m² / 溜 浩二郎・村田淳・中島康佑
町裏 I 遺跡 平成 25 年 4 月 8 日～6 月 18 日 / 2,506m² (本調査 1,246m²・確認調査 1,260m²)
/ 溜 浩二郎・村田淳・伊藤みどり・中島康佑
町裏 II 遺跡 平成 25 年 4 月 8 日～6 月 18 日 / 2,609m² (全て確認調査) / 溜 浩二郎・村田淳
・中島康佑
- 6 室内整理の期間・担当者は次の通りである。
小野遺跡 平成 25 年 12 月 16 日～平成 26 年 1 月 15 日 / 中島康佑
町裏 I 遺跡・町裏 II 遺跡 平成 26 年 1 月 1 日～平成 26 年 2 月 28 日 / 溜 浩二郎
- 7 遺物の鑑定は次の機関に依頼した。
火山灰分析：火山灰考古学研究所
植物珪酸体分析：北方ファイトリス研究室
- 8 基準点測量は株式会社総合株式会社コンサルタンツに委託した。
- 9 本報告書の編集については、第 I 章「調査に至る経過」は岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センターに原稿を依頼し、執筆していただいたものである。他は溜が執筆した。
- 10 本遺跡の調査で得られた一切の資料、出土遺物・撮影写真・遺構実測図・遺物実測図などは岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I	調査に至る経過	2
II	立地と環境	
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	5
III	野外調査と室内整理	
1	野外調査	7
(1)	野外調査の経緯	7
(2)	グリッドの設定	7
(3)	基準点の設定	7
(4)	表土除去と遺構の検出	10
(5)	遺構の精査と実測	10
(6)	写真撮影	10
2	室内整理の手順と方法	10
(1)	作業経過	10
(2)	遺物の整理	10
(3)	掲載図	10
(4)	写真の整理	10
IV	小野遺跡	
1	遺跡の位置	11
2	調査の概要	11
3	基本土層	11
4	検出遺構	13
5	出土遺物	22
6	まとめ	26
V	町裏Ⅰ遺跡	
1	遺跡の位置	27
2	調査の概要	27
3	基本土層	27
4	検出遺構	30
5	出土遺物	42
6	まとめ	44
VI	町裏Ⅱ遺跡	
1	遺跡の位置	45
2	調査の概要	45
3	基本土層	45
4	検出遺構	47
5	出土遺物	55
6	まとめ	56
附編	自然科学分析	
1	火山灰分析	57
2	植物珪酸体分析	64
	報告書抄録	90

表 目 次

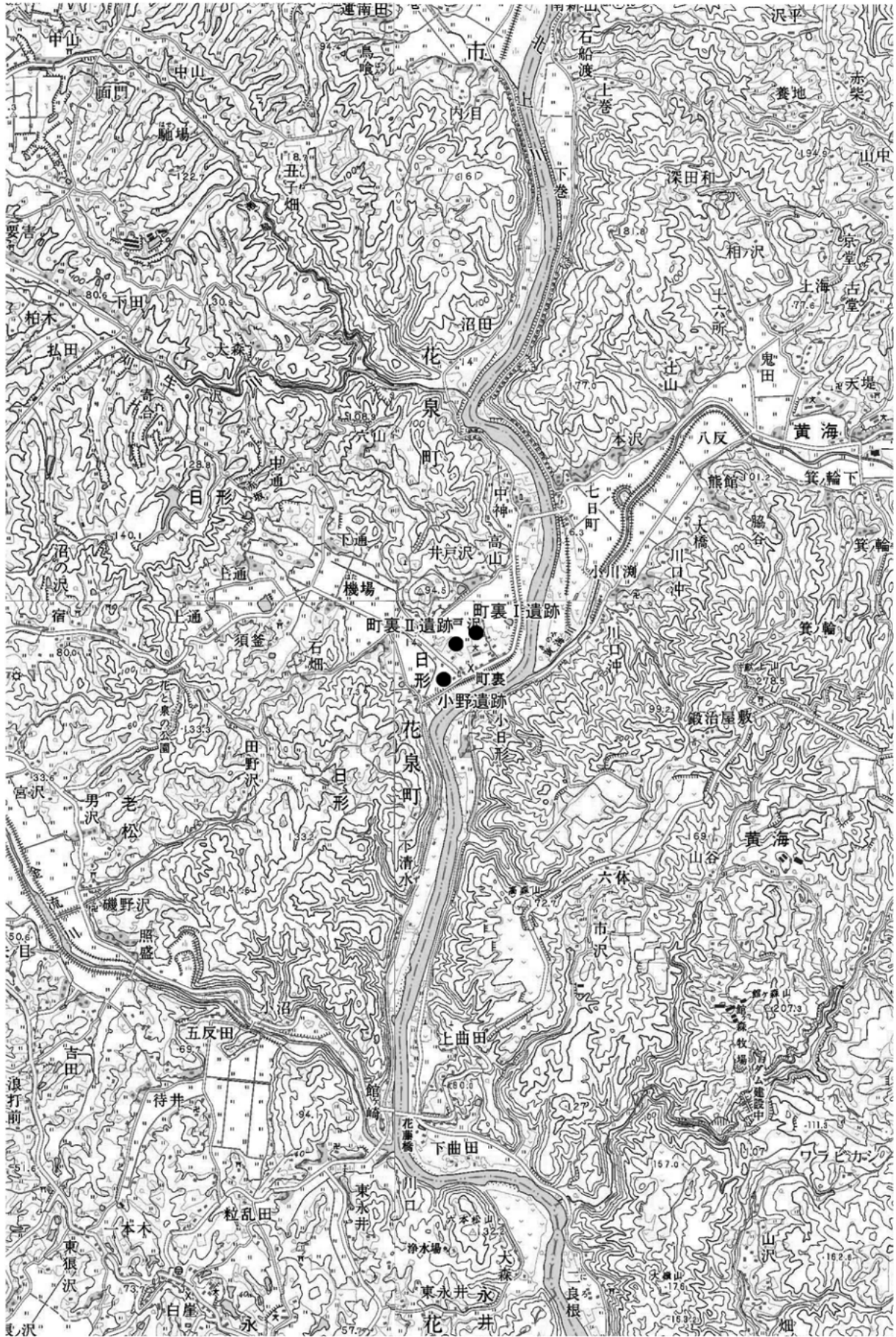
第1表 周辺の遺跡一覧	6	町裏 I 遺跡	
第2表 小野遺跡・町裏 I 遺跡・町裏 II 遺跡 測量杭一覧	7	第9表 溝一覧	33
小野遺跡		第10表 土器観察表	43
第3表 柱穴状土坑一覧	21	第11表 陶磁器観察表	43
第4表 土器観察表1 (土師器・須恵器)	23	第12表 石器観察表	43
第5表 土器観察表2 (縄文土器)	23	第13表 遺物総重量表 (土器・陶磁器)	43
第6表 土製品観察表	23	町裏 II 遺跡	
第7表 陶磁器観察表	23	第14表 土器観察表	55
第8表 古銭観察表	23	第15表 陶器観察表	55
		第16表 遺物総重量表 (土器・陶器)	56

図 版 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第19図 遺構配置図 (B・C区)	29
第2図 地形分類図	3	第20図 1号畝間状遺構	34
第3図 遺跡周辺の地形と調査範囲	4	第21図 2号畝間状遺構	35
第4図 周辺の遺跡分布図	6	第22図 3号畝間状遺構	36
第5図 小野遺跡グリッド配置図	8	第23図 4・5号畝間状遺構	37
第6図 町裏 I 遺跡・町裏 II 遺跡 グリッド配置図	9	第24図 6・7号畝間状遺構	38
小野遺跡		第25図 8号畝間状遺構	39
第7図 基本層序	11	第26図 1～5・8号溝	40
第8図 遺構配置図	12	第27図 6・7・9～12号溝、1号土坑、 1号柱穴	41
第9図 1号畝間状遺構、1号焼成土坑	16	第28図 出土遺物	42
第10図 1～6号土坑	17	町裏 II 遺跡	
第11図 7号土坑、1号柱穴列	18	第29図 基本層序	45
第12図 柱穴状土坑 (P1～6・10～16)	19	第30図 遺構配置図	46
第13図 柱穴状土坑 (P17・18・20～28)	20	第31図 1号畝間状遺構	49
第14図 柱穴状土坑 (P29～33)	21	第32図 2号畝間状遺構	50
第15図 土師器、須恵器	24	第33図 3・4号畝間状遺構	51
第16図 弥生土器、土製品、陶磁器、 古銭	25	第34図 5・6号畝間状遺構	52
町裏 I 遺跡		第35図 7号畝間状遺構	53
第17図 基本層序	27	第36図 1・2号溝	54
第18図 遺構配置図 (全体)	28	第37図 出土遺物	56

写真図版目次

小野遺跡		写真図版9 1・2号畝間状遺構	81
写真図版1 航空写真、調査区	73	写真図版10 3・4号畝間状遺構	82
写真図版2 調査区、基本土層	74	写真図版11 5～8号畝間状遺構	83
写真図版3 1号畝間状遺構、 1・2号土坑	75	写真図版12 1号土坑、1・7・16号溝、 1号柱穴、調査区	84
写真図版4 3～6号土坑	76	町裏 II 遺跡	
写真図版5 7号土坑、1号焼成土坑、 1号柱穴列	77	写真図版13 遺跡遠景、基本土層	85
写真図版6 柱穴状土坑 (P7～9・16)	78	写真図版14 1～3号畝間状遺構	86
町裏 I 遺跡		写真図版15 4～7号畝間状遺構、 1・2号溝	87
写真図版7 調査区	79	写真図版16 小野遺跡出土遺物	88
写真図版8 基本土層、1号畝間状遺構	80	写真図版17 小野遺跡・町裏 I 遺跡・町裏 II 遺跡 出土遺物	89



1 : 50,000 一関・千厩・志津川・若柳

第1図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

小野、町裏Ⅰ、町裏Ⅱ遺跡は、「経営体育成基盤整備事業日形地区」のほ場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は一関市花泉町中心部から東方約6kmに位置し、現況は小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝のため用水不足や排水不良となっており維持管理に支障を来しているところである。

このため、本事業地区において大区画ほ場整備を実施することで農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体及び担い手農家の育成を目的として事業着手したものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部一関農村整備センターから平成24年8月3日付け一農整セ第312号「経営体育成基盤整備事業日形地区における埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」により、岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成24年10月22日から24日、11月15日に試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成24年12月7日付け教生第1204号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答してきた。

この回答を受け、当農村整備センターは平成25年1月30日付け、一農整第597号「埋蔵文化財の保護に係る工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。

その結果を踏まえて当農村整備センターは、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センター)

II 立地と環境

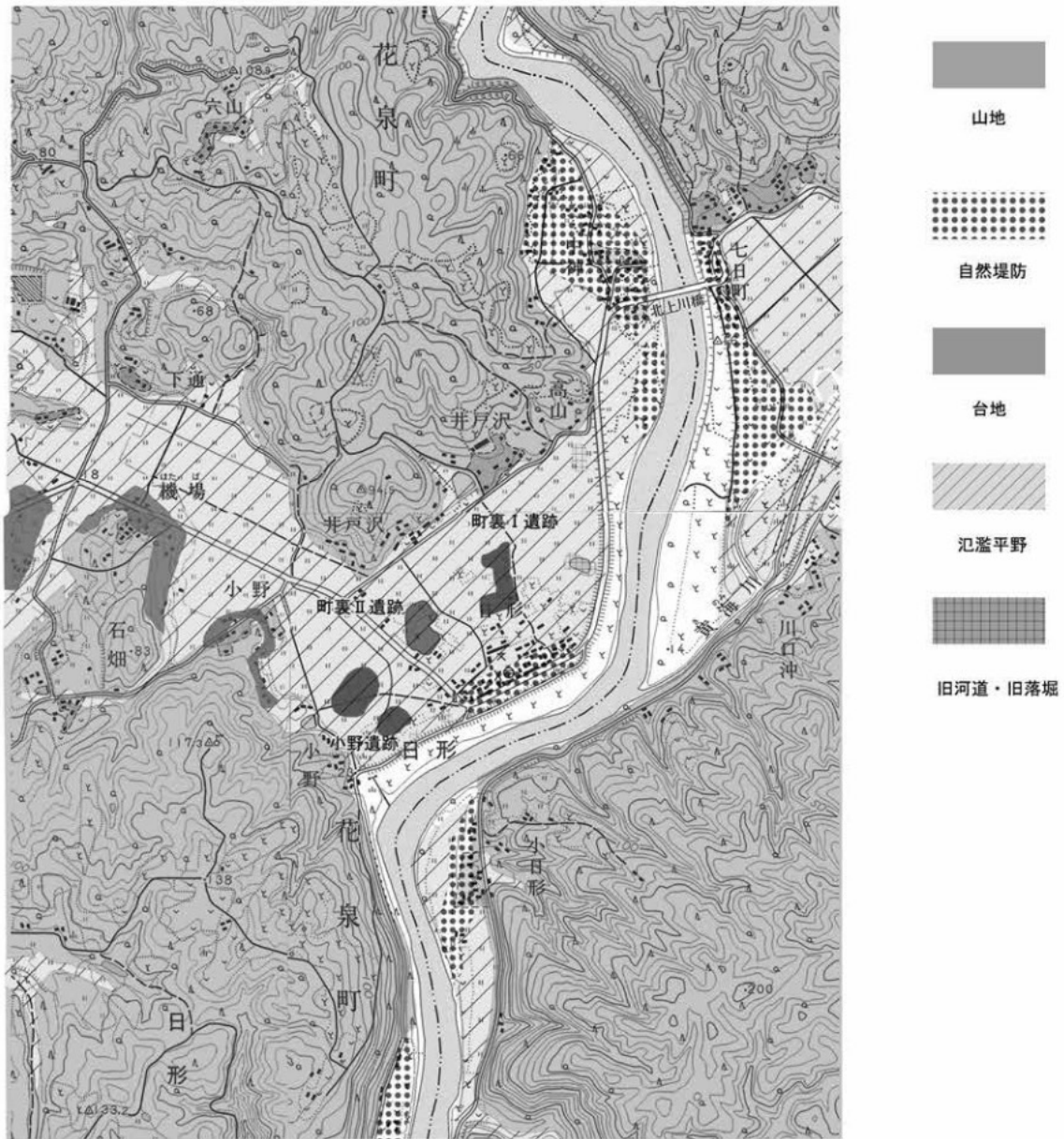
1 地理的環境

小野遺跡は、一関市南部の北緯38度49分50秒、東経141度15分00秒の地点に位置し、東に隣接して町裏Ⅱ遺跡、町裏Ⅰ遺跡がある。3遺跡は国土地理院発行の5万分の1地形図「志津川」NJ-54-14-12（一関12号）の図幅に含まれる。

一関市は、岩手県の最南端に位置し、南側は宮城県栗原市・登米市、西側は秋田県湯沢市、北は奥州市・西磐井郡平泉町・気仙郡住田町、東は宮城県気仙沼市と接する。現在の一関市は平成17年9月に1市4町2村が、さらに平成23年9月には東磐井郡藤沢町が合併され、人口125,950人（平成26年1月1日現在）と面積1,256.25km²を有する県内第2位の市となっている。

遺跡のある一関市花泉町は、南は宮城県登米市、西は宮城県栗原市と接しており、市域の最南端に位置する県境の町である。花泉町周辺は、奥羽山脈と北上山地の間を南流する北上川と、これに東行して合流する磐井川や金流川によって開析された丘陵地に分類される。本遺跡を含む日形地区におい

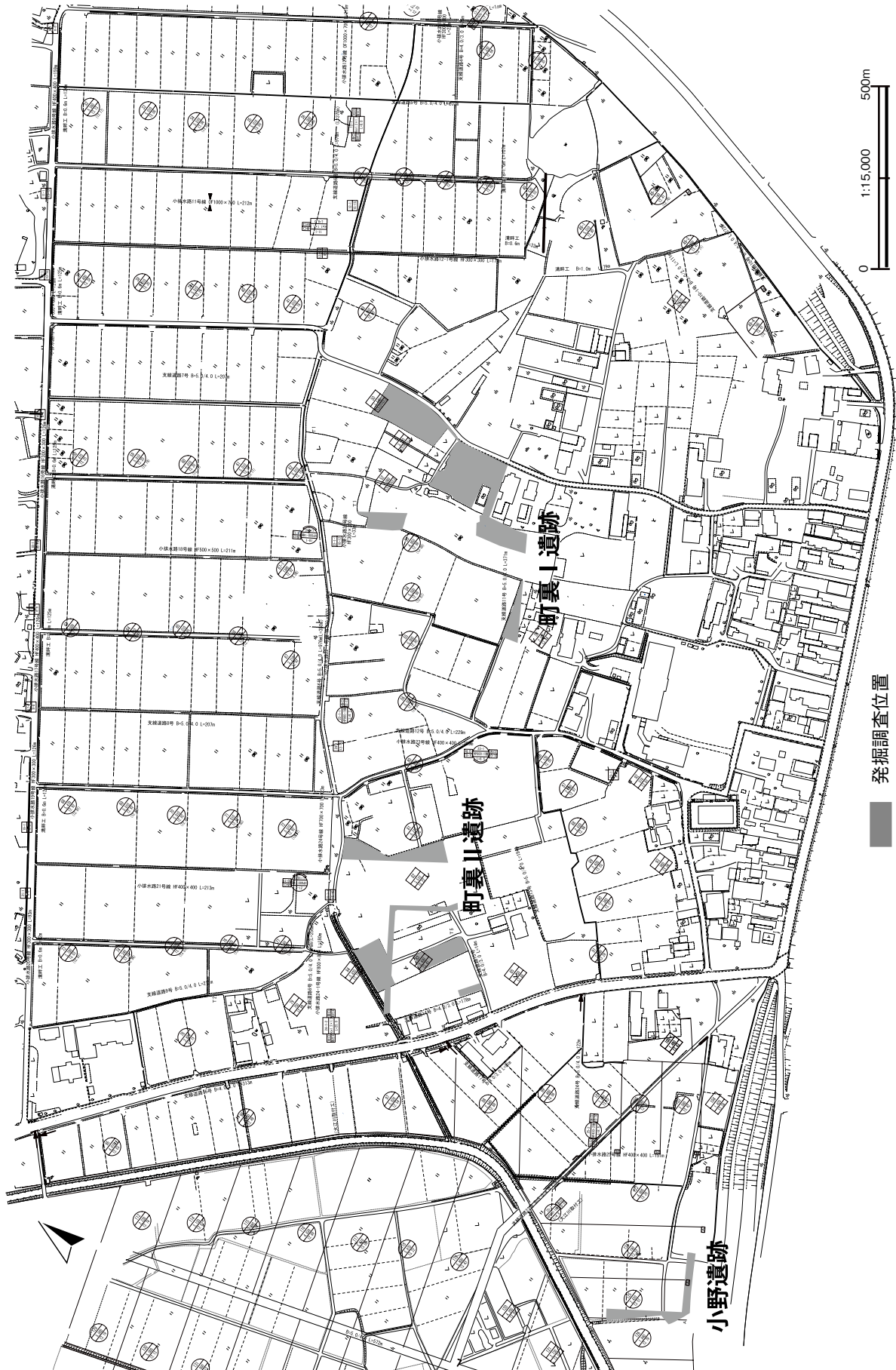
でも丘陵地が大部分を占めるが、北上川に隣接するため谷底平野の発達する部分が見られ、北上川の流路の変換点部分や、金流川・黄海川の下流域から合流地点に置いては、小規模ながらこの中に比較的連続した自然堤防が形成されている。



(地図 1:25,000 有壁・千蕨南部・若柳・米川)

(治水地形図 1:25,000 千蕨南部・有壁・米川・若柳)

第2図 地形分類図



第3図 遺跡周辺の地形と調査範囲

2 歴史的環境

一関市花泉町内では、現在約 150 箇所の遺跡が登録されている。本遺跡が所在する日形地区においても、22 遺跡の存在が確認されているが、平成 18 年の分布調査や本整備事業に伴う試掘調査によって新規に確認された遺跡も多く、その数は増加傾向にある。一方、花泉町内において発掘調査が実施された遺跡は少数で、本図幅中に限るとわずか 1 遺跡にとどまる。よって本節においては、町内の発掘調査された代表的な遺跡について概観する。

後期旧石器時代の遺跡として金森遺跡(花泉遺跡として報告)がある。昭和 30 年に東北大学古生物学教室により調査が行われており、ハナイズモリウシ・ヘラジカやナウマンゾウなどの動物化石が出土している。

縄文時代の遺跡では、貝鳥貝塚や石崎貝塚など内陸性の貝塚が調査されている。貝鳥貝塚は、昭和 31・32・41・44 年に岩手大学・早稲田大学・東京大学による 4 次にわたる調査が行われ、縄文時代中期～弥生時代に属する遺物や 32 体分の埋葬人骨などが出土している。石崎貝塚では、平成 8 年に岩手県教育委員会の試掘調査、平成 22 年には農道整備事業に伴い当埋蔵文化財センター(以下埋文センター)が発掘調査を行い、再堆積であるものの動物遺存体を含む貝層を確認している。集落遺跡としては、下館銅屋遺跡やどうじゃ森遺跡(7)などがある。下館銅屋遺跡は、平成 7・8 年に当埋文センターが調査を行い、中期後葉に属する竪穴住居跡 45 棟が確認されたほか、早期～後期の遺物も出土している。また、報告遺跡である中神四日市遺跡から北北西約 500m の小高い丘陵上にどうじゃ森遺跡(中神遺跡として報告)がある。東北大学による昭和 22・23 年の調査結果をもとに、平成 2～8 年にかけて同大学と花泉町教育委員会により再調査が行われている。調査の結果、晩期の住居跡や後期の配石遺構のほか、早期～弥生時代前期の土器・石器・骨角器・巻貝形土製品など良好な資料が大量に出土している。

弥生時代の遺跡は、先の貝鳥貝塚やどうじゃ森遺跡が挙げられ、どうじゃ森遺跡では前期に属する土器・石器・骨角器・土偶が出土したほか、墓域と想定される区域から土器棺が 4 基見つかっている。

古墳時代の遺跡は、昭和 30 年に杉山古墳が 5 基調査されているが、終末期古墳群と考えられるもので 8 世紀前半まで時代が下る可能性がある。

古代では数多くの遺跡が確認されており、上述した下館銅屋遺跡では住居跡 19 棟や土坑約 70 基が調査によって見つかっている。平成 20 年に当埋文センターで調査された中村城跡では、住居跡 2 棟のほか、当時の水田跡や河川跡も確認されている。このほか分布調査で土師器や須恵器が表採される遺跡は多く、日形地区でも平成 18 年に上通遺跡(16)・石畑遺跡(20)などが確認されている。

中世の遺跡としては城館跡が多く、過去に実施された分布調査において 48 の城館が記録されているが、発掘調査が実施された例は少なく、上記の中村城跡のみである。中村城跡では、城を巡る堀跡や橋跡などが確認され、堀跡からは大量の木製品が出土している。

近世の遺跡としては、平成 10 年に花泉町教育委員会によって調査され、江戸時代中期の製鉄炉が検出された寺沢遺跡などがあるが、遺跡数・調査事例とも少なく、その内容は判然としない。今後の調査に期待されるものである。



第4図 周辺の遺跡分布図

(地図 1:25,000 有壁・千原兩部・若柳・米川)

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	よみがな	遺跡コード	種別	時代	主な遺構・遺物	備考
1	小野	この	OE39-1017	散布地	古代	須恵器、土師器	H18分布調査、報告遺跡
2	町裏Ⅱ	まちうらⅡ	OE39-0086	散布地	平安	竪間状遺構、竪穴住居、土坑、溝、須恵器、土師器	H24試掘調査(県教委)、報告遺跡
3	町裏Ⅰ	まちうらⅠ	OE39-0161	散布地	縄文・平安	石畿、竪間状遺構、須恵器	H18分布調査、H24試掘調査(県教委)、報告遺跡
4	中通Ⅱ	なかどおりⅡ	OE28-1392	散布地	縄文	石畿	
5	瀬上館	せがみだて	OE29-2018	城館跡	桃山	平場	
6	角堂塚	かくどうづか	OE29-2021	祭祀跡		石碑、石祠	
7	どうじゃ森	どうじゃもり	OE29-2028	散布地	縄文～弥生	縄文土器、石器、弥生土器	覚道塚、法華塚
8	宝領館	ほうりょうだて	OE29-2110	城館跡	桃山	曲輪、郭、井戸	
9	中神四日市	なかがみよっかいち	OE29-2146	散布地	平安	土師器	S24・33発掘調査、H2～8学術調査
10	黄海川岸場	きのみがわきしば	OE29-2138	渡し場跡	近世		
11	シダ森	しだもり	OE29-2215	散布地	縄文	縄文土器、石畿	
12	高山館(須藤館)	たかやまだて(すどうだて)	OE29-2193	城館跡	中世	曲輪、土塁、空堀	
13	鹿ノ畑経塚	かのはたきようづか	OE28-2389	経塚	平安～鎌倉	古常滑焼経壺、塚2基	S59町指定文化財
14	小館	こだて	OE29-2081	城館跡	中世	曲輪、腰郭、主郭、二の郭	
15	中通Ⅰ	なかどおりⅠ	OE28-2398	散布地	縄文・古代	須恵器、土師器、(縄文土器、かわらけ)	
16	上通	かみどおり	OE38-0218	散布地	古代	須恵器、土師器	H18分布調査
17	上須釜館	かみすがまだて	OE38-0361	城館跡	桃山	曲輪、腰郭、主郭、二の郭	
18	宝寿院跡	ほうじゆいんあと	OE38-0382	寺院跡		墓石	
19	関峯寺庵跡	かんぼうじあんあと	OE38-0358	寺院跡		墓石	
20	石畑	いしはた	OE38-0359	散布地	古代	須恵器、土師器	H18分布調査
21	葉山館(波山館、小野山城)	はやまだて(おのやまじょう)	OE38-1328	城館跡	室町	曲輪、土塁、空堀、本丸、二の丸	H14範囲拡大
22	小野下館	このしもだて	OE38-1022	城館跡	室町～江戸		
23	川口館	かわぐちだて	OE39-0236	城館跡	中世	空堀、主郭、二の郭、腰郭、土塁	
24	藤の巻館	ふじのまきだて	OE39-0283	城館跡	中世	空堀、主郭	
25	鍛冶屋敷	かじやしき	OE39-1249	製鉄跡		鉄滓	
26	鶴巣館(小日形館)	とこのすだて(こひかただて)	OE39-1178	城館跡	中世	空堀、主郭、二の郭、腰郭、土塁	
27	皇徳寺跡	こうとくじあと	OE39-1173	寺院跡			

Ⅲ 野外調査と室内整理

1 野外調査

(1) 野外調査の経緯

- 4月8日 小野遺跡・町裏I遺跡・町裏II遺跡調査開始。
- 4月9日 人力による試掘および重機による表土除去を開始する。
- 5月14日 小野遺跡の終了確認および町裏I遺跡の部分終了確認を行った。
- 5月17日 小野遺跡・町裏I遺跡の航空写真撮影を実施。小野遺跡の調査完了。
- 5月24日 町裏I遺跡・町裏II遺跡の調査手法等について協議を行った。
- 6月6日 町裏II遺跡の終了箇所の一部を引き渡した。
- 6月10日 町裏I遺跡の終了確認を行った。
- 6月18日 調査終了。

(*協議・終了確認はいずれも委託者・岩手県教育委員会・埋文センターの3者による)

(2) グリッドの設定

小野遺跡は平成23年度調査時のグリッド配置図内に収まったことから、これを使用した。町裏I遺跡および町裏II遺跡はこれより北東方向の離れた場所に位置することから、調査原点を平面直角座標第X系の $X = -129,300.000$ 、 $Y = 35,200.000$ とし、100 m間隔で北から南方向にI, II, III・・・とローマ数字をあて、西から東方向へはA, B, C・・・と昇順するアルファベット大文字をあてて100 × 100 mの大グリッドを設定した。さらにこれを5 m間隔で20等分し、5 × 5 mの小グリッドとしている。小グリッドの呼称は北から南方向へ1～20のアラビア数字、西から東方向へa～tのアルファベット小文字をあて、これらの組み合わせで小グリッドを表し「IA1a」のように呼称した。

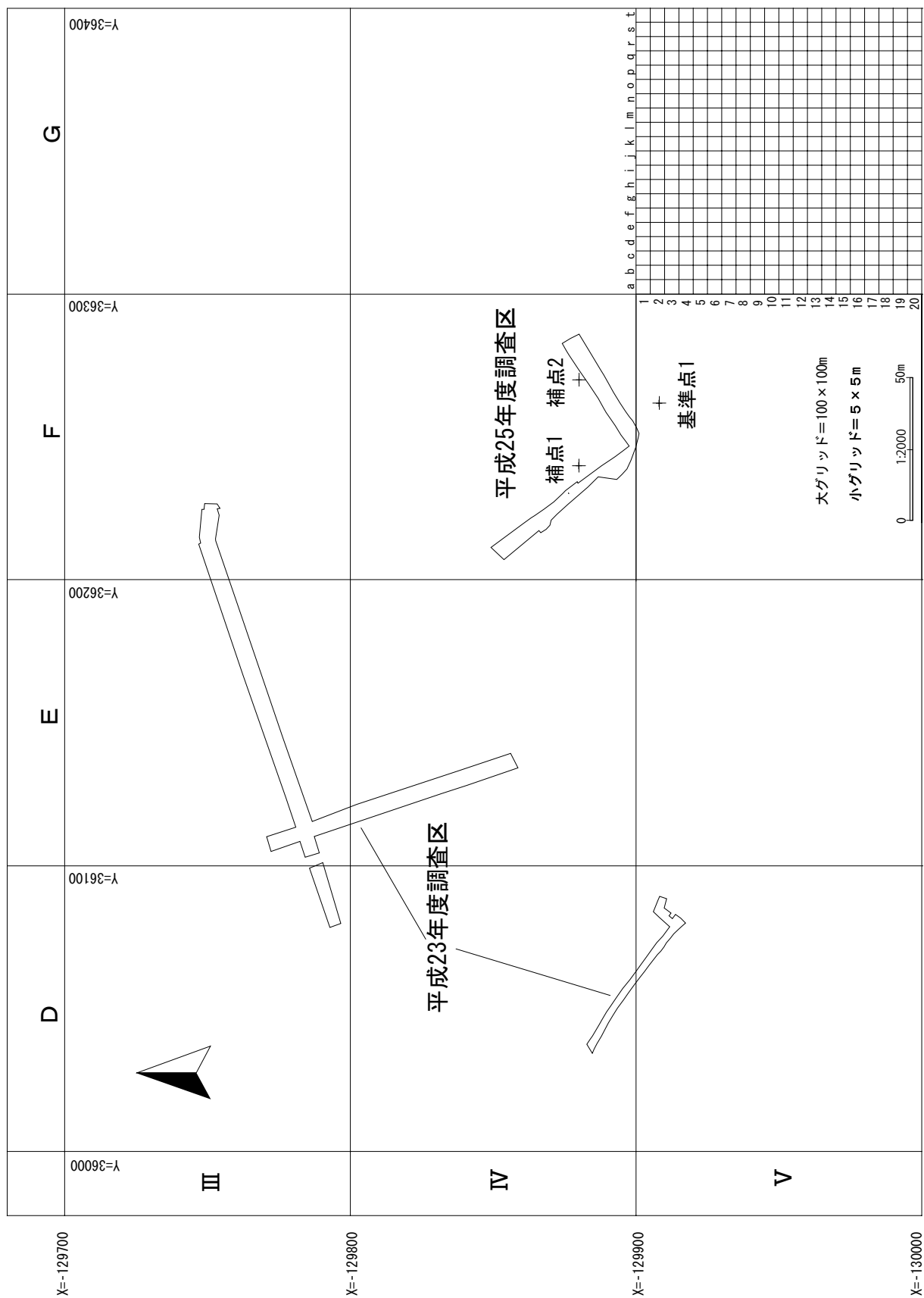
(3) 基準点の設定

遺構の実測に利用するため、調査区内外に3級基準点および補助点の打設を委託し、これをもとに調査を行った。座標値は世界測地系によるもので、成果値は以下のとおりである。

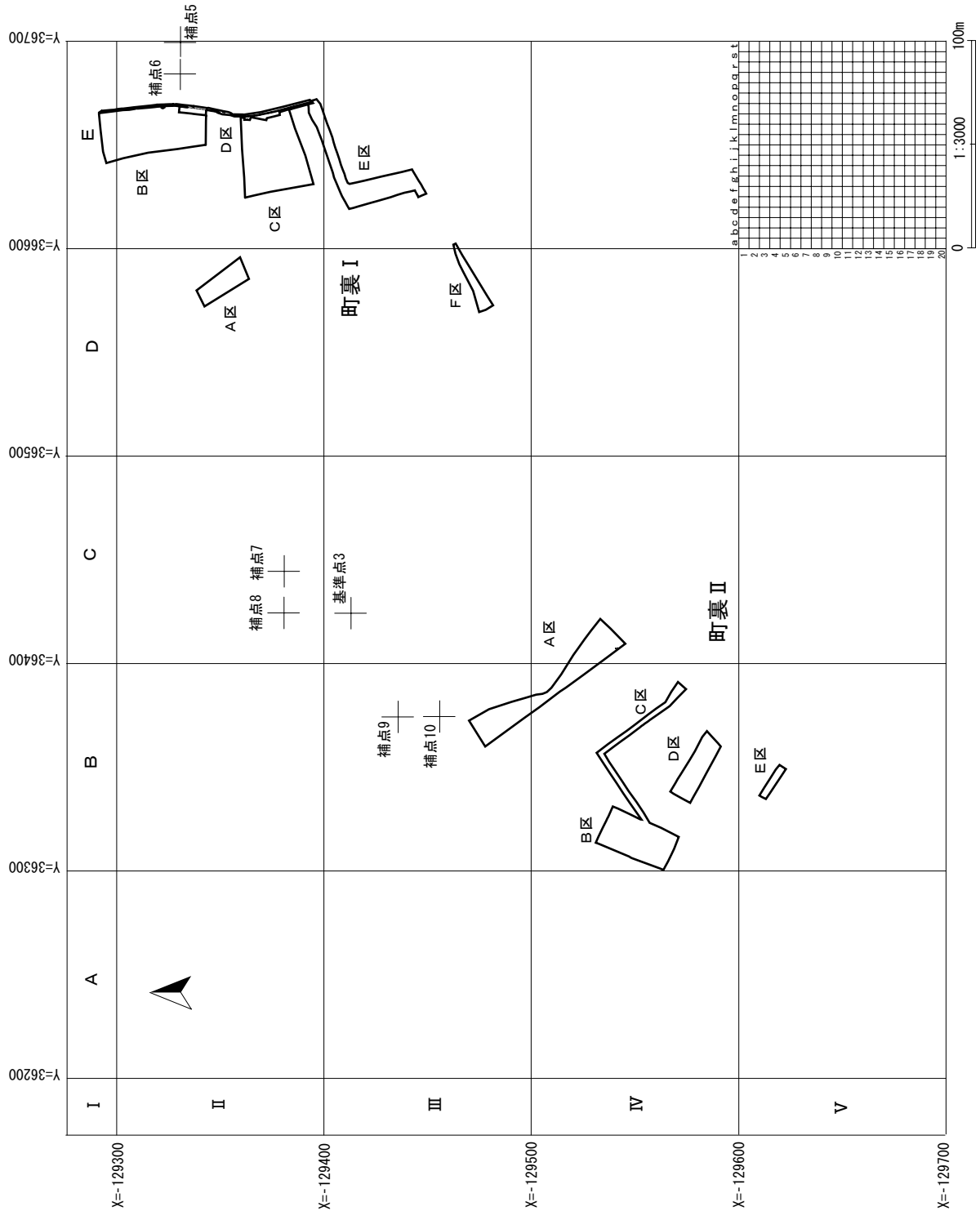
第2表 小野遺跡・町裏I遺跡・町裏II遺跡測量杭一覧

点名	X座標値	Y座標値	Z座標値	点名	X座標値	Y座標値	Z座標値
基準点1	-129,908.069	36,261.784	14.475	補点6	-129,470.000	36,620.000	13.920
補点1	-129,880.000	36,240.000	13.339	基準点3	-129,552.224	36,359.923	13.571
補点2	-129,880.000	36,270.000	13.833	補点7	-129,520.000	36,380.000	13.069
基準点2	-129,329.063	36,674.400	13.598	補点8	-129,520.000	36,360.000	13.249
補点3	-129,330.000	36,610.000	13.090	補点9	-129,575.000	36,310.000	12.894
補点4	-129,330.000	36,590.000	13.447	補点10	-129,595.000	36,310.000	12.953
補点5	-129,470.000	36,635.000	14.026				

*小野遺跡・・・基準点1、補点1・2、町裏I遺跡・・・補点5・6、町裏II遺跡・・・基準点3、補点7～10、他は町裏I隣接地



第5図 小野遺跡グリッド配置図



第6図 町裏 I 遺跡・町裏 II 遺跡グリッド配置図

1 野外調査

(4) 表土除去と遺構の検出

各遺跡の調査に先立って、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による事前の試掘調査が実施されている。この試掘により調査対象区内の堆積状況や遺構検出レベルがおおよそ把握されていたため、それを踏まえた上で、重機による表土除去を実施した。その後は人力による遺構検出を行った。

(5) 遺構の精査と実測

調査で検出された遺構は以下の手順で調査を進めた。土坑は2分法で精査を行い、溝跡・畝間状遺構は適宜に土層確認用の断面ベルトを残し、埋土の堆積状況の確認を行いながら掘り下げた。柱穴状土坑については検出時に柱痕を確認し、平面図作成（株式会社CUBICの遺構実測支援システムによる）後、セクションベルトを設け、断面確認→完掘の順で作業を行った。

(6) 写真撮影

調査記録用にデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS 6DおよびCanon EOS 7D）の2台、モノクローム6×7cm版カメラ2台を使用した。撮影にあたって、整理時の混乱を防ぐため撮影内容を記入した撮影カードを対象遺構撮影前に撮影している。その他、小野遺跡の調査終了時に併せてセスナ機による航空写真撮影を実施した。

2 室内整理の手順と方法

(1) 作業経過

各遺跡の室内整理期間は前述の例言のとおりで、整理作業は遺物の接合・復原・実測図作成・図面合成・原稿執筆・各種観察表の作成等の作業を実施した。

(2) 遺物の整理

洗浄した遺物は注記作業→重量計測→接合・復原の順に作業を行い、その過程で本書に掲載する遺物を抽出し、それらの実測図を作成し、トレースを行った。

(3) 掲載図

遺物実測図の掲載縮尺は土器・陶磁器が1/3、土製品・古銭・剥片石器1/2とした。実測図において須恵器は断面は黒色に塗りつぶし、土師器の内面黒色処理は黒色トーンを内面に使用して表した。遺構図面は、野外調査で作成した実測原図を点検の上で第二原図（修正済図）を作成し、トレース後に版下作成を行った。掲載した図の縮尺は、規模により異なるものもあることから各図版にスケールを付した。また、遺構図版内におけるスクリーントーンによる表現には、使用箇所を用例を明記した。

(4) 写真の整理

掲載している遺物写真は、当センター写真技師によりデジタルカメラで撮影した。撮影はRAWモードで撮影し、印刷段階でJPEGに変換している。

IV 小野遺跡

1 遺跡の位置

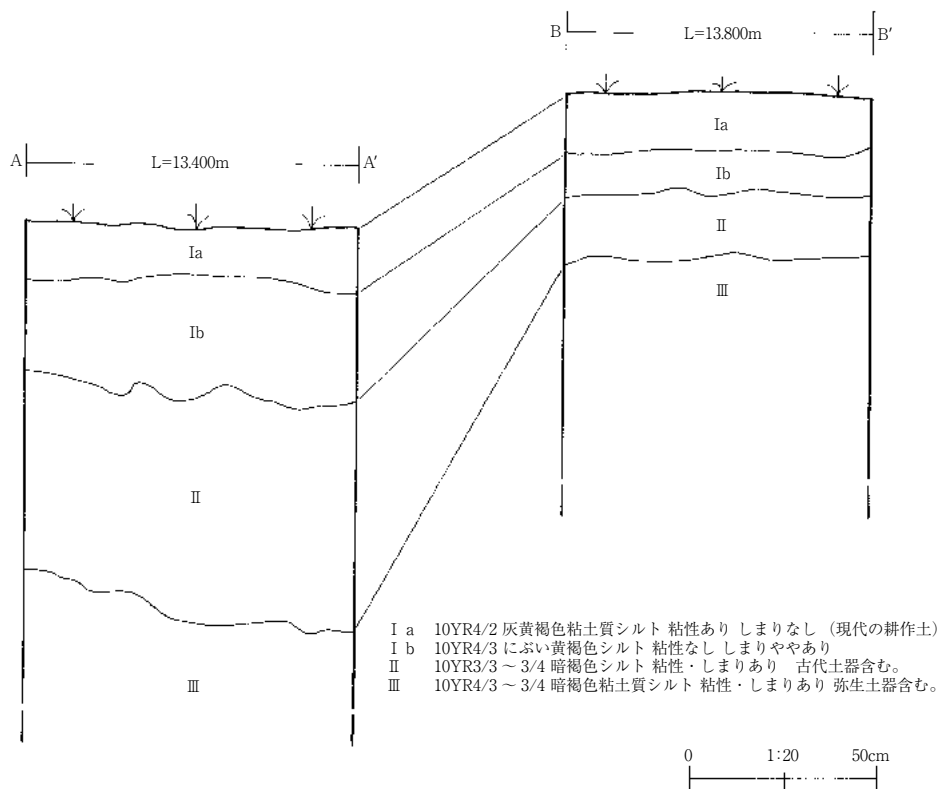
小野遺跡は、JR東北本線花泉駅の東約6kmに位置し、北上川と大江川との合流点付近に形成された微高地上に立地する。現況は水田・農道で、平成23年度に当センターで調査を行った箇所は南側にあたる。標高は14m前後である。

2 調査の概要

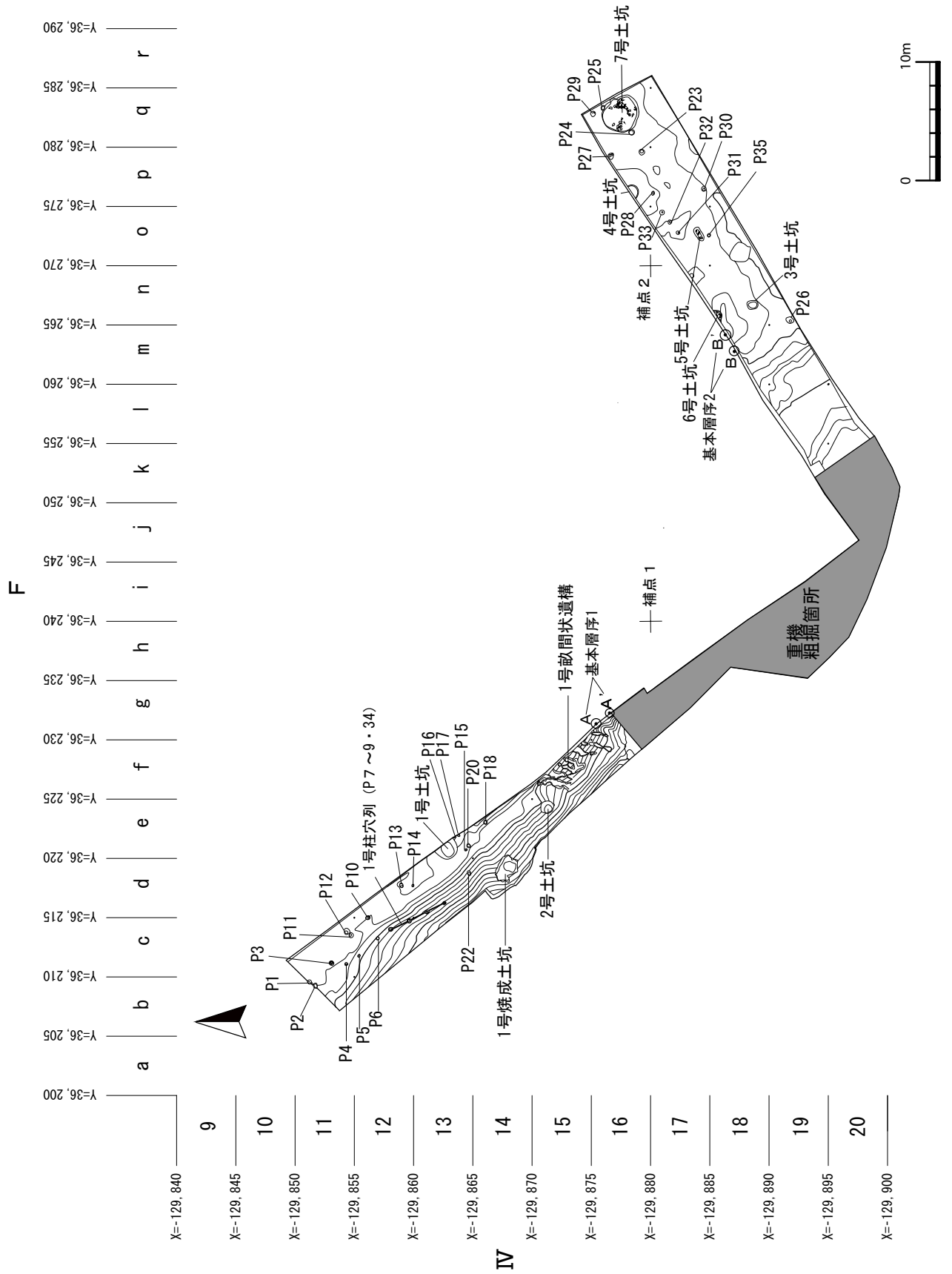
今回の調査は、ほ場整備に係わる農作業道路と用水路について、岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘結果により遺構・遺物が確認された範囲を対象として実施した。

3 基本土層

調査前の現況は水田造成のため平坦な地形であるが、旧地形や堆積状況を確認するため、2箇所に土層観察のためのトレンチを設定し、これを観察・記録した。地点による比高差はあるが、基本的な層序の違いはなかった。



第7図 基本層序



第8图 遺構配置图

4 検出遺構

(1) 検出遺構

1号畝間状遺構（第9図、写真図版3）

<位置・検出・重複関係> 調査区西側のIV F 15 f・16 f・16 gに跨がって位置し、II層で検出した。検出した耕作地面積は約13㎡で、遺構の北側は調査区外へと延びる。重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の幅は東西5.47 mで畝間は7条ある。畝間方向はN-17°-Eを向く。各畝間は長さは1.44～2.30 m、幅22～76cmで溝状を呈し、畝間間隔は22～60cmでおよそ平行に並ぶ。畝間は途中で途切れているものもあり、上面はかなり削平されていると考えられ、畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土の主体は暗褐色シルト（II層）で層中には灰白色火山灰（十和田aテフラ）を小ブロックでまばらに10～20%、また炭化物粒・土器小片などを含む。深さは6～18cmと全体に浅い。

<遺物> 畝間埋土から95.9 gの土器が出土した。大半が土師器で須恵器は微量である。いずれも小片のため、図化・掲載はしていない。

<時期> 出土した遺物の特徴から平安時代と考えられる。

(2) 焼成土坑

1号焼成土坑（第9図、写真図版5）

<位置・検出・重複関係> 調査区西側の段丘縁部に位置する。IV F 14 d・14 eに跨がり、II層で検出した。重複する遺構はない。遺構の北側が調査区外へと延びる。

<形状・規模> 形状は不整な楕円状を呈し、開口部径は2.24 × 1.70 mでおよそ全体に焼土・炭化物の広がりが確認できる。

<堆積状況> 埋土上位はにぶい黄褐色シルト主体で、中～下位は赤褐色焼土と炭化物層が混在する。

<壁・底面> 壁～底面には凸凹があり、壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは中央部やや東側付近が46cmと最も深い。

<遺物> 埋土から土師器400.7 gが出土した。このうち埋土上位の黄褐色シルト層から出土した坏2点（2・4）、甕1点（7）を掲載した。

<時期> 出土した遺物の特徴から9世紀第1四半期に属すると考えられる。

(3) 土坑

1号土坑（第10図、写真図版3）

<位置・検出・重複関係> 調査区西側のIV F 13 eに位置し、II層で検出した。遺構の一部が調査区外へと延びる。重複する遺構はない。

<形状・規模> 形状は楕円形で、規模は調査した部分で開口部径192 × 132cm、底部径115 × 95cm、深さ60cmである。

<壁・底面> 断面形状は椀形を呈し、底部に平坦面はない。壁面は下部が内反、上部は外反気味に立ち上がる。

<埋土> 埋土は自然堆積を呈し、黒褐色シルトを主体とする。壁際に黒褐色・灰黄褐色シルトを含むにぶい黄褐色シルト層が堆積する。

<遺物> 遺構埋土から土師器23.0 gが出土した。小片のため図化・掲載は行っていない。

4 検出遺構

<時期> 出土遺物から平安時代と考えられるが、いずれも小片のため詳細は不明である。

2号土坑（第10図、写真図版3）

<位置・検出・重複関係> 調査区西側のIV F 15 eに位置し、II層で検出した。重複する遺構はない。

<形状・規模> 形状は円形で、規模は開口部径140×130cm、底部径67×61cm、深さ50cmを測る。

<壁・底面> 断面形状は椀形を呈し、底部中央付近に平坦面をもち、壁は内反して立ち上がる。

<埋土> 埋土は自然堆積を呈し、暗褐色シルトを主体とする。壁際に暗褐色シルトを含む褐色シルト層が堆積する。

<遺物> 遺構埋土から土師器23.0gが出土した。小片のため図化・掲載は行っていない。

<時期> 出土遺物から平安時代と考えられるが、いずれも小片のため詳細は不明である。

3号土坑（第10図、写真図版4）

<位置・検出・重複関係> 調査区東側のIV F 18 nに位置し、II層で検出した。重複する遺構はない。

<形状・規模> 形状は不整な円形で、規模は開口部径94×72cm、底部径62×53cm、深さ8cmを測る。

<壁・底面> 断面形は皿状を呈し、底面の中央部が最深で、ここから壁に向かって緩く立ち上がる。

<埋土> 埋土はにぶい黄褐色シルトの単層で、層中に径10mmほどの礫が少量含まれる。

<遺物> 埋土から土師器26.0g、陶器1.5gが出土した。小片のため図化・掲載は行っていない。

<時期> 時期を特定しうる遺物がないことから、詳細は不明である。

4号土坑（第10図、写真図版4）

<位置・検出・重複関係> 調査区東側のIV F 16 pに位置し、III層で検出した。遺構の一部が調査区外へと延びる。重複する遺構はない。

<形状・規模> 調査は遺構の一部であるが、平面形は円形と考えられ、規模は開口部径122×60cm、底部径50×11cm、深さ60cmを測る。

<壁・底面> 逆台形状を呈し、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

<埋土> 埋土は自然堆積を呈し、全体に暗褐色シルトを主体とする。壁際には暗褐色シルト混じりのにぶい黄褐色シルト層が堆積している。

<時期> 出土遺物がないことから、詳細は不明である。

5号土坑（第10図、写真図版4）

<位置・検出・重複関係> 調査区東側のIV F 17 oに位置し、II層で検出した。重複遺構はない。

<形状・規模> 平面形は楕円形で、規模は開口部径126×58cm、底部径85×26cm、深さ30cmを測る。

<壁・底面> 断面形状は皿状を呈し、底面は平坦で、壁はやや内反気味に立ち上がる。底面付近には大きさ5～10cmほどの礫が数個混入している。

<埋土> 埋土は自然堆積を呈する。にぶい黄褐色シルトの単層で、底面からは長さ10cmほどの礫が数点出土している。

<遺物> 埋土から土師器13.8g、陶器5.0gが出土した。いずれも小片で図化・掲載には行っていない。

<時期> 検出状況や出土遺物などから近世以降と推測されるが、詳細は不明である。

6号土坑（第10図、写真図版4）

＜位置・検出・重複関係＞ 調査区東側のIV F 18 nに位置し、II層で検出した。遺構の一部が調査区外へと延びる。重複遺構はない。

＜形状・規模＞ 形状は不明で、規模は調査した一部で開口部径110×45cm、底部径88×42cm、深さ69cmを測る。

＜壁・底面＞ 断面形状はU字状を呈する。壁は外傾して立ち上がり、開口部はやや開く形状である。

＜埋土＞ 埋土は自然堆積で、層全体に暗褐色シルトを主体とし、上・中層間に褐色シルト層、中・下層間に焼土を含む暗褐色シルト層を挟む。遺構西側を中心に大きさ20～30cmの角礫が多く混入する。

＜遺物＞ なし。

＜時期＞ 出土遺物がないことから、時期の詳細は明らかではないが、検出状況から近世以降の可能性が考えられる。

7号土坑（第11図、写真図版5）

＜位置・検出・重複関係＞ 調査区東端のIV F 16 qに位置し、II層で検出した。重複遺構はない。

＜形状・規模＞ 形状はやや歪んだ円形で、規模は開口部径312×300cm、底部径297×284cm、深さ104cmを測る。

＜壁・底面＞ 断面形状は長方形で、壁は垂直気味に立ち上がる。

＜埋土＞ 埋土は人為堆積で上位が暗褐色シルト、中位が灰黄褐色シルト、下位が褐色粘土質シルトの堆積で層全体に褐色シルトがブロック状に混入する。

＜遺物＞ 埋土下部から陶器片20.2g、古銭1点が出土した。

＜時期＞ 出土遺物等から近世以降の可能性が考えられる。

(4) 柱 穴 列

1号柱穴列（第11図、写真図版5）

＜位置・検出・重複関係＞ 調査区西側のIV F 12 c・13 dに位置し、表土下のII層で検出した。柱間距離の等しいP 7・8・9・19を同一建物を構成する柱穴と考えたが、これに対応する他の柱穴は不明である。

＜形状・規模＞ 北東-南東方向に4個の柱穴で構成され、両端の長さは5.34m、各柱間距離はいずれも中心部から1.7mで、底面標高差は5cm前後の範囲にある。

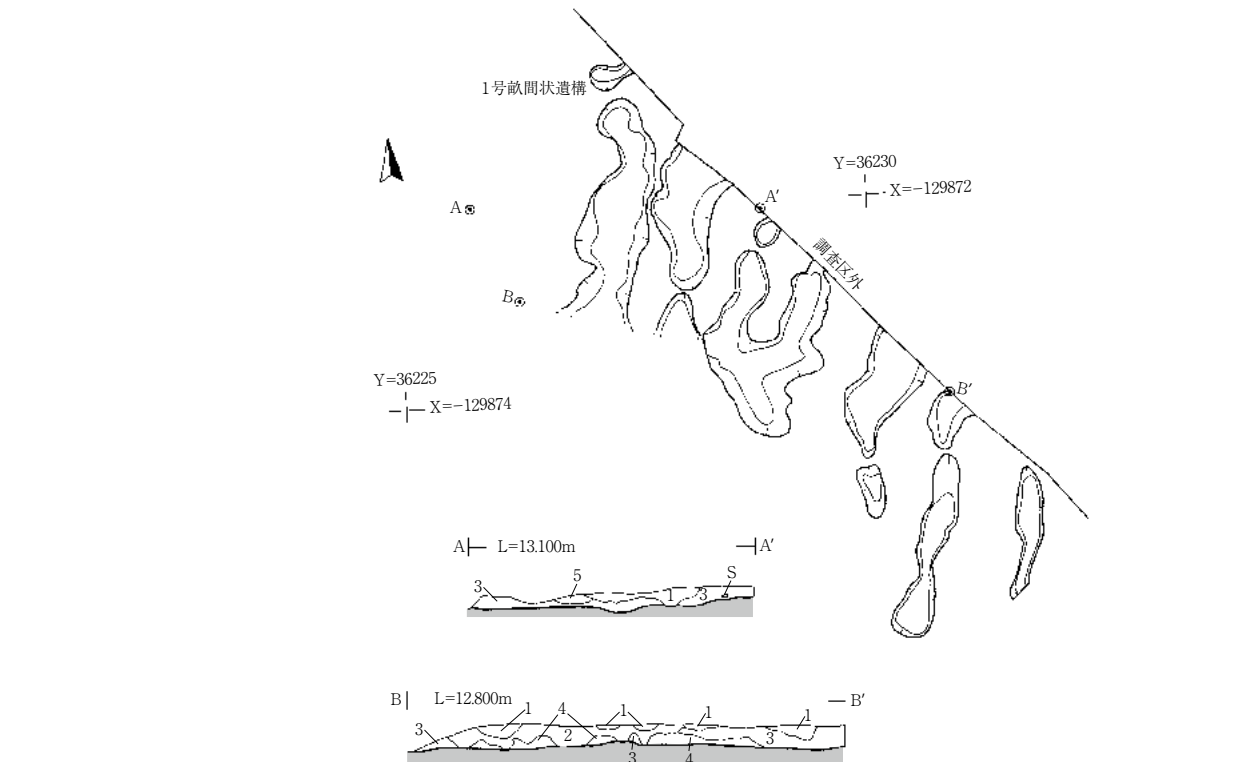
＜埋土＞ 黒褐色シルトを主体とした層で、P 7～9・16の壁際には褐色シルト層が堆積している。

＜遺物＞ P 9埋土から土師器8.2gが出土した。小片のため図化・掲載にはいたっていない。

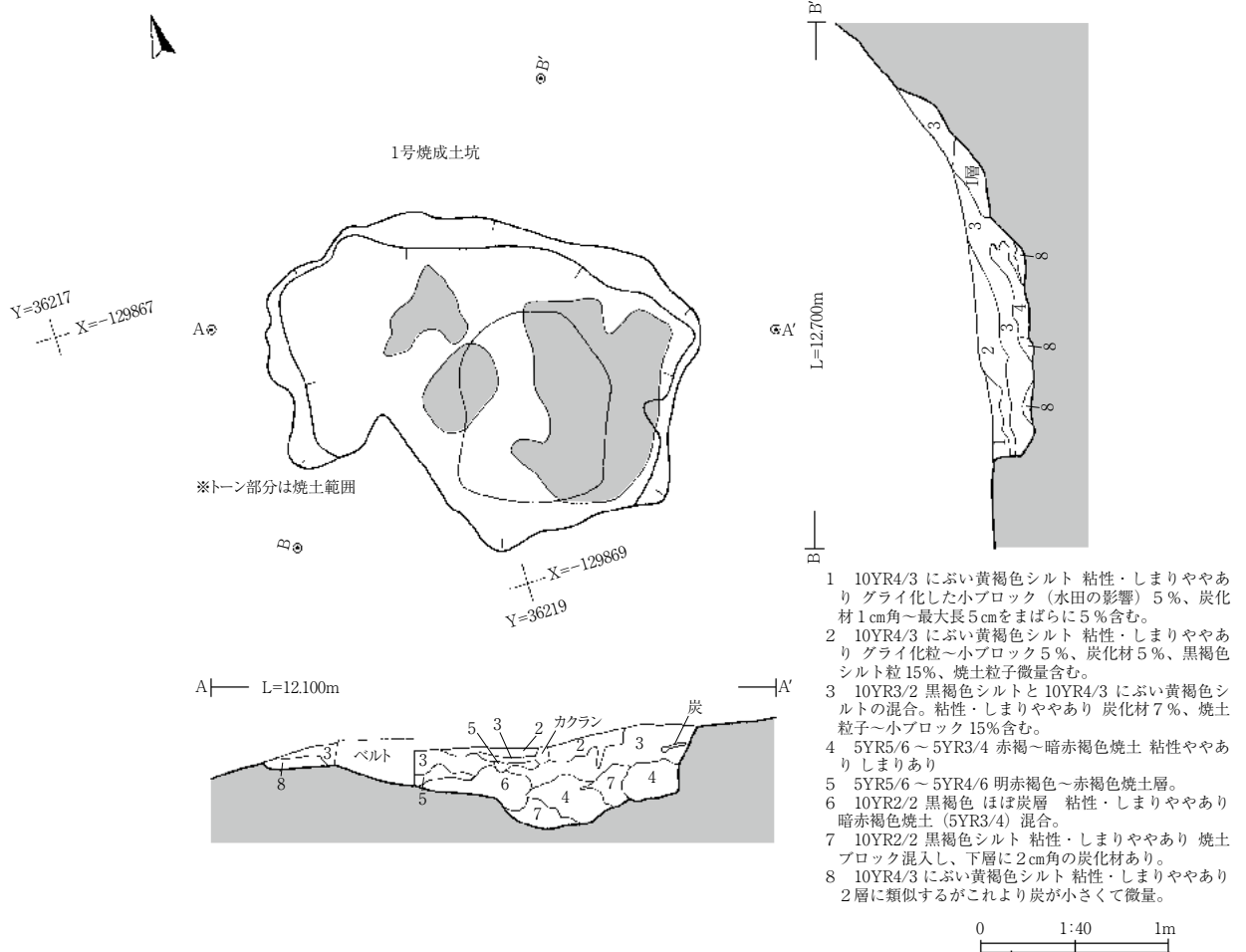
＜時期＞ 出土遺物が少ないため、詳細は不明であるが、平安時代以降と考えられる。

(5) 柱穴状土坑（第12～14図、写真図版6、第3表）

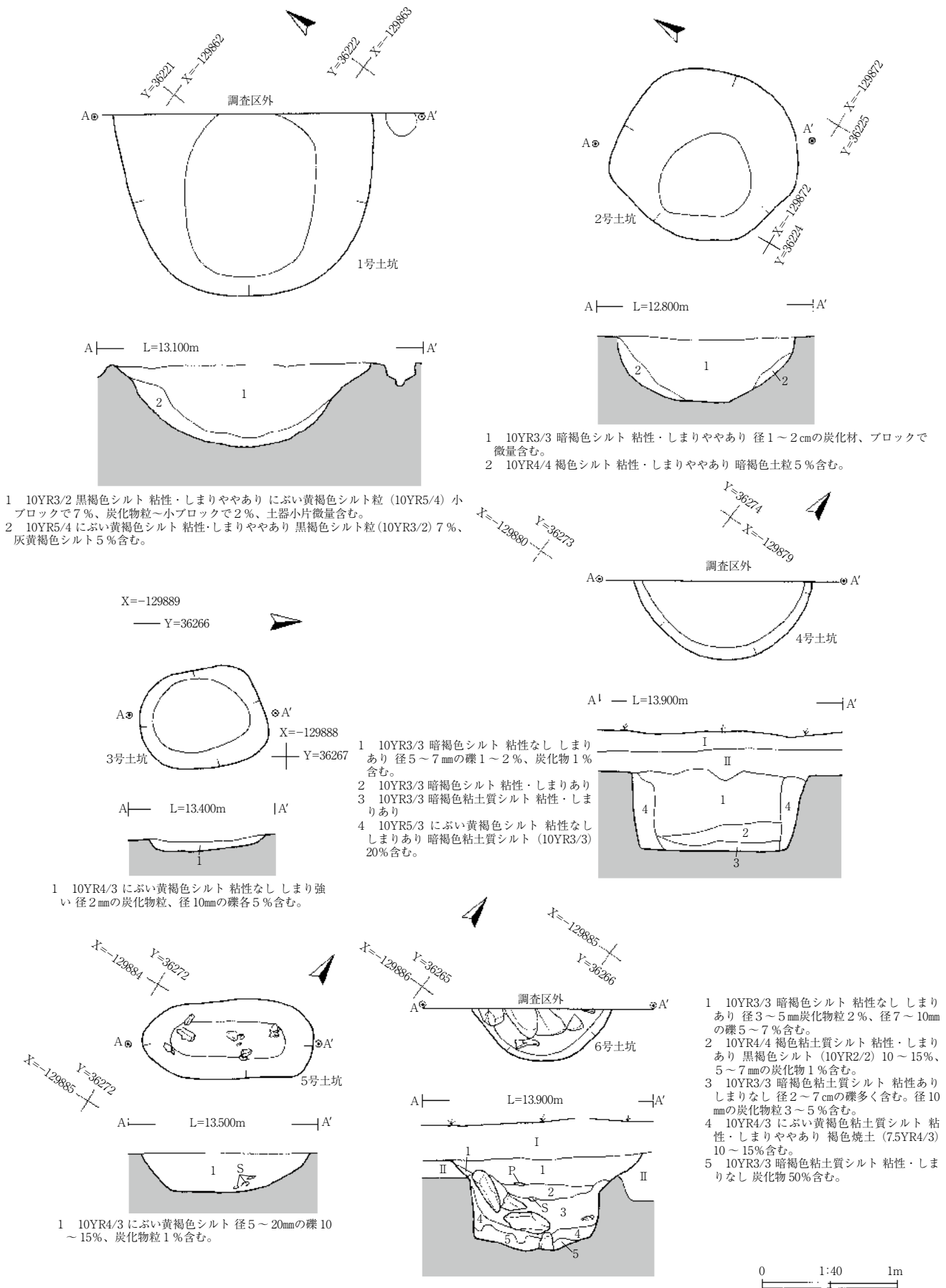
全体で33個の柱穴を検出し、このうち柱穴列とした4個を除く、29個を柱穴状土坑とした。このうちP 9・12～14・17・18から土師器の破片が少量出土した。その他詳細は第3表のとおりである。



- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり 灰白色火山灰を小ブロックでまばらに10～20%、炭化物粒・土器小片を微量、褐色シルトを含む。
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト (II層主体) 粘性・しまりややあり 灰白色火山灰粒～小ブロックをまばらに3～10%、炭粒・土器粒子微量含む。
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり 炭粒・土器粒子微量含む。
- 4 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性ややあり しまりあり
- 5 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり 地山粒～小ブロック 30%、炭まばらに20%のほか、下層にも面的に広がる。

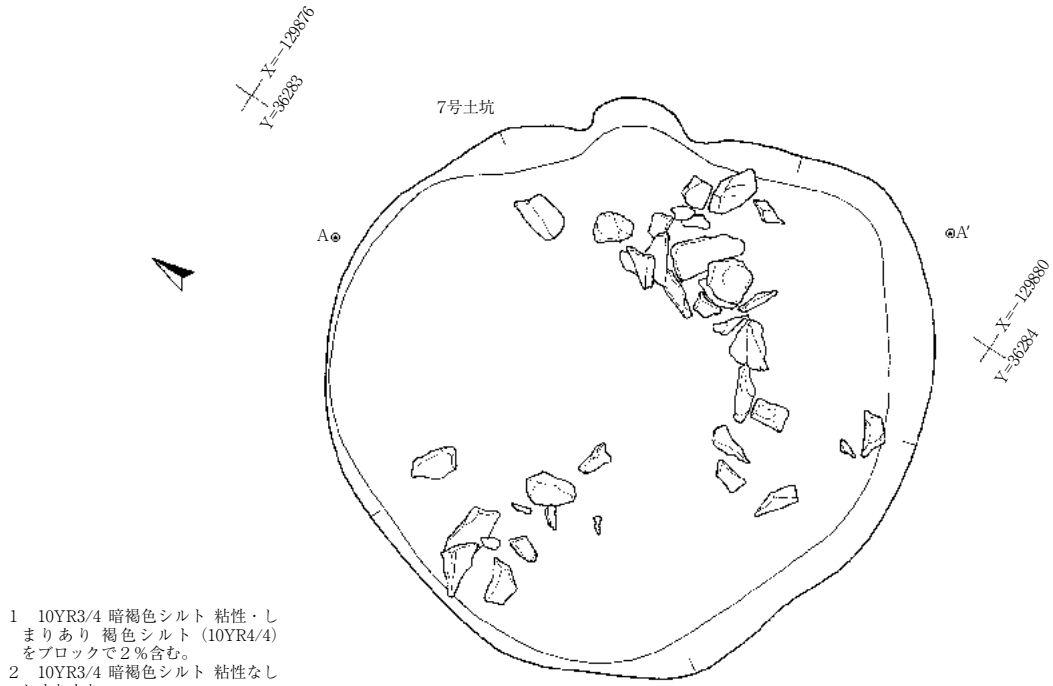


第9図 1号畝間状遺構、1号焼成土坑

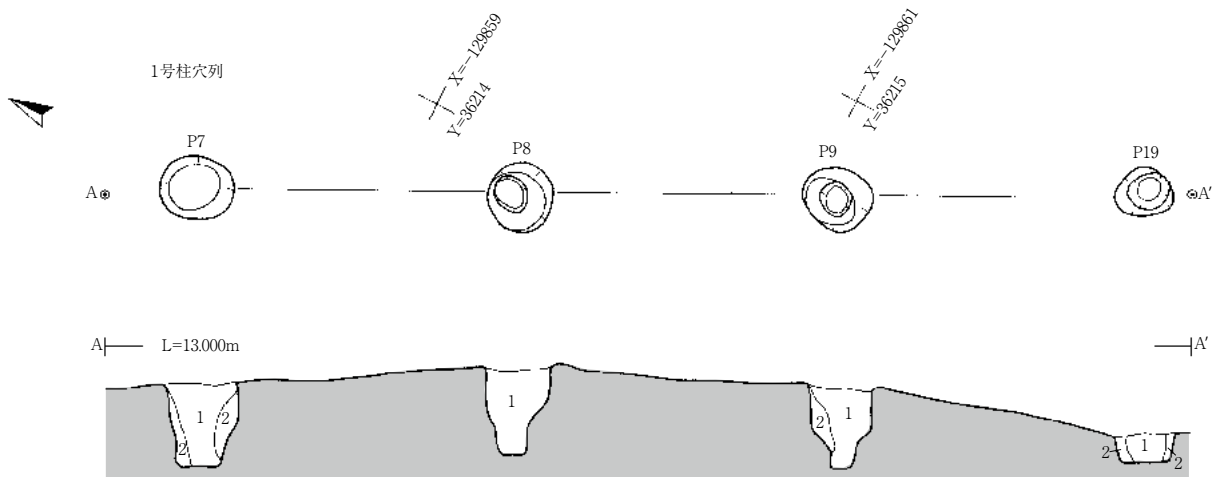
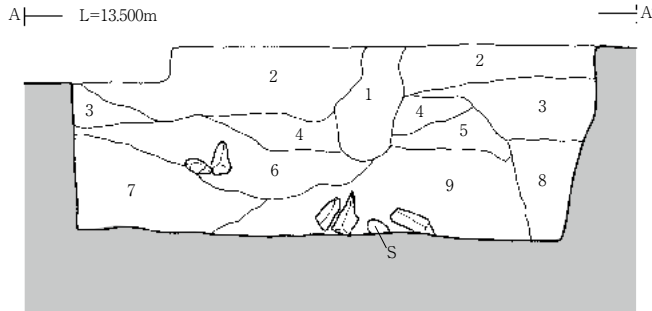


第10図 1~6号土坑

4 検出遺構



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性・しまりあり 褐色シルト (10YR4/4) をブロックで2%含む。
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性なし しまりあり
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性なし しまりあり 褐色シルト (10YR4/4) 5~7%含む。
- 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性なし しまりあり 褐色シルト (10YR4/4) 15~20%含む。
- 5 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性なし しまりあり 褐色シルト (10YR4/4) 3~5%含む。
- 6 10YR4/4 褐色シルト 粘性なし しまりあり にぶい黄橙色シルト (10YR7/2) 20~25%含む。
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘性なし しまりあり
- 8 10YR4/4 褐色粘土質シルト 粘性・しまりあり にぶい黄橙色シルト (10YR7/2) 1~2%含む。
- 9 10YR4/4 褐色粘土質シルト 50%、10YR4/2 灰黄褐色シルト 50%の混合土層。粘性なし しまりあり 層下部に長さ20~30cmの礫混入。

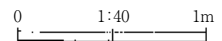


- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり 褐色シルト粒 (10YR4/4) 10%、炭粒微量含む。
- 2 10YR4/4 褐色シルト 粘性・しまりややあり 暗褐色シルト粒・灰黄褐色シルト粒を微量含む。

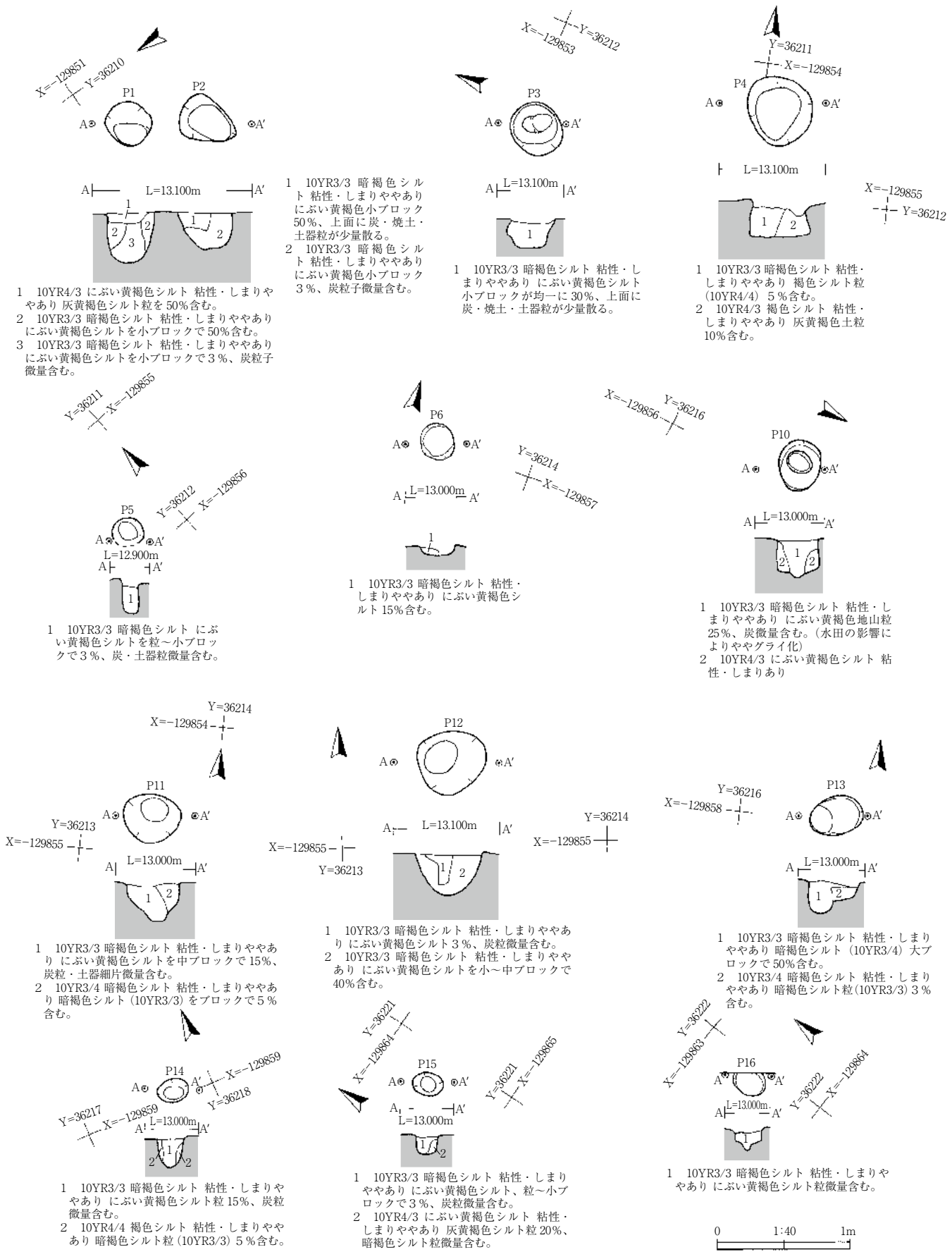
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり 褐色シルト (10YR4/4) を小ブロックで10%、炭微量含む。

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり 褐色シルト (10YR4/4) を小ブロックで15%、炭微量含む。
- 2 10YR4/4 褐色シルト 粘性・しまりややあり 暗褐色シルト粒・灰黄褐色土シルト粒を微量含む。

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり にぶい黄褐色シルト粒10%含む。
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性・しまりややあり グライ化した地山に10YR3/4のブロックが10%混入。

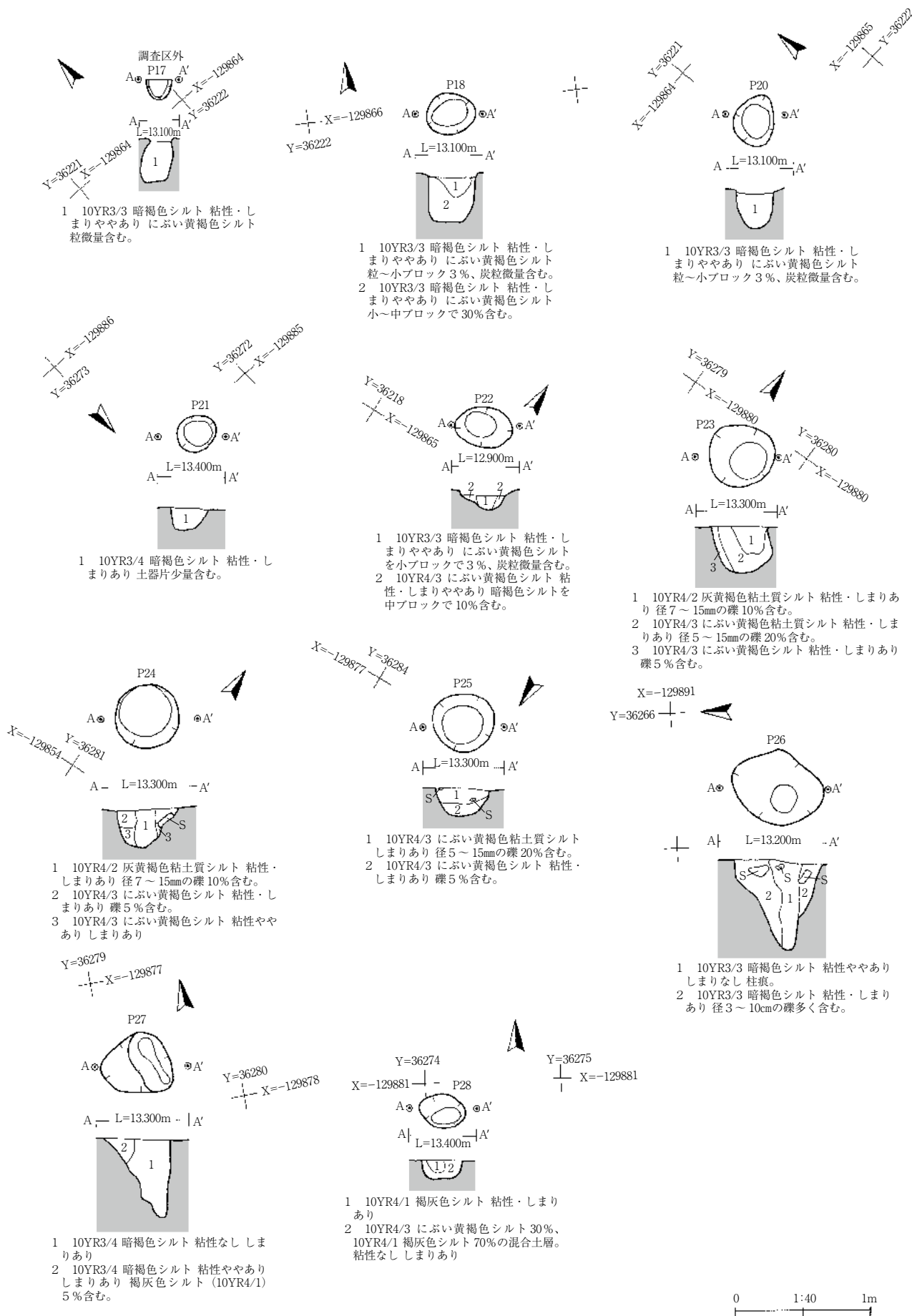


第11図 7号土坑、1号柱穴列

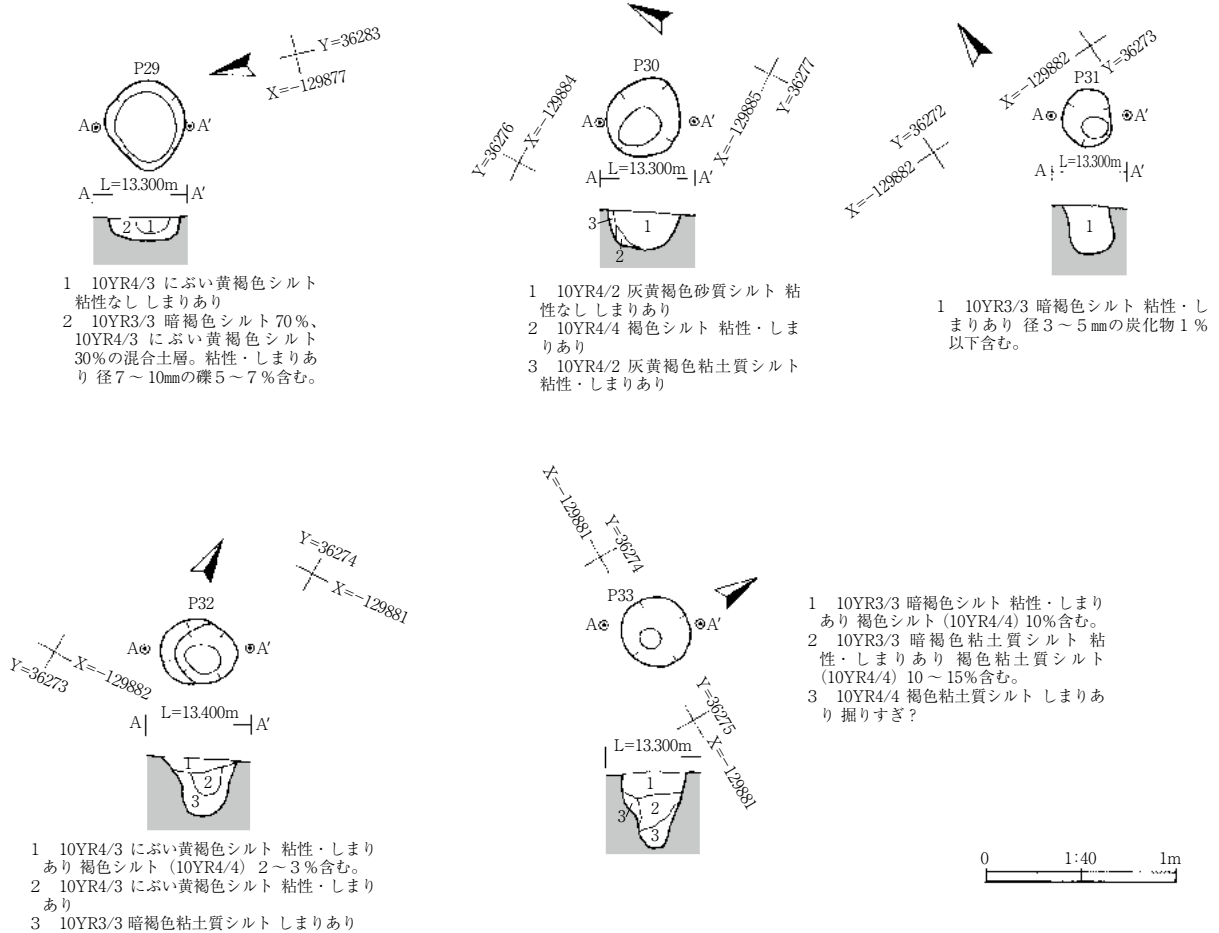


第12図 柱穴状土坑 (P1~6・10~16)

4 検出遺構



第13図 柱穴状土坑 (P17・18・20～28)



第 14 図 柱穴状土坑 (P29～33)

第 3 表 柱穴状土坑一覧

P.No	位置	径(cm)	深さ(cm)	検出面標高 (m)	備考
1	IVF11 b	36×32	36	12.912～12.932	
2	IVF11 b	40×35	28	12.918～12.942	
3	IVF11 c	40×36	24	12.902～12.914	
4	IVF11 c	50×47	29	12.764～12.800	
5	IVF12 c	24×17	23	12.774～12.804	
6	IVF12 c	26×26	13	12.614～12.636	
7	IVF12 c	49×33	45	12.816～12.828	1号柱穴列
8	IVF12 c	38×33	45	12.840～12.870	1号柱穴列
9	IVF13 d	36×35	45	12.756～12.776	1号柱穴列
10	IVF12 c	37×29	30	12.852～12.888	
11	IVF11 c	43×37	32	12.884～12.924	
12	IVF11 c	52×47	35	12.918～12.930	
13	IVF12 d	40×30	25	12.888～12.918	
14	IVF12 d	24×17	23	12.926～12.942	
15	IVF13 e	23×17	17	12.816～12.834	
16	IVF13 e	15×14	16	12.954～12.974	
17	IVF13 e	19×15	33	12.960～12.972	
18	IVF14 e	36×30	36	12.954～12.966	
19	IVF13 d	29×25	36	12.260～12.410	1号柱穴列
20	IVF13 e	38×29	29	12.792～12.948	
21	IVF17 o	30×26	16	13.146～13.178	
22	IVF13 d	42×31	16	12.720～12.738	
23	IVF16 p	49×46	33	13.154～13.164	
24	IVF16 q	47×46	31	13.112～13.146	
25	IVF16 q	45×43	22	13.104～13.158	
26	IVF19 n	68×56	65	13.022～13.064	
27	IVF16 p	48×42	60	13.142～13.184	
28	IVF17 p	34×26	13	13.200～13.218	
29	IVF16 q	47×41	12	13.160～13.184	
30	IVF17 p	44×39	21	13.104～13.142	
31	IVF17 o	30×26	26	13.182～13.202	
32	IVF17 o	40×31	30	13.124～13.204	
33	IVF17 o	38×36	39	13.176～13.198	

5 出土遺物

(1) 土師器・須恵器 (1～10)

全体で10.281kg出土し、このうち約1割にあたる10点を掲載した。1は遺構外から出土した土師器坏で成形はロクロによる。内面は黒色処理され、器体外面下端～底面にケズリ、内面にミガキが施されている。2～6は須恵器坏で2～5は1号焼成土坑内および周辺から出土した。器面調整は内外面ロクロナデで、底部の切り離し技法は2～5が回転ヘラキリ、6が回転糸切りによる。2は底部切り離し後に再調整が施されている。いずれも焼きが甘く、赤みを帯びた色調をなす。7～9は土師器甕の口縁～胴部の破片で、7は1号焼成土坑埋土、他は遺構外からの出土である。いずれも器面調整にロクロが使用され、8は外面ロクロナデ後にケズリが施されている。10は遺構外から出土した須恵器甕の胴部破片で、調整にロクロは使用されていない。

(2) 弥生土器 (11～13)

IV F 18 m・n グリッド周辺のⅢ層上面にある暗褐色シルト層から少量(146.9 g)の弥生土器破片が出土し、3点を掲載した。11・12の器体外面に炭化物の付着が認められる。

(3) 土製品 (14)

IV F 19 h グリッド付近から1点出土した。漁撈に使用されたと考えられる素焼きの土錘である。形状は紡錘状を呈し、長さは4.82cm、幅2.21cmを測る。

(4) 陶磁器 (15～26)

全体で1301.4 gが出土した。このうち12点(336.2 g)を図化し、掲載した。大半が表土からの出土で、水田耕作時の造成による影響で本来の地点を留めていないが、一部は柱穴や土坑内から見つかることから、これらも含め近世の遺構が周辺に存在すると考えられる。掲載したのは全て遺構外からの出土で、15～18は陶器で器種は15が鉢類、16・17は碗、18は片口鉢である。15は外面、16は内外面にそれぞれ白泥により刷毛目文が施されている。19～26は磁器で器種は19～21が碗で19・20が丸形、21が半筒形の形状を呈するがいずれも破片である。19は外面に梅花文、内面に四方禳文、21の見込みには五弁花文が描かれている。22～25は皿で22の見込みに五弁花文、底裏には『大明年製』の銘が書かれている。23～25の見込みには草花文が描かれている。26は瓶類と考えられ、外面に網目文、内面に、白釉が1cm幅で上下に掛けられている以外は無釉である。

(5) 古銭 (27・28)

銅銭が2点出土した。27は7号土坑の埋土下部から出土した洪武通寶で縁の一部を欠くがほぼ完形に近い。銭径は2.16cm、銭厚1.39～1.53mmを測る。28はおよそ半分が欠損しているため、1文字を欠くが、『■永通寶』と判読できる。銭径は2.54cm、銭厚1.29～1.37mmを測る。

第4表 土器観察表1 (土師器・須恵器)

No	出土地点	層位	種類	器種	部位	器面調整			計測値 (cm)			重量 (g)	備考	図版	写真
						外面	内面	底部	口径	器高	底径				
1	IVF16g	埋土	土師器	坏	口縁~底部	口縁~体部：ロクロナデ、体部 下端ケズリ	口縁~体部：黒色処理、ミガキ	ケズリ再調整	(15.6)	5.0	(7.8)	20.9		15	16
2	1号焼成土坑、IVF14d・e	埋土	須恵器	坏	口縁~底部	口縁~体部：ロクロナデ	口縁~体部：ロクロナデ	回転ヘラ切り後再調整	(14.1)	3.8	7.2	94.7		15	16
3	IVF14d・e	埋土	須恵器	坏	口縁~底部	口縁~体部：ロクロナデ	口縁~体部：ロクロナデ	回転ヘラ切り	(13.0)	3.6	(6.8)	59.2		15	16
4	1号焼成土坑、IVF13d・14d	埋土	須恵器	坏	口縁~底部	口縁~体部：ロクロナデ	口縁~体部：ロクロナデ	回転ヘラ切り	(13.8)	4.2	(7.6)	59.4		15	16
5	IVF14d・e	検出面	須恵器	坏	口縁~底部	口縁~体部：ロクロナデ	口縁~体部：ロクロナデ	回転ヘラ切り	(13.4)	3.9	7.6	137.2		15	16
6	IV19h・i	埋土、検出面	須恵器	坏	口縁~底部	口縁~体部：ロクロナデ	口縁~体部：ロクロナデ	回転糸切り	(12.9)	4.0	(6.0)	45.0		15	16
7	1号焼成土坑、IVF13d・14d・14f	検出面	土師器	甕	口縁~胴部	口縁~胴部：ロクロナデ	口縁~体部：ロクロナデ		13.8	(4.6)		115.2		15	16
8	IVF19h	埋土	土師器	甕	口縁~胴部	口縁：ロクロナデ 胴部：ロクロナデ、ケズリ	口縁~体部：ロクロナデ		(19.2)	(7.2)		61.2		15	16
9	IVF14e	埋土	土師器	甕	口縁~胴部	口縁~胴部：ロクロナデ	口縁~体部：ロクロナデ		(21.2)	(9.4)		87.0		15	16
10	IVF13d・14d~f	埋土	須恵器	甕	胴部	胴部：タタキメ	胴部：アテグ			23.1		362.5		15	16

第5表 土器観察表2 (弥生土器)

No	出土地点	層位	器種	部位	炭化物付着		重量 (g)	備考	図版	写真
					外面	内面				
11	IVF18n	Ⅲ層	深鉢	口縁部	○		11.1		16	16
12	IVF18m	Ⅲ層	深鉢	胴部	○		14.7		16	16
13	IVF18m	Ⅲ層	深鉢	胴部			19.6		16	16

第6表 土製品観察表

No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm)	重量 (g)	備考	図版	写真
14	IVF19h	盛土	土錘	長さ4.82、幅2.21、孔径値0.71×0.67	17.20		16	16

第7表 陶磁器観察表

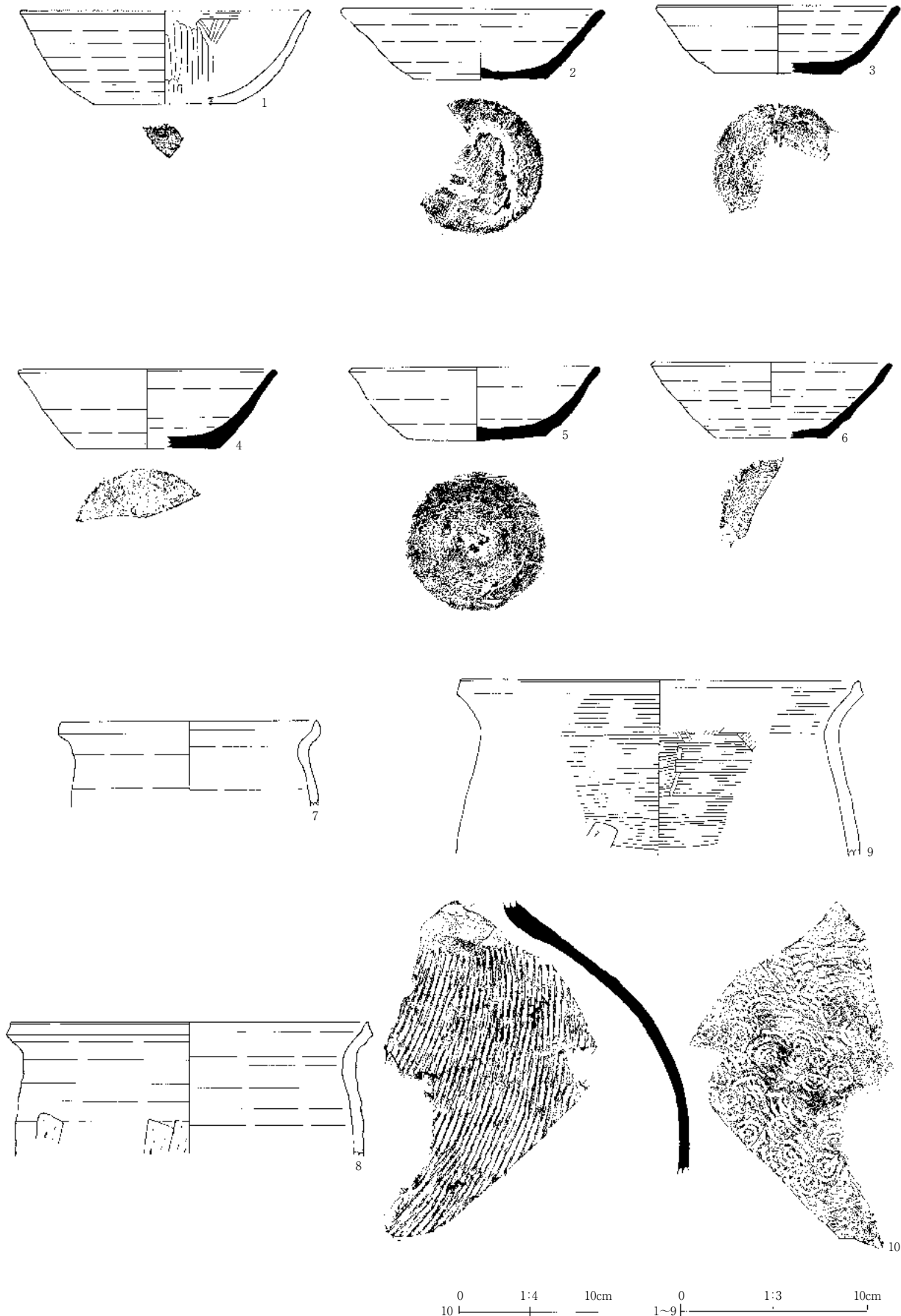
No	出土地点	層位	器種	種類	胎土	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)	文様	備考	図版	写真
15	IVF18n	Ⅱ層	鉢類	陶器	2.5YR6/4にぶい橙				22.3	外面：刷毛目	産地不明	16	16
16	攪乱		碗	陶器	7.5YR6/4にぶい橙				9.6	内外面：刷毛目	唐津	16	16
17	表採		碗	陶器	2.5YR8/2灰白色				4.1	内外面灰釉	大堀相馬	16	16
18	表採		片口	陶器	2.5YR8/2灰白色	(13.6)		(6.7)	50.5	内外面灰釉、内はほとんど剥がれている	大堀相馬	16	16
19	表採		碗・丸形	磁器	2.5Y8/1灰白	(10.0)		(4.7)	15.3	内面：四方禪文 外面：梅文	肥前	16	17
20	IVF18n	Ⅱ層	碗・丸形	磁器	2.5Y8/1灰白		(3.6)	(2.0)	11.3	見込み： 外面：二重圏線	肥前	16	17
21	IVF19j	Ⅱ層	碗・半筒形	磁器	2.5Y8/1灰白		(3.6)	(2.3)	43.9	見込み：五弁花文 外面：二重圏線	肥前	16	17
22	表採		皿	磁器	2.5Y8/1灰白				38.9	見込み：五弁花文 外底面：『大明年製』の銘	肥前	16	17
23	表採		皿	磁器	2.5Y8/1灰白		(7.2)	(1.9)	10.7	見込み：花文？	肥前	16	17
24	IVF18m	I層	皿	磁器	2.5Y8/1灰白		(12.0)	(1.9)	40.4	見込み：草花文	肥前	16	17
25	IVF20k	Ⅱ層	皿	磁器	2.5Y7/1灰白		(5.6)	(2.0)	13.2	見込み：草花文	肥前 18C	16	17
26	IVF18m	Ⅱ層	瓶類？	磁器	2.5Y8/1灰白				21.3	外面：網目文	肥前：18C	16	17

* () は口径・底径が推定値、器高は残存値を示す。

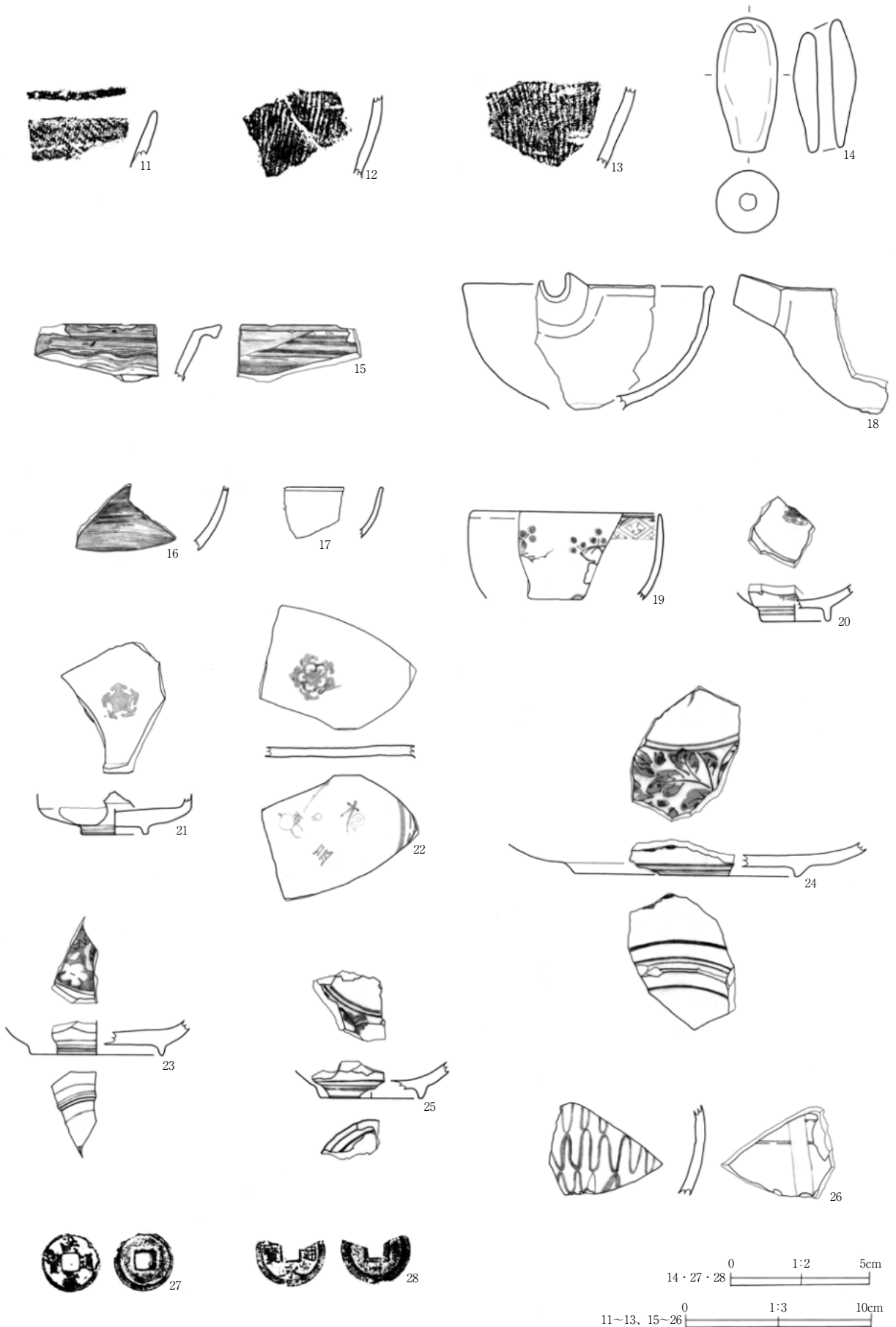
第8表 古銭観察表

No	出土地点	層位	素材	銭名	銭径〈縦〉／銭径〈横〉 (cm)	内径〈縦〉／内径〈横〉 (cm)	銭厚 (mm)	重量 (g)	図版	写真
27	7号土坑	埋土	銅	『洪武通寶』	2.16／2.16	1.83／1.88	1.39～1.53	1.87	16	17
28	IVF19k	I層	銅	『■永通寶』	■／2.54	■／1.99	1.29～1.37	1.65	16	17

* ■は欠損により不明。重量は残存値。



第 15 図 土師器、須恵器



第16図 弥生土器、土製品、陶磁器、古銭

6 ま と め

今回行なった小野遺跡の調査は、「経営体育成基盤整備事業日形地区」のほ場整備事業に伴うもので、縄文時代の遺物および平安時代～近世までの遺構・遺物が見つかった。

本遺跡の所在する一関市花泉町字町裏付近は、北上川と大江川との合流点付近に形成された氾濫平野上に立地する。現在確認できる地形では、遺跡は東の集落が存在する自然堤防上にはないが、今回の調査で、堤防の南西先端部が今回調査した範囲まで広がっていることが明らかになった。現況は水田・農道で、これらの造成のために削平・改変されたと考えられる。調査区は平成23年度に当センターで調査を行った箇所の南東にあたり、平成23年度調査区においても自然堤防高位面ほど水田造成の影響で大きく削平・改変され、旧地形を留めていなかったことが報告されており、古代の集落が自然堤防一帯に展開している可能性が指摘されていた。

今回の調査で見つかった遺構には居住を示す古代の竪穴建物はなく、畝間状遺構や焼成土坑などの生産に関わる遺構が堤防縁部にあたる斜面部で検出された。畝間状遺構の畝間埋土に十和田aテフラが含まれることから畝間状遺構の時期は10世紀前葉と考えられ、周辺に集落が存在したのは9世紀前葉であることから、この間に洪水による地形改変があり、居住域として利用できなくなった可能性も考えられる。一方で堤防縁部の斜面で検出した焼成土坑や小野遺跡に隣接する小野Ⅱ遺跡では隣接する台地裾の低位面で古代の水田が検出されていることから、自然堤防という限られた空間において居住域は堤防の高位に展開し、居住に不適な地形である堤防縁辺の斜面部や洪水の影響を受けやすく堤防に隣接する低位面においては主に畠や水田、土器焼成など居住以外に土地を利用していた可能性が考えられる。

遺物に関しては、焼成土坑のある調査区西側から須恵器を中心に9世紀前葉の遺物が出土しており、須恵器の底部切り離し技法が回転ヘラキリであること、土師器の体部外面下端～底部に回転ヘラケズリによる調整が施されることなどの特徴を有するが、これは北側に隣接する平成23年度調査区における竪穴建物（S I 01・S I K 01）から出土した土器と同様である。また、土錘も1点出土しており、遺跡周辺の河川で日常的に漁撈活動を行っていたことが考えられる。他には少量であるが弥生土器が調査区東側のIV F 18 mグリッド付近を中心に散布的に出土している。

以上のことから、今回の調査区が弥生時代は土器散布地、古代は畠耕作地、また近世においては柱穴・土坑などの遺構が検出され、調査区を含めた周辺に集落があった可能性が考えられ、断続的に生活に利用されていた場所であることが明らかになった。

引用・参考文献

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012『小野遺跡・小野Ⅱ遺跡・中神四日市遺跡発掘調査報告書』（岩文振埋蔵文化財調査報告書第617集）

V 町裏 I 遺跡

1 遺跡の位置

遺跡は、JR東北本線花泉駅の東約6.5kmに位置し、北上川により形成された自然堤防上の北東縁辺部に立地する。現況は畑地・水田で標高は14m前後である。

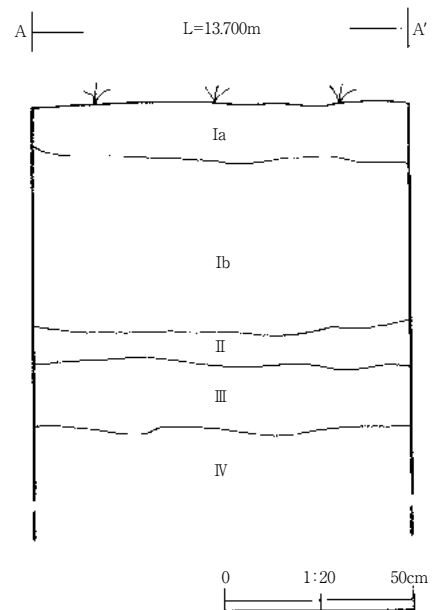
2 調査の概要

今回の調査は、ほ場整備に係わる農作業道と用水路について、岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘結果により事業予定地内に設置したトレンチから遺構・遺物が確認された範囲を対象として実施した。

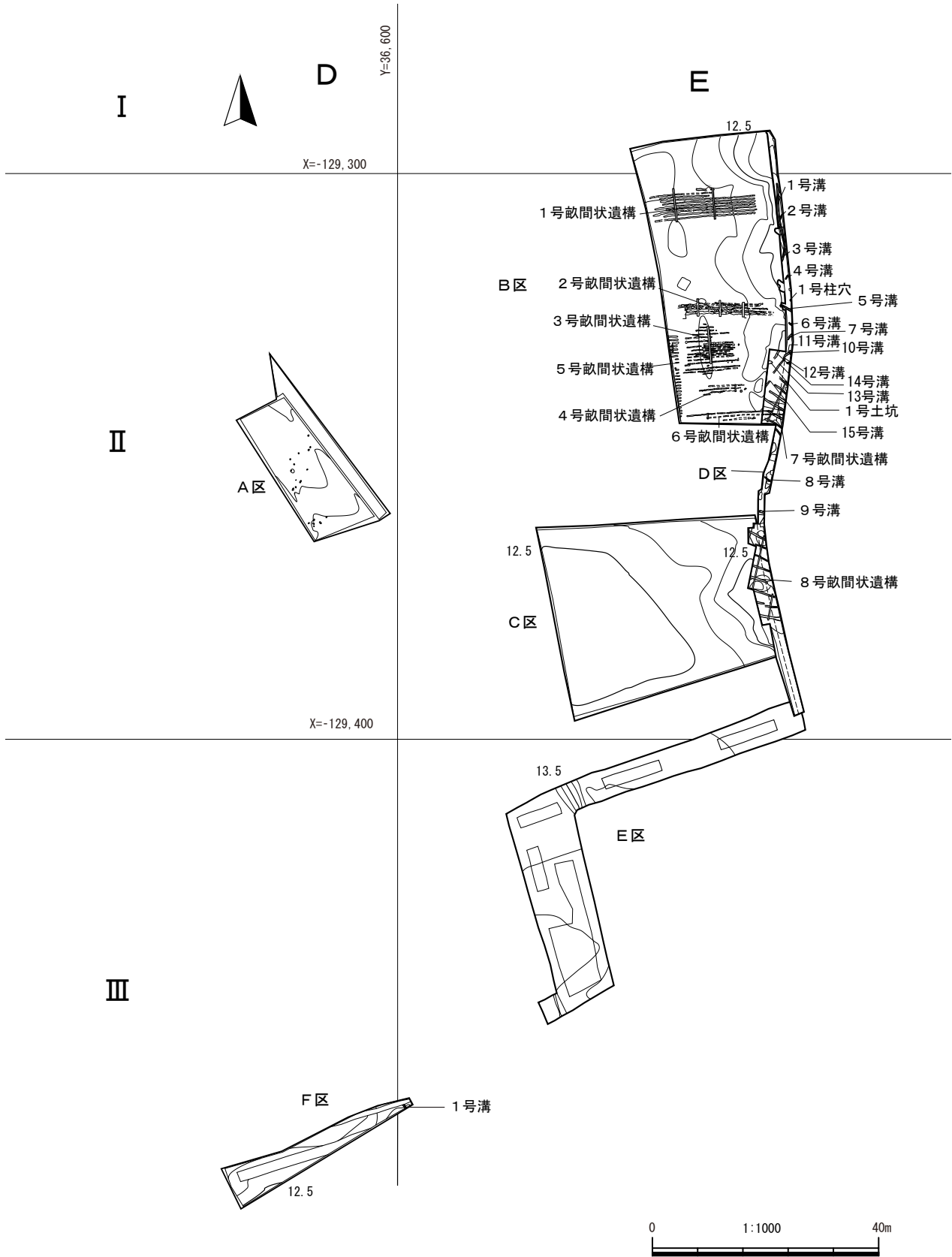
3 基本土層

調査前の現況は水田および畑地であったため、造成により平坦な地形となっていた。旧地形や堆積状況を確認するため、各調査区において土層を確認した。遺構は旧地形において最も標高のある調査区北東にあるB区に集中しており、B区2箇所にて土層観察のためのトレンチを設定し、これを観察・記録した。地点による比高差はあるが、基本的な層序の違いはなかった。

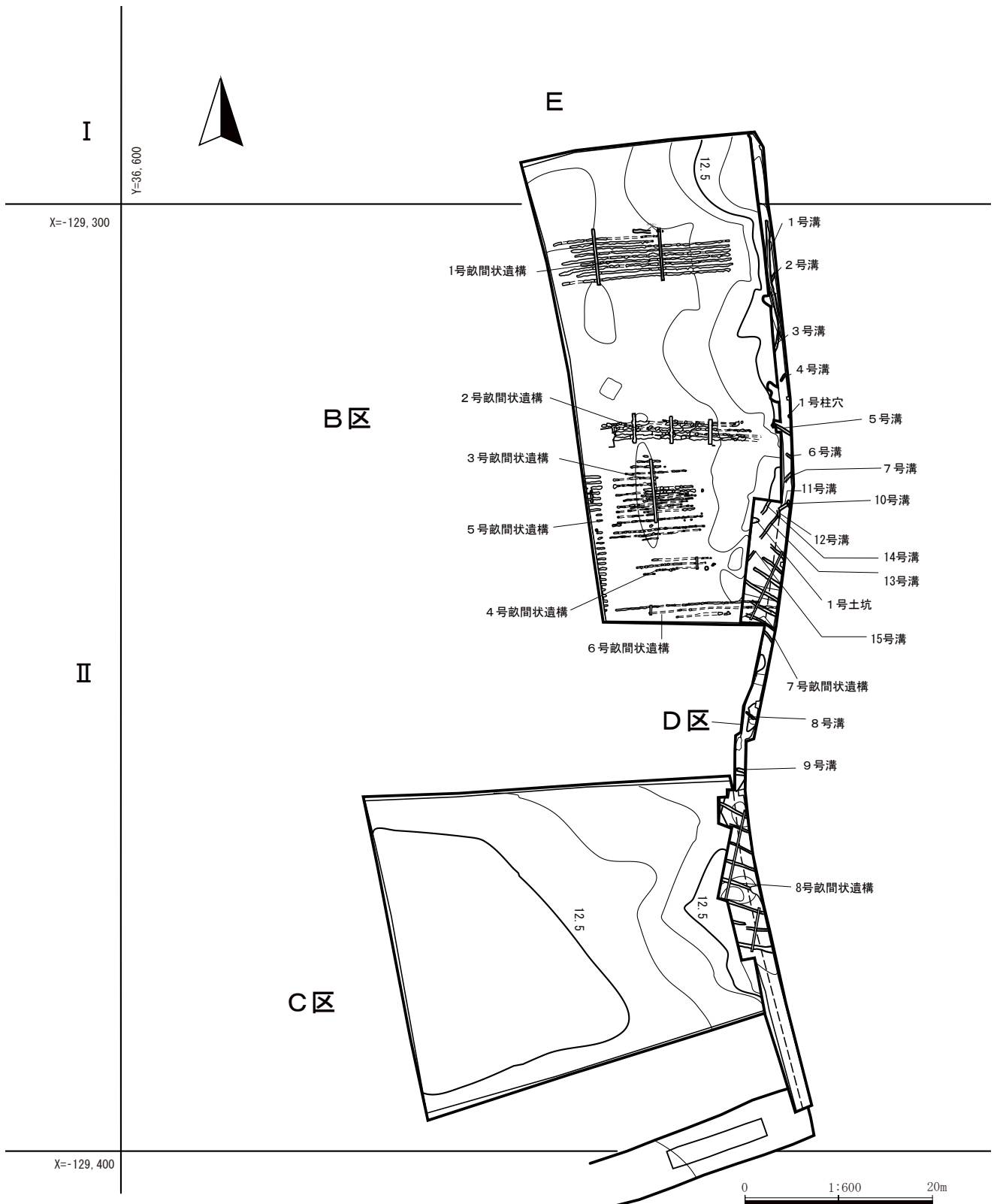
- I a 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性なし しまりあり 表土。
- I b 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性なし しまりあり
- II 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト やや砂質 粘性なし しまりあり 近世遺物出土。
- III 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし しまりあり 堆積時期不明。
- IV 10YR4/4 褐色シルト 粘性ややあり しまりあり 古代遺物出土。畝間埋土に十和田a テフラ含む畝間状遺構の検出面。



第17図 基本層序



第 18 図 遺構配置図 (全体)



第19図 遺構配置図 (B・C区)

4 検出遺構

(1) 畝間状遺構

1号畝間状遺構（第20図、写真図版8・9）

<位置・検出・重複関係> B区北側のⅡE1i・2i～mグリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。耕作地面積は約75㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の長さは東西18.72m、幅は最大4.48mで畝間9条が平行に並ぶ。畝間方向はN-86°-Eで東西方向を向く。各畝間の長さは畝間1～7が15.92～18.40mと近い値であるのに対し、畝間8が8.84m、畝間9が11.04mと東側が短い。畝間は幅が平均22～32cmで溝状を呈し、畝間間隔は14～52cmで幅があるが、およそ30cm平均で平行に並ぶ。畝間は途中で途切れているものもあり、遺構上面はかなり削平されていると考えられる。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土の主体はⅡ層の明黄褐色砂質シルトでⅢ層ブロックを40%含む。ブロックは地点により割合が異なる。

<遺物> なし。

<時期> 検出状況から10世紀以降～近世までの時期に属すると考えられる。

2号畝間状遺構（第21図、写真図版9）

<位置・検出・重複関係> B区中央のⅡE5k～nグリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。耕作地面積は約44㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体で畝間5条が平行に並び、規模は長さ19.20m、幅2.08mである。畝間はほぼ東西方向を向く。各畝間の長さは1～3の西端、畝間1と2、4と5の東端がそれぞれ揃うが、8.08～17.88mの範疇で一定ではない。畝間は幅10～44cmで溝状を呈し、畝間間隔は最大で46cmあるが、交錯するものや途中で途切れているものもあり一定ではない。遺構上面は削平を受けていると考えられ、畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土の主体はⅡ層の明黄褐色砂質シルトでⅢ層ブロックを含む。ブロックは地点により割合が20～50%と異なる。

<遺物> 土器63.9g、陶磁器280.9gが畝間埋土から出土した。いずれも小片で図化・掲載にはいたっていない。

<時期> 畝間から出土した遺物の年代観から近世と考えられる。

3号畝間状遺構（第22図、写真図版10）

<位置・検出・重複関係> B区中央から南側のⅡE7k～7lグリッドを中心に跨がって展開し、Ⅲ層で検出した。耕作地面積は約88㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体で畝間21条が平行に並び、規模は長さ10.08m、幅9.32mである。畝間方向はN-84°-Eを向く。各畝間の長さは60cm以下のものから9mを超えるものまで様々であるが、畝間1・2、13・15、16・17、19・20のように2条1対で同じものがある。畝間幅は18～24cmで溝状を呈し、畝間間隔は最大で92cmあるが、交錯するものや途切れているものもあり、一定ではない。遺構上面は削平を受けていると考えられ、畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土の主体はⅡ層の明黄褐色（東側では浅黄色）砂質シルトでⅢ層ブロックを含む。ブロックは地点により割合が10～30%と異なる。

<遺物> 畝間埋土から磁器1点(4)が出土した。

<時期> 出土した遺物の年代観から近世と考えられる。

4号畝間状遺構(第23図、写真図版10)

<位置・検出・重複関係> B区南側のⅡE8k～mグリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。耕作地面積は約12㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の規模は7.88×1.64mで畝間4条からなる。畝間方向はN-86°-Eでほぼ東西を向く。各畝間の長さは畝間1が1.24m、畝間2が4.50m、畝間3が7.28m、畝間4が6.22mであるが、20～30cmほどの掘方痕や染み状のプランが途中で途切れながら直線に連なって溝状を呈するもので、畝間幅も20cm以下と狭いことから上面はかなり削平されていると考えられる。畝間間隔は畝間1・2間が20cmで、2・3間が36cm、3・4間が34cmで平行に並ぶが畝間端部は揃わない。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土は明黄褐色シルトと黒褐色シルトの混合土で、下層ほど暗褐色シルト(Ⅲ層由来)を多く含む。

<遺物> なし。

<時期> 遺物が出土していないため、詳細は不明であるが、検出状況から近世の可能性が考えられる。

5号畝間状遺構(第23図、写真図版11)

<位置・検出・重複関係> B区南西側のⅡE6j～9jグリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。遺構の西側は調査区外へと延びる。また、確認はできないが南側にも広がっている可能性がある。検出した耕作地面積は約32㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の規模は調査区外へと延びるため不明であるが、南北幅18.44mで畝間は24条を確認した。畝間方向はN-88°-Eでほぼ東西を向く。検出した畝間の長さは0.45～1.72m、幅14～35cmで溝状を呈し、畝間間隔は30～38cmでほぼ等間隔で平行に並ぶ。畝間は途中で途切れているものもあり、畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 畝間埋土は明黄褐色砂質シルト主体で、径10～20mmの灰黄褐色・黒褐色シルトブロックを20%程含み、また、畝部分に隣接する壁断面において畝の耕作土と考えられる黄褐色シルト層の堆積を確認した。

<遺物> 畝間16の埋土から土師器11.5g、他に剥片石器1点、陶磁器0.8gが出土した。いずれも小片のため、図化・掲載はしていない。

<時期> 検出状況から近世の可能性が考えられる。

6号畝間状遺構(第24図、写真図版11)

<位置・検出・重複関係> 調査区西側のⅡE9k～nグリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。耕作地面積は約25㎡で、遺構の南側は調査区外へと延びる可能性がある。

<規模> 遺構全体の規模は長さ17.30m、幅1.38mで畝間は3条からなる。畝間方向はN-84°-Eでほぼ東西を向く。各畝間の長さは畝間1が4.92m、畝間2が13.52m、畝間3が15.10m、畝間幅12～29cmである。各畝間の残存状況であるが、畝間3は遺構の一部が途切れるものの溝状に残っている。一方、畝間1・2は遺構の大部分が削平され、20～30cmほどの掘方痕が直線上に確認でき

4 検出遺構

るのみである。畝間間隔は44～52cmで畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土は黒褐色シルトと明黄褐色シルトの混合土層で、下層に暗褐色シルト（Ⅲ層由来）がブロックで含まれる。

<遺物> なし。

<時期> 遺物が出土していないため、詳細は不明であるが、検出状況から近世の可能性が考えられる。

7号畝間状遺構（第24図、写真図版11）

<位置・検出・重複関係> B区南東端のⅡE 8n～9nグリッドに跨がって位置し、Ⅳ層で検出した。耕作地面積は約38㎡で、遺構の東側は調査区外へと延びる。重複する遺構はない。

<規模> 検出した遺構の規模は幅9.08m、長さ5.32mで畝間7条である。畝間方向はN-57°-Wで北西-南東を向く。各畝間の長さは確認できた範囲では1.42～4.08m、幅20～38cmで溝状を呈し、畝間間隔は畝間6・7間が56cmで他は104～108cmでおよそ平行に並ぶ。畝間の西側は確認調査のため、精査を実施していない。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土は明黄褐色シルトを主体とし、十和田aテフラ5～20%、暗褐色シルト（Ⅲ層由来）ブロックを20～30%含む。

<遺物> 畝間埋土から96.0gの土師器が出土し、このうち1点（1）を掲載した。

<時期> 畝間埋土に十和田aテフラを含むことから、10世紀初頭と考えられる。

8号畝間状遺構（第25図、写真図版11）

<位置・検出・重複関係> C区東側のⅡE 13～16m・14～16nグリッドに跨がって位置し、Ⅳ層で検出した。遺構の東側は調査区外、西側は工事を行う際の掘削深度に及ばないことから、未調査である。耕作地面積は約60㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の幅は13.75mで畝間は8条で平行に並ぶ。畝間方向はN-81°-Wで北西-南東を向く。各畝間の長さは2.72～4.0m、幅は畝間8が65cmと幅広であるが、他は23～28cmの範疇である。畝間間隔は112～180cmで、畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土は明黄褐色シルトを主体とし、十和田aテフラ3～10%、暗褐色シルト（Ⅲ層由来）ブロックを10～25%含む。

<遺物> 畝間埋土から14.0gの土師器片が出土した。いずれも小片のため、図化・掲載はしていない。

<時期> 畝間埋土に十和田aテフラを含むことから、10世紀初頭と考えられる。

(2) 土 坑

1号土坑（第27図、写真図版12）

<位置・検出・重複関係> B区南東のⅡE 7nに位置し、Ⅳ層で検出した。確認調査範囲のため、検出のみの調査である。重複する遺構はない。

<形状・規模> 形状は楕円状と推測される。検出した規模は開口部径192×132cm、底部径115×95cmである。

<埋土> 精査を行っていないので堆積状況は不明である。黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色シルトが少量混入しているが、隣接する遺構埋土に含まれている十和田aテフラは混入していない。

<遺物> なし。

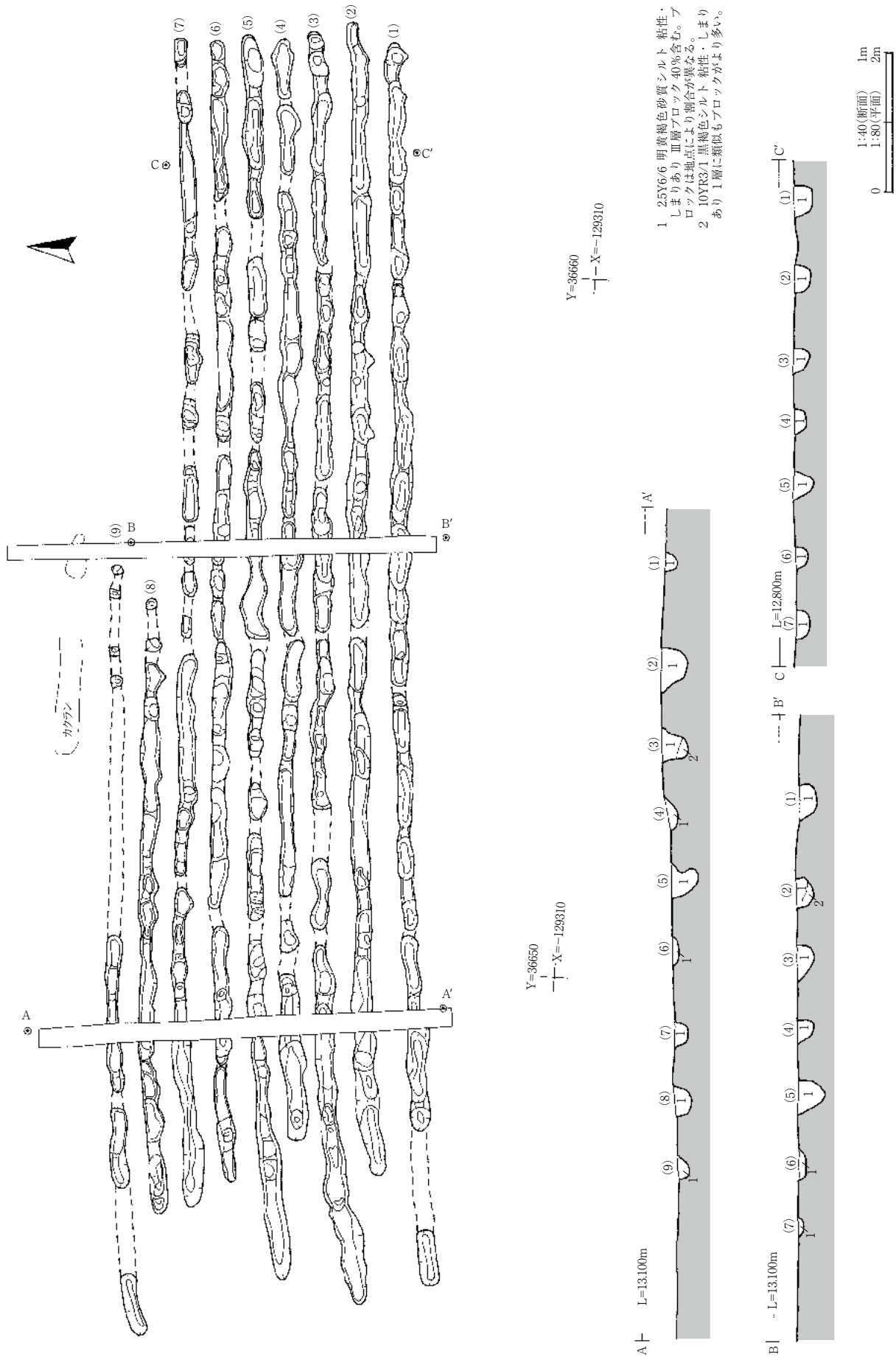
＜時期＞ 検出状況から平安時代の遺構である可能性が考えられる。

(3) 溝 (第26・27図、写真図版12、第9表)

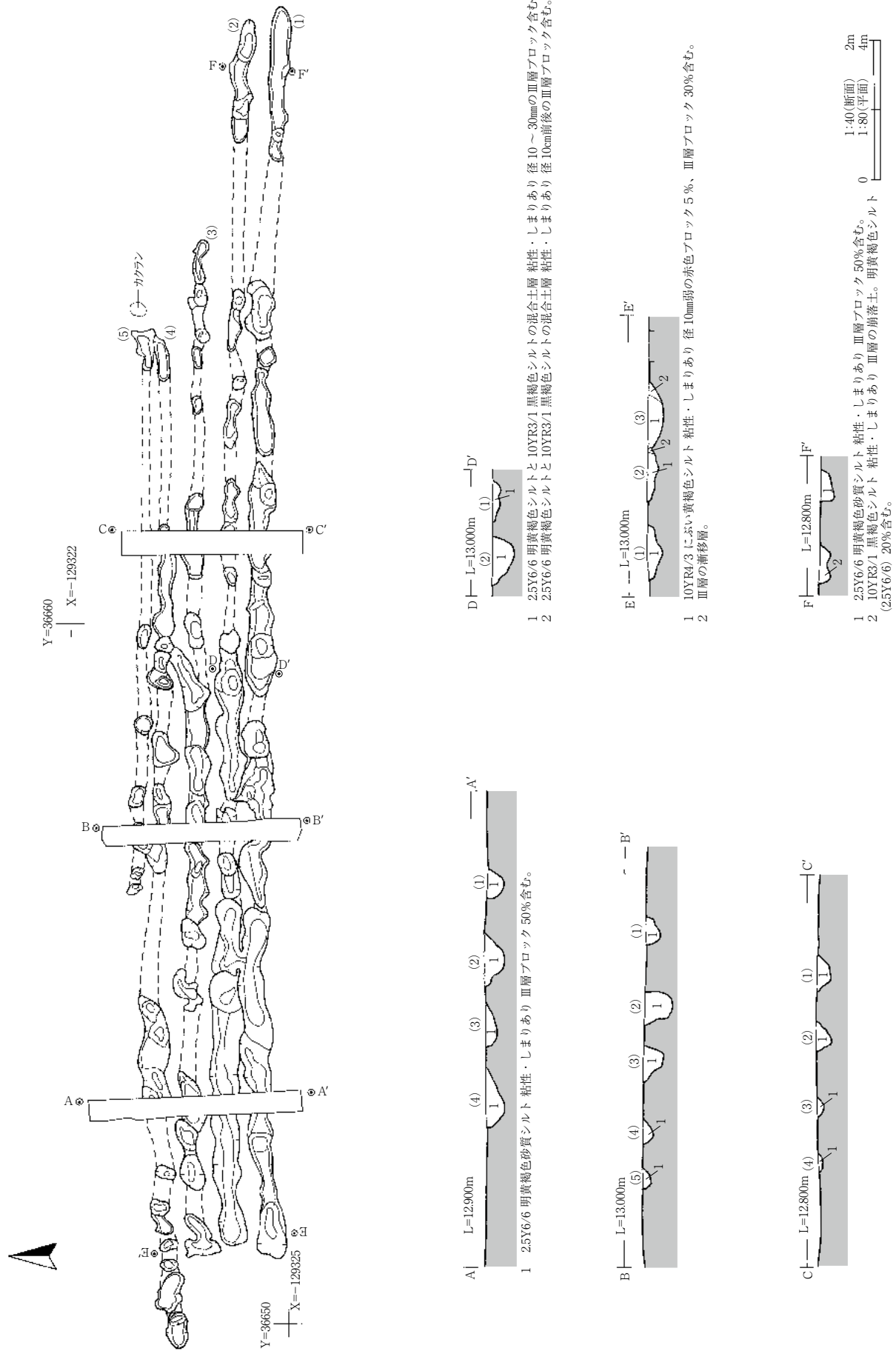
全体で16条検出した。調査区別では16号溝がF区、他はすべてB区およびその周辺で検出した。いずれも遺構の一部を検出・精査したにすぎず、全長は不明である。2～15号溝は幅が狭く細長い小溝で、畝間状遺構である可能性があるが、遺構の大半が調査区外にあることや、検出のみで掘削(精査)に及んでいないこと、またこれらが、単独で検出されていることなどから遺構の性格を断定することができなかつたため溝とした。このうち2～11号溝は埋土に十和田aテフラが含まれることから、時期は10世紀初頭と考えられる。

第9表 溝一覧

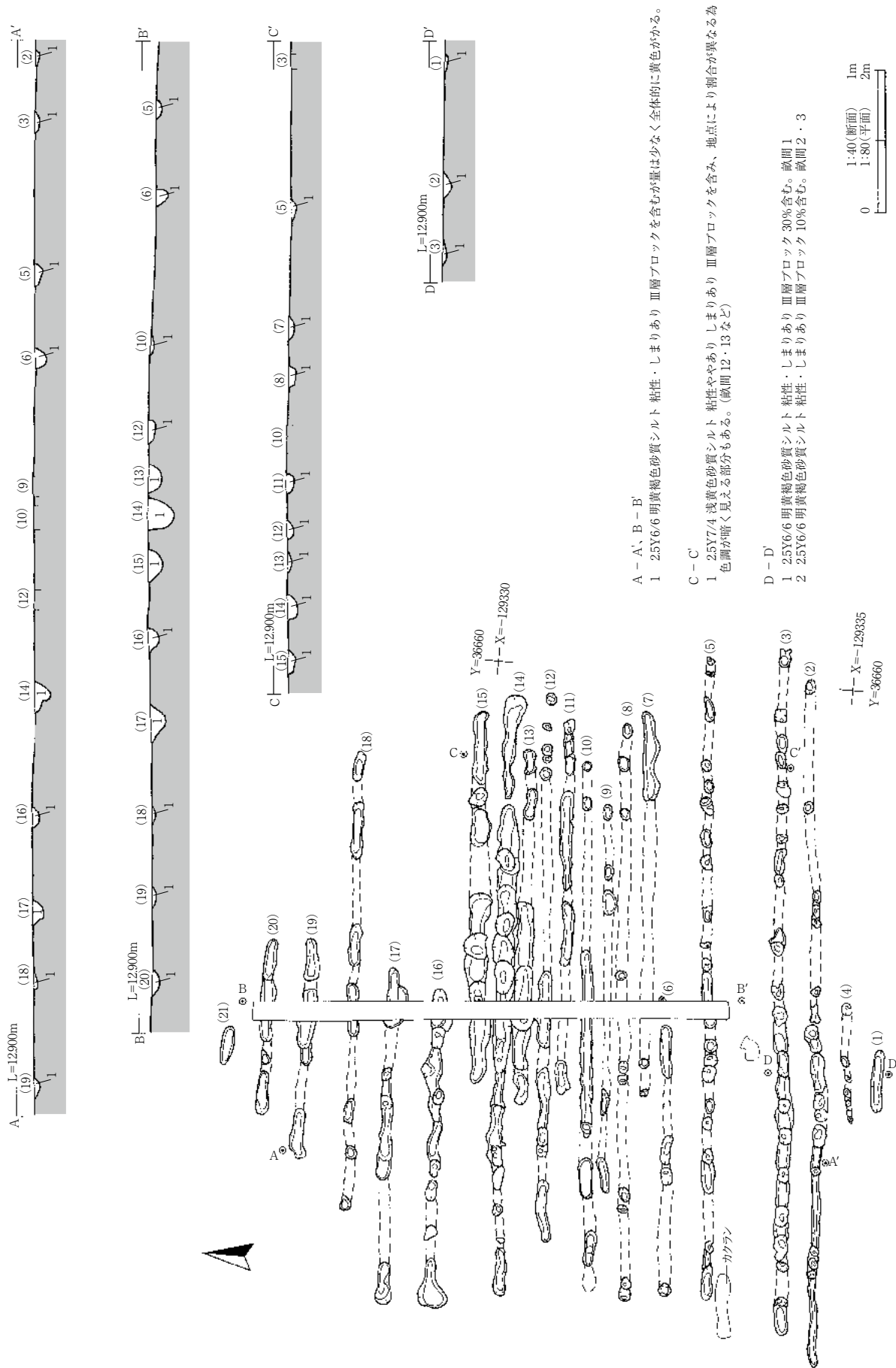
遺構名	調査区	位置	検出面	主軸	長さ(m)	検出状況	開口部幅(cm)	深さ(cm)	埋土	出土遺物	時期
1号溝	B区	II E 1～3 n	IV	N-8°-W	11.50	南側は調査区外へと延びる	19～40	13	上～中位は黒褐色シルト(10YR3/2)、下位は砂質の黒褐色シルトでにぶい黄褐色シルト(10YR4/3)を5～7%含む。粘性なし。しまりあり		
2号溝	B区	II E 2 n	IV	N-30°-E	0.72	南西側は1号溝に切られ、北東側は調査区外へと延びる	24～27	12	にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ30%含む。		10世紀初頭
3号溝	B区	II E 3・4 n	IV	N-11°-E	2.04	南西側は確認調査区、北東側は調査区外へと延びる	18～26	12	にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ30%含む。		10世紀初頭
4号溝	B区	II E 4 n	IV	N-29°-E	0.89		16～22	6	にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ30%含む。		10世紀初頭
5号溝	B区	II E 5 n	IV	N-59°-W	2.06	北西側は確認調査区、南東側は調査区外へと延びる	24～30	6	黒褐色シルト(10YR3/2)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ10%含む。		10世紀初頭
6号溝	B区	II E 6 n	IV	N-55°-W	0.68	南東側は調査区外へと延びる	22～29	8	黒褐色シルト(10YR3/2)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ10%含む。		10世紀初頭
7号溝	B区	II E 6 n	IV	N-47°-E	1.04	南西側は確認調査区、北東側は調査区外へと延びる	34～37	20	にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ30%含む。		10世紀初頭
8号溝	B区	II E 11 n	IV	N-47°-W	1.20	南東側は調査区外へと延びる	18～22	8	明黄褐色シルト(10YR6/6)の単層。粘性・しまりあり。十和田aテフラ5%、皿層ブロック15%含む。		10世紀初頭
9号溝	B区	II E 12 n	IV	N-74°-W	0.86	南東側は調査区外へと延びる	34	8	明黄褐色シルト(10YR6/6)の単層。粘性・しまりあり。十和田aテフラ20%、皿層ブロック15%含む。		10世紀初頭
10号溝	B区	II E 7 n	IV	N-58°-E	1.20	南西側は12号溝に切られる	30	10	にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ30%含む。		10世紀初頭
11号溝	B区	II E 6 n	IV	N-22°-W	0.54	南東側は調査区外へと延びる	32	10	黒褐色シルト(10YR3/2)の単層。粘性あり。しまりややあり。十和田aテフラ10%含む。		10世紀初頭
12号溝	B区	II E 7 n	IV	N-10°-W	0.80	確認調査区、南端部途切れている	22		未精査により不明。		
13号溝	B区	II E 7・8 n	IV	N-38°-E	3.0	確認調査区、北東側は12号溝に切られ、途切れる。南西側も途中で切れている	20～24		未精査により不明。		
14号溝	B区	II E 7 n	IV	N-32°-E	1.70	確認調査区により北東側は未検出、南西側は途切れている	24～30		未精査により不明。		
15号溝	B区	II E 8 n	IV	N-39°-E	1.10	確認調査区により南西側は未検出、北東側は途切れている	19～23		未精査により不明。		
16号溝	F区	III E 13・14 a	III	N-30°-W	0.70	北東側は境乱により途切れ、南東側は調査区外へと延びる	32～38	26	上位は褐色砂(10YR4/4)60%、暗褐色粘土質シルト(10YR3/3)40%の混合土層。中～下位は暗褐色粘土質シルト主体で褐色シルトをわずかに含む。粘性・しまりあり		



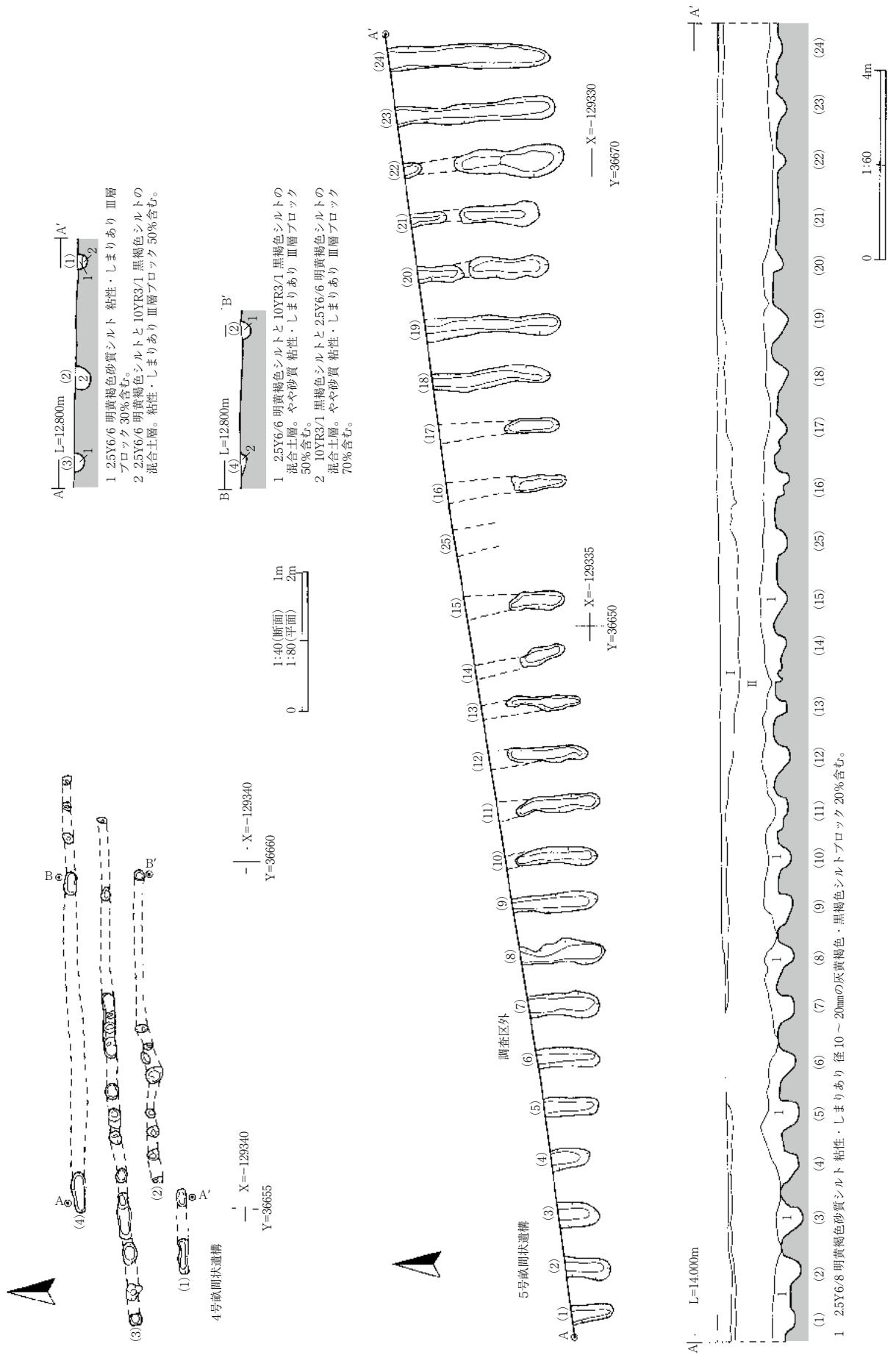
第20図 1号畝間状遺構



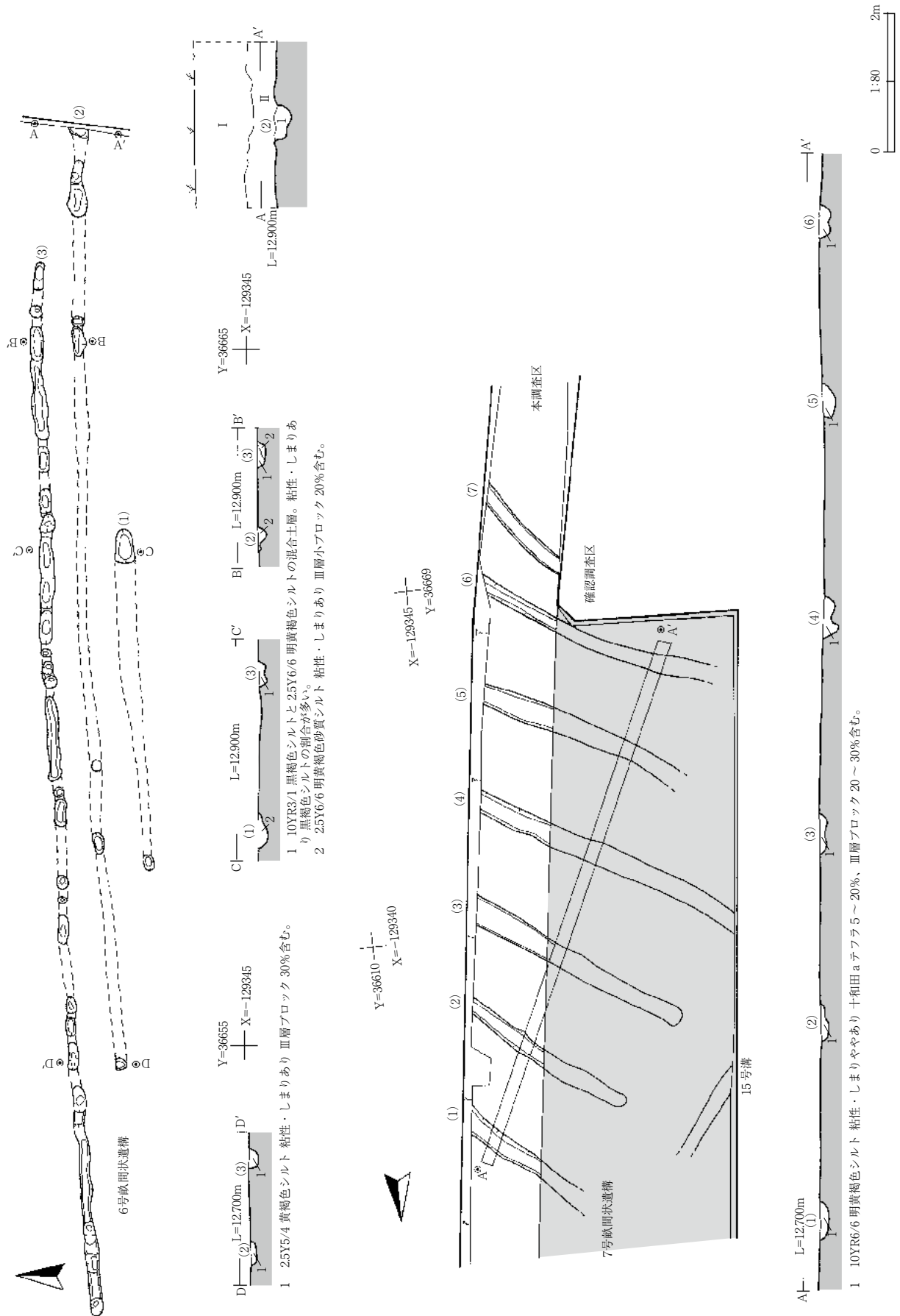
第 21 図 2号畝間状遺構



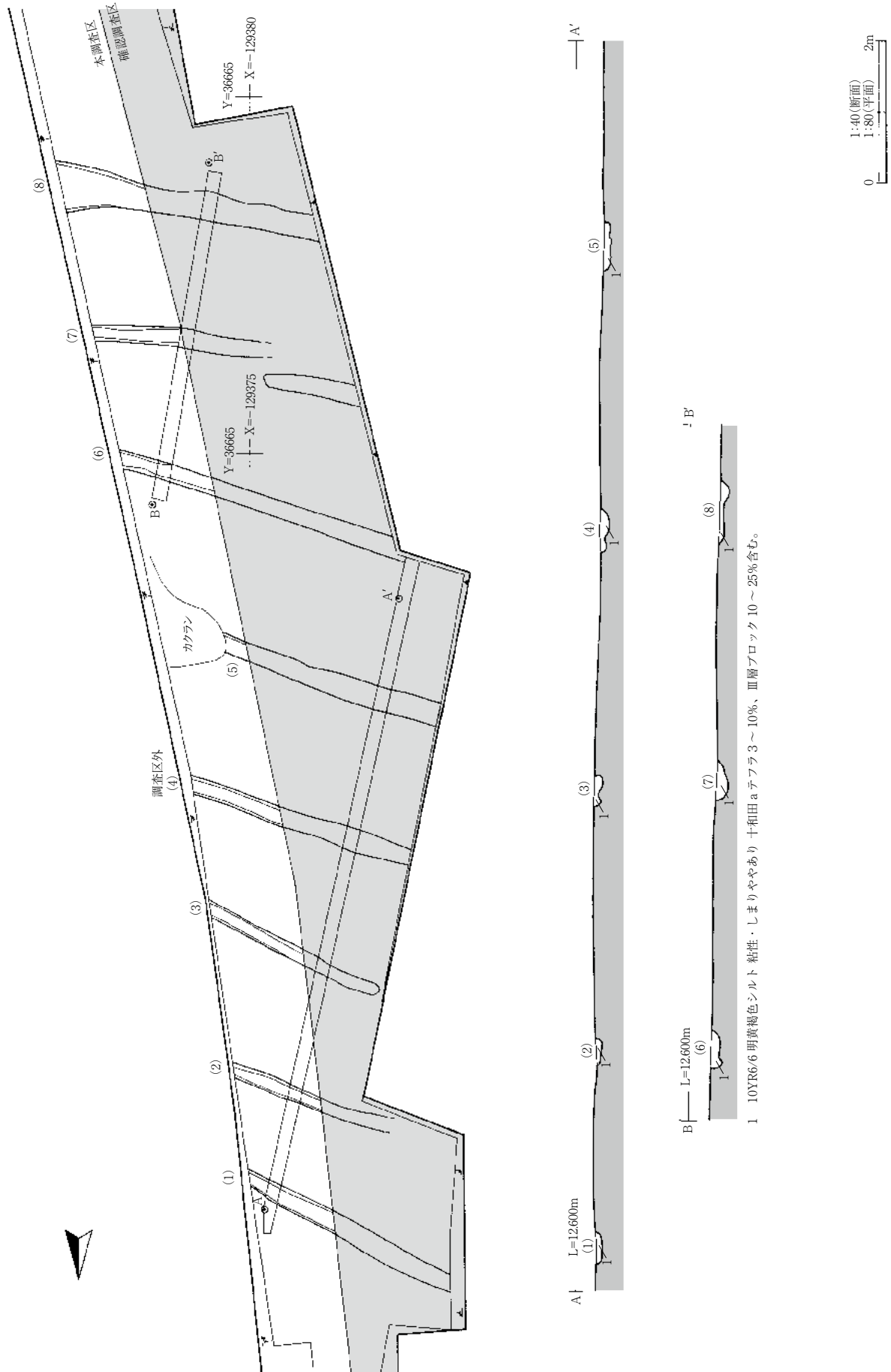
第22図 3号畝間状遺構



第 23 図 4・5号竝間状遺構



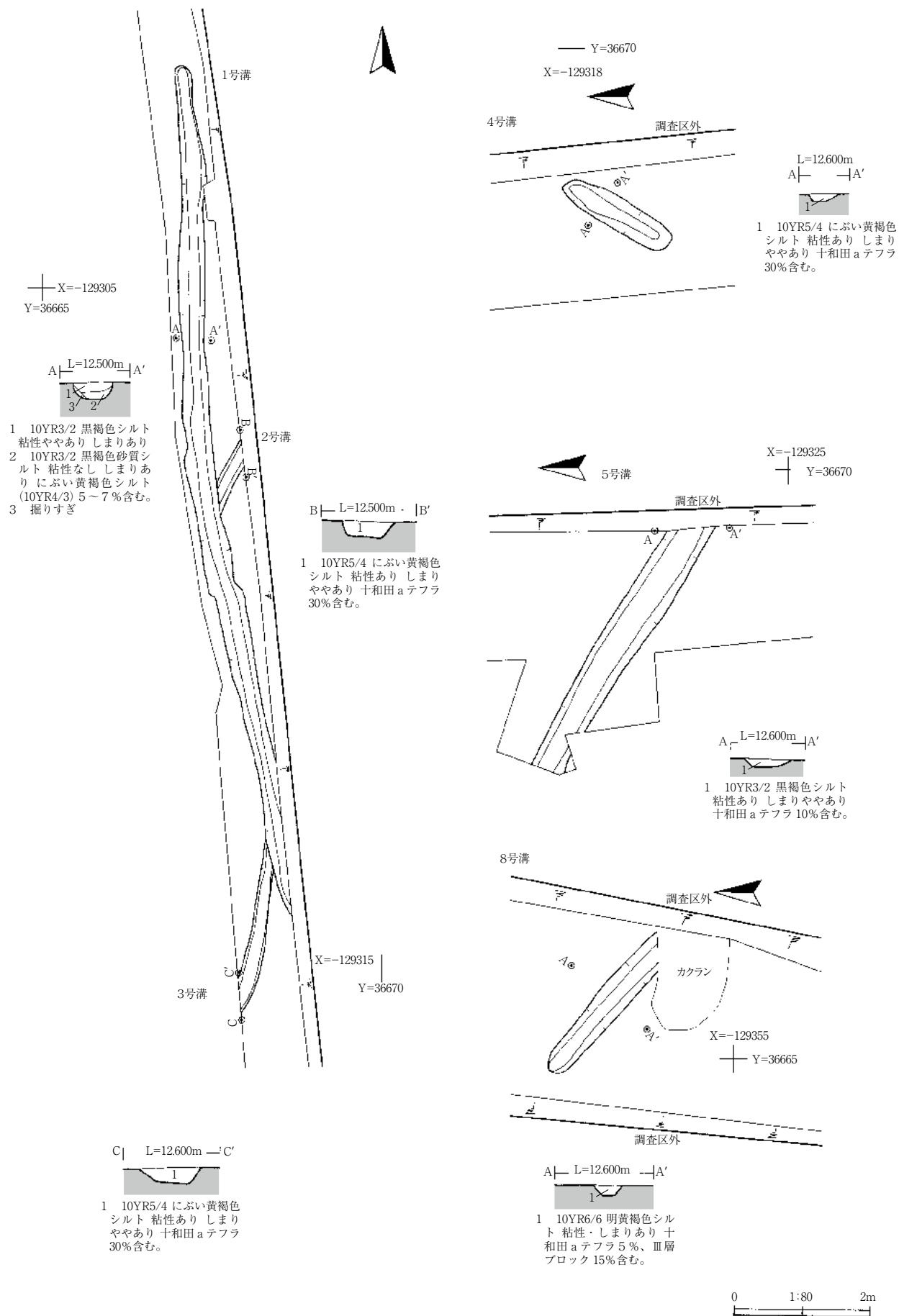
第24図 6・7号畝間状遺構



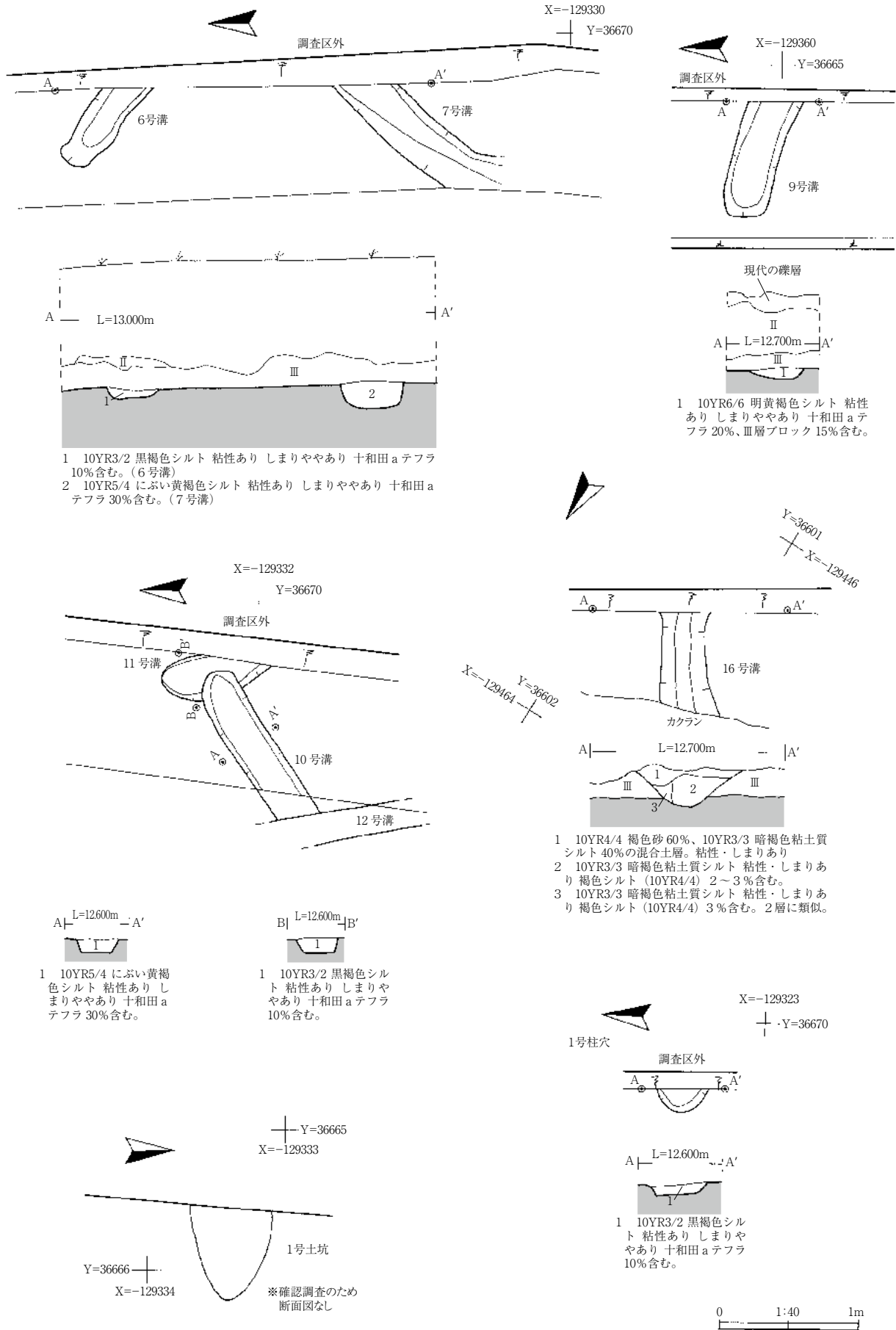
第 25 図 8号畝間状遺構

1 10YR6/6 明黄褐色シルト 粘性・しまりやきあり 十和田a テフラ3～10%、Ⅲ層ブロック 10～25% 含む。

4 検出遺構



第26図 1~5・8号溝



第27図 6・7・9～12・16号溝、1号土坑、1号柱穴

(4) 柱穴状土坑 (第 27 図、写真図版 12)

1号柱穴

B区東側のⅡE5nグリッドのⅣ層において1個検出した。重複する遺構はないが、遺構の東側が調査区外へと延びるため、全容は不明である。検出した規模は開口部径39×27cm、深さ7cmで柱痕跡はない。埋土は黒褐色シルト主体で十和田aテフラを10%ほど含む。柱穴からの出土遺物はないが、検出面から古代の遺構である可能性が考えられる。

5 出土遺物 (第 28 図、写真図版 17、第 10～12 表)

出土した遺物は土師器 381.0 g、須恵器 47.5 g、陶磁器 547.2 g、石器 9.0 g である。土師器は畝間状遺構のあるB区、陶磁器は大半がA区で出土した。このうち6点を図化・掲載した。

(1) 土師器・須恵器

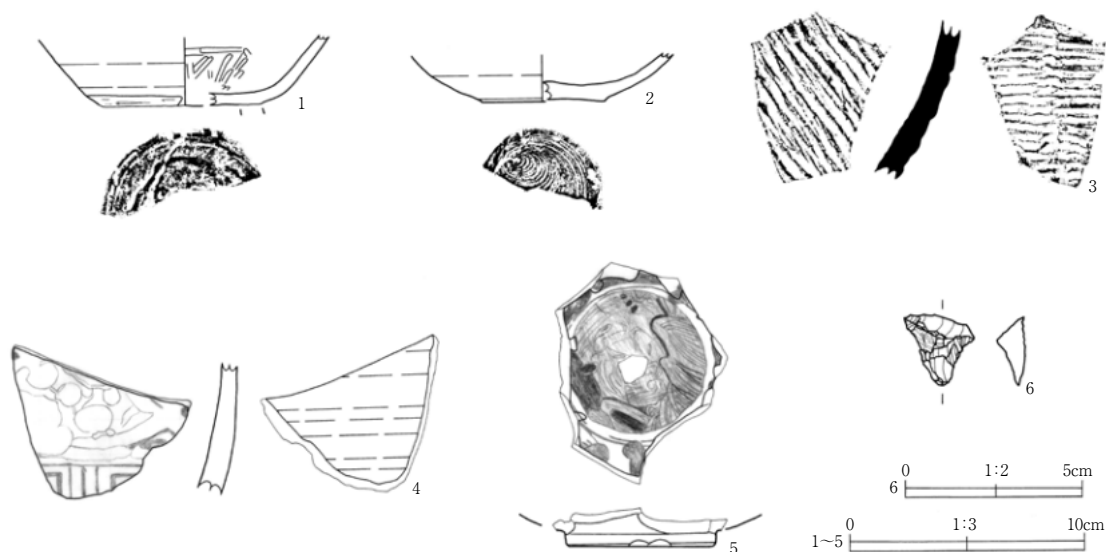
1は7号畝間状遺構検出時に出土した高台付坏の体～底部破片で上部は欠損している。器面調整は外面ロクロナデ、内面はミガキで黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は不明である。2はB区北東端において遺構外から出土した坏の体～底部破片で器面調整は内外面ロクロナデ、底部の切り離し技法は回転糸切りによる。3は2号畝間状遺構付近で出土した須恵器甕の胴部破片で器体両面にタタキメがある。

(2) 陶磁器

4は3号畝間状遺構東側から出土した瓶類の胴部片と考えられるが、全体の形状は不明である。5はA区南東部の攪乱から出土した肥前産の染付皿で上部は蛇の目凹形高台である。周辺には攪乱痕が多く、近世～現代の陶磁器片が出土した。

(3) 石 器

黒曜石製の剥片1点がB区のⅢ層より出土した。



第 28 図 出土遺物

第 10 表 土器観察表

No	出土地点	層位	種類	器種	部位	器面調整			計測値 (cm)			重量 (g)	備考	図版	写真
						外面	内面	底部	口径	器高	底径				
1	7号畝間状遺構直上	Ⅲ層	土師器	高台付坏	体~底部	ロクロナデ	黒色処理、ミガキ	台部欠損		(2.9)		31.4		28	17
2	I E 19 n	Ⅲ層	土師器	坏	体~底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り		(2.1)	(5.2)	34.4		28	17
3	2号畝間状遺構付近	Ⅲ層	須恵器	甕	胴部	タタキメ	タタキメ					47.5		28	17

第 11 表 陶磁器観察表

No	出土地点	層位	器種	種類	計測値 (cm)			重量 (g)	産地/時期	備考	図版	写真
					口径	底径	器高					
4	3号畝間状遺構東側	I層	瓶類	磁器				47.9	肥前/18C		28	17
5	II D 11 s	埋土上位	皿	磁器		(6.4)	(1.6)	84.5	肥前/19C		28	17

第 12 表 石器観察表

No	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	図版	写真
6	I E 19 n	Ⅲ層	剥片	2.0	2.0	0.7	1.86		28	17

第 13 表 遺物総重量表 (土器・陶磁器)

土器					
調査区	出土地点	層位	種別	土師器	須恵器
A区	II D 13 n	褐色土上面	土師器	3.8	
A区	攪乱15		土師器	0.9	
B区	1号畝間状遺構	検出面・埋土	土師器	47.7	
B区	2号畝間状遺構	検出面・埋土	土師器	16.4	47.5
B区	5号畝間状遺構	検出面・埋土	土師器	11.5	
B区	7号畝間状遺構	検出面・埋土	土師器	96.1	
B区	8号畝間状検出面	Ⅲ層	土師器	14.0	
B区	6号溝	Ⅲ層	土師器	5.7	
B区	1号柱穴	埋土		6.1	
B区	II E 1 k	Ⅲ層	土師器	10.3	
B区	II E 2 l	Ⅲ層	土師器	11.1	
B区	II E 2・3 n	I層	土師器	3.9	
B区	II E 3 l	Ⅲ層	土師器	4.0	
B区	II E 4 k	Ⅲ層	土師器	2.9	
B区	II E 5 n	Ⅲ層	土師器	11.7	
B区	I E 18 n	Ⅲ層	土師器	3.7	
B区	I E 19 n	Ⅲ層	土師器	34.4	
B区	I E 20 i	Ⅲ層	土師器	11.3	
B区	I E 20 j	Ⅲ層	土師器	20.6	
E区	表採	Ⅲ層	土師器	1.4	
不明	攪乱		土師器	9.2	
不明	表採	I層	土師器	25.1	
	表採		土師器	29.5	
合計				381.2	47.5

陶磁器				
調査区	出土地点	層位	陶器	磁器
A区	II D 11 s	I層	230.8	36.9
A区	攪乱		18.4	10.0
B区	2号畝間状遺構 東端	I層	125.5	
B区	3号畝間状遺構 東側	I層	47.9	
B区	5号畝間状遺構	検出中	0.8	
B区	II E 1 k	Ⅲ層	4.6	
B区	II E 2・3 n	I層		21.8
B区	II E 6 n	Ⅲ層	18.0	
B区	II E 9 k	Ⅲ層	13.9	
B区	I E 19 n	Ⅲ層		0.1
E区		I層		2.5
E区		検出面		3.9
F区	西側	Ⅲ層		8.6
不明	表採		3.9	
合計			463.7	83.7

※単位は g

6 ま と め

今回行なった町裏Ⅰ遺跡の調査は、「経営体育成基盤整備事業日形地区」のは場整備事業に伴うもので、主に平安時代～近世までの遺構・遺物が見つかった。

遺跡は、北上川右岸に形成された氾濫平野上に立地する。現在確認できる地形では、遺跡の南側に集落が立地する自然堤防があり、その北東部に広がっている。調査の結果、その大半が古代～近世において北上川右岸に形成された後背側の低位面（流路）にあたり、畝間状遺構の検出されたB区付近だけが流路を挟んで、微高地状の地形にあったと考えられる。また、各調査区の土層断面を観察すると後背湿地に形成された低位面は近世以降の洪水により埋没し、その後調査前の現況である畑地・水田・農道などに関わる造成のために削平・改変され、現在の地形となったと考えられる。

今回の調査で見つかった遺構には居住を示すものはなく、生産に関わる畝間状遺構が主であった。また、遺物もほとんど出土していないことから、居住域とは隔てた場所にあると推測される。畝間状遺構は2面で検出され、下層面（Ⅳ層）検出の畝間状遺構は畝間埋土に十和田aテフラが含まれることから時期は10世紀前葉頃と考えられる。上層面（Ⅲ層）検出の畝間状遺構については畝間埋土に近世陶磁器が混入することから近世と考えられる。栽培された作物については土壌中に残る植物珪酸体を分析した結果、いずれの時期においてもイネ類、ムギ類を主としていることが明らかになった。

隣接する小野遺跡や小野Ⅱ遺跡では自然堤防という限られた空間において居住域は堤防の高位に展開し、居住に不適な地形である堤防縁辺の斜面部や洪水の影響を受けやすく堤防に隣接する低位面においては主に畠や水田、土器焼成など居住以外に土地を活用している様子が窺えた。今回の調査区も自然堤防上にはなく、洪水の影響を受けやすい低位面にあり、居住には不向きな場所であることから生産域として活用され、集落に住む人々の生活を支える上で重要な役割を担っていたと考えられる。

VI 町裏Ⅱ遺跡

1 遺跡の位置

遺跡は、JR東北本線花泉駅の東約6.3kmに位置し、北上川により形成された自然堤防北側の縁辺部に立地する。現況は畑地・水田で標高は12～13mである。

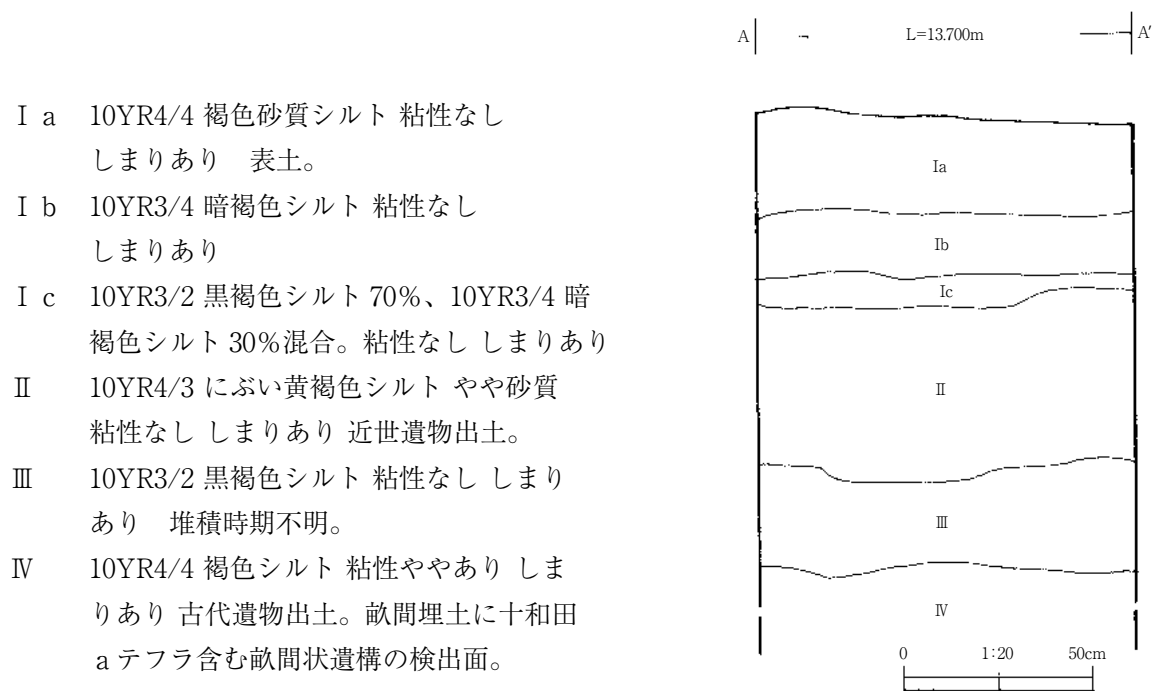
2 調査の概要

今回の調査は、ほ場整備に係わる農作業道と用水路について、岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘結果により事業予定地内に設置したトレンチから遺構・遺物が確認された範囲を対象とした。調査手法は工事により埋蔵文化財が影響を受ける面まで掘り下げ、最も上面で検出された遺構を記録する「確認調査」を主とし、検出した遺構は範囲確認および断面記録用に設置したトレンチ部分の掘削を行った。

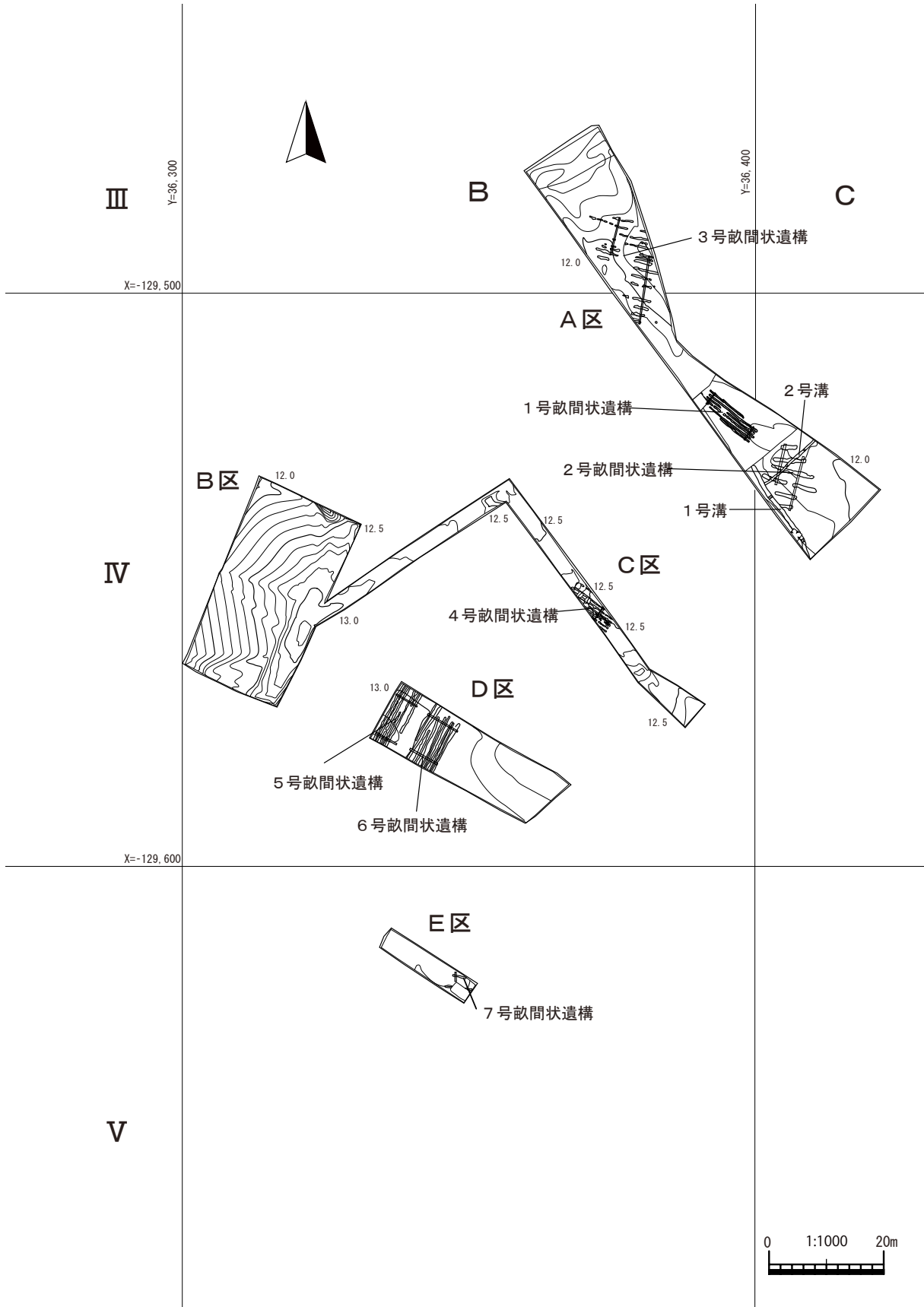
3 基本土層

調査前の現況は水田および畑地であったため、造成により平坦な地形となっていたが、事前に行った試掘により、旧地形や堆積状況が地点によって大きく異なることが判明していた。

今回の調査では調査区北東にあるA区以外の遺構はすべて確認調査であったため、唯一精査を実施したA区に土層観察のためのトレンチを設定し、これを観察・記録した。



第29図 基本層序



第 30 図 遺構配置図

4 検出遺構

(1) 畝間状遺構

1号畝間状遺構（第31図、写真図版14）

＜位置・検出・重複関係＞ A区南側のIV B 4 s・5 s・5 t・6 tグリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。耕作地面積は約32㎡で、重複する遺構はない。

＜規模＞ 遺構全体の長さは11.24 m、幅は3.10 mで溝状の畝間6条が平行に並び、畝間方向はN-53°-Wを向く。各畝間の長さは6.48～11.24 mの範疇で、畝間6以外は南東端が揃っている。北西端は畝間4～6が揃うが、畝間1～3の長さは異なる。畝間幅は16～41cm、畝間間隔は畝間1・2間隔が4～26cmとやや狭いが、他は26～38cmで畝間幅よりやや広い。畝間3・4は途中で途切れており、上面が削平されている可能性がある。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

＜埋土＞ 埋土の主体は褐色砂質シルトで単層である。

＜遺物＞ 畝間埋土から陶器の破片7.5 gが出土した。小片のため図化・掲載はしていない。

＜時期＞ 出土遺物から近世に属すると考えられる。

2号畝間状遺構（第32図、写真図版14）

＜位置・検出・重複関係＞ A区南側のIV C 6 a・6 b・7 a・7 b・8 bグリッドに跨がって位置し、IV層で検出した。耕作地面積は約65㎡で、2号溝と重複し、これに切られる。

＜規模＞ 遺構全体の規模は長さ9.84 m、幅10.86 mで畝間6条である。畝間方向はN-75°-Wを向く。各畝間の長さは畝間1 = 2.38 m、畝間2 = 3.86 m、畝間3 = 9.84 m、畝間4 = 7.66 m、畝間5 = 5.74 m、畝間6 = 2.77 mで、畝間3は4.50 mと4.30 mの畝間が1.04 m離れて列を成す。各畝間の端部は揃っておらず、畝間幅は42～91cmで平均60cm前後を測り、畝間間隔は70～156cmで平行に並び、およそ150cm間隔を基準としている。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

＜埋土＞ 埋土の主体はⅢ層の暗褐色砂質シルトですべての畝間埋土に十和田aテフラが3～15%の割合で混入している。

＜遺物＞ なし。

＜時期＞ 畝間埋土に十和田aテフラが混入することから10世紀初頭頃の遺構と考えられる。

3号畝間状遺構（第33図、写真図版14）

＜位置・検出・重複関係＞ A区北側のⅢ B 南東～IV B 北東のⅢ B 19 pグリッドを中心に展開し、Ⅲ層で検出した。遺構の一部は調査区外へと延び、確認できた耕作地面積は約114㎡で、重複する遺構はない。

＜規模＞ 遺構全体で畝間21条が平行に並び、規模は長さ10.27 m、幅15.72 mである。畝間方向はN-69°-Wを向く。各畝間の長さは南側が2.72～3.68 m、北側が5.17～7.01 mであるが、畝間が途切れるものもある。畝間は幅23～50cmで溝状を呈し、畝間間隔は南側が84～104cm、北側が102～106cmで、北側の畝間間隔のほうが、若干広い。畝間は途中で途切れているものが多く、上面は削平を受けていると考えられる。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

＜埋土＞ 埋土の主体はⅢ層の暗褐色砂質シルトで、層中ににぶい黄褐色火山灰が多くて15%程含まれている。

＜遺物＞ なし。

<時期> 畝間埋土に十和田 a テフラが混入することから 10 世紀初頭頃の時期と考えられる。

4 号畝間状遺構（第 33 図、写真図版 15）

<位置・検出・重複関係> C 区中央の IV B 11 m・11 o・12 o グリッドに跨がって位置し、Ⅲ層で検出した。遺構の一部は調査区外へと延びる。確認できた耕作地面積は約 26㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の規模は長さ 9.13 m、幅 3.30 m で畝間 8 条からなる。畝間方向は N - 55° - W を向く。各畝間の長さは途中で途切れているものや遺構外へと延びているものが大半のため不明であるが、検出状況から約 8 m 前後と推測される。畝間幅は最大で 32cm を測るが、遺構の上部が削平されているため、20cm 以下の畝間幅の箇所が多い。畝間間隔は 27 ~ 46cm の範疇にあるが、畝間 7・8 間のみ 96cm と広い。また、畝間 4 は畝間 3 と 5 の間にあり、両幅が狭い。

<埋土> 埋土の主体はⅡ層の褐色砂質シルトで、炭化物の混入はない。

<遺物> 畝間埋土から須恵器の破片 1 点（4.8 g）が出土したが、器面の剥落が大きく、図化・掲載は行っていない。

<時期> 検出状況から近世の可能性が考えられる。

5 号畝間状遺構（第 34 図、写真図版 15）

<位置・検出・重複関係> D 区北西の IV B 15 i グリッドを中心に広く展開し、Ⅱ層で検出した。畝間両端は調査区外へと延びる。検出した面積は約 45㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の規模は調査区外へと延びるため不明であるが、長さは調査区幅の 11.03 m 以上、幅は全体で 4.0 m あるが、北西側は畝間が遺構外へと展開している可能性も考えられる。畝間方向は N - 28° - E を向く。各畝間の長さは調査区外へと延びるため不明、畝間幅は各畝間の最大幅で 33 ~ 42cm、畝間間隔は 30cm 前後でほぼ等間隔で平行に並ぶ。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土は褐色砂質シルト主体で、にぶい黄褐色砂質シルト（Ⅲ層に近い）が 50% 混入する。

<遺物> 畝間周辺から 22.5 g の土器が出土した。いずれも土師器の破片で小片のため、図化・掲載は行っていない。

<時期> 検出状況から近世以降と考えられる。

6 号畝間状遺構（第 34 図、写真図版 15）

<位置・検出・重複関係> D 区北西の IV B 16 i グリッドを中心に広く展開し、Ⅱ層で検出した。畝間両端は調査区外へと延びる。検出した面積は約 58㎡で、重複する遺構はない。

<規模> 遺構全体の規模は調査区外へと延びるため不明であるが、長さは調査区幅の 11.03 m 以上、幅は全体で 5.46 m を測る。畝間方向は N - 33° - E を向く。各畝間の長さは調査区外へと延びるため不明、畝間幅は各畝間の最大幅で 35 ~ 55cm を測り、溝状を呈する。畝間間隔は 19 ~ 66cm と一定ではないが、およそ平行に並ぶ。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 埋土は暗褐色に近い褐色砂質シルトとこれより明るい色調の褐色砂質シルトが 50% 混入する。

<遺物> 検出時に周辺から土器片が出土した埋土からは出土していない。

<時期> 検出状況から近世以降と考えられる。

7号畝間状遺構（第35図、写真図版15）

<位置・検出・重複関係> E区南東端のVB4j・5jグリッドに跨がり、IV層で畝間2条を検出した。南側の畝間が攪乱を受けている。

<規模> 2条のみの検出のため、遺構外に畝間が広がって展開している可能性があり、全体の規模は不明である。畝間の軸方向はおよそN-80°-Wを向く。検出した畝間の長さは畝間1が4.78m、畝間2が2.42mで、畝間幅は21~32cmで東側がやや広い。畝間間隔は164cmで平行に並ぶ。畝部分に人為的な堆積層は確認できない。

<埋土> 畝間埋土は褐色砂質シルト主体で、十和田aテフラを20%含ほど含む。

<遺物> 周辺から土師器の破片が見つかるが、遺構埋土から遺物は出土していない。

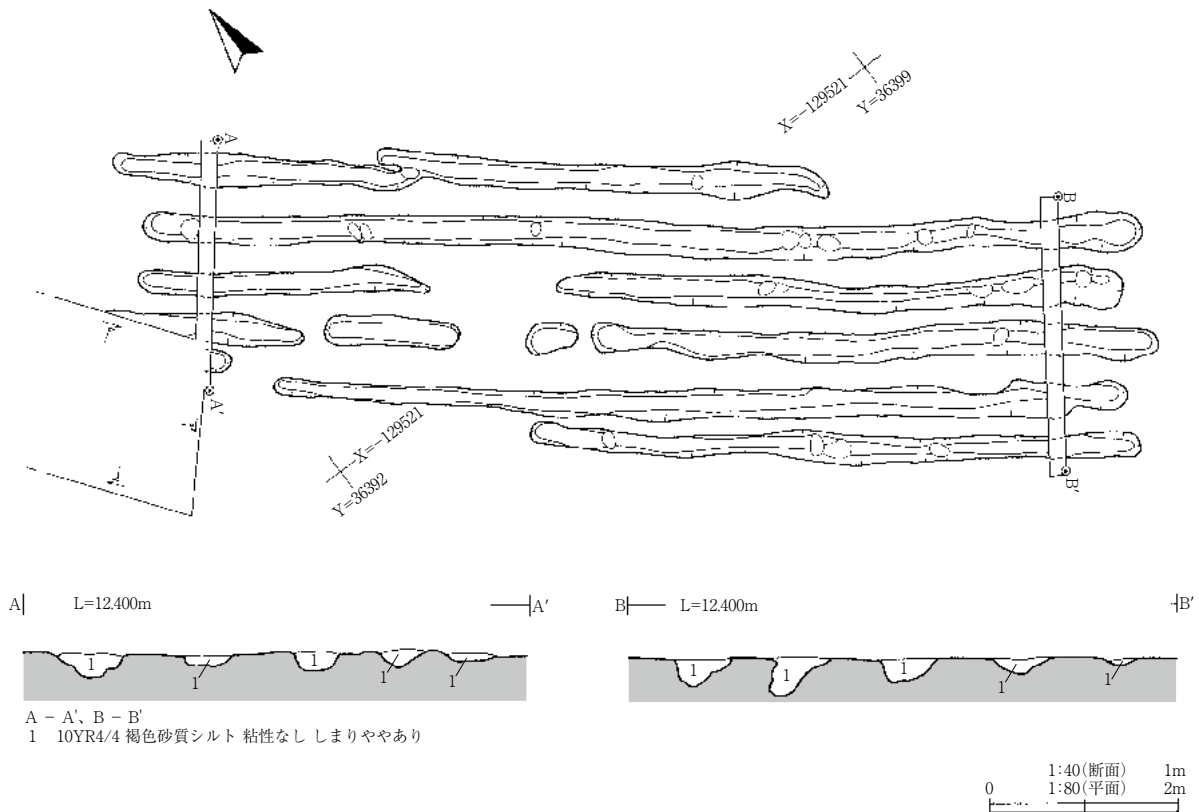
<時期> 畝間埋土に十和田aテフラが混入することから10世紀初頭頃の時期と考えられる。

(2) 溝 跡

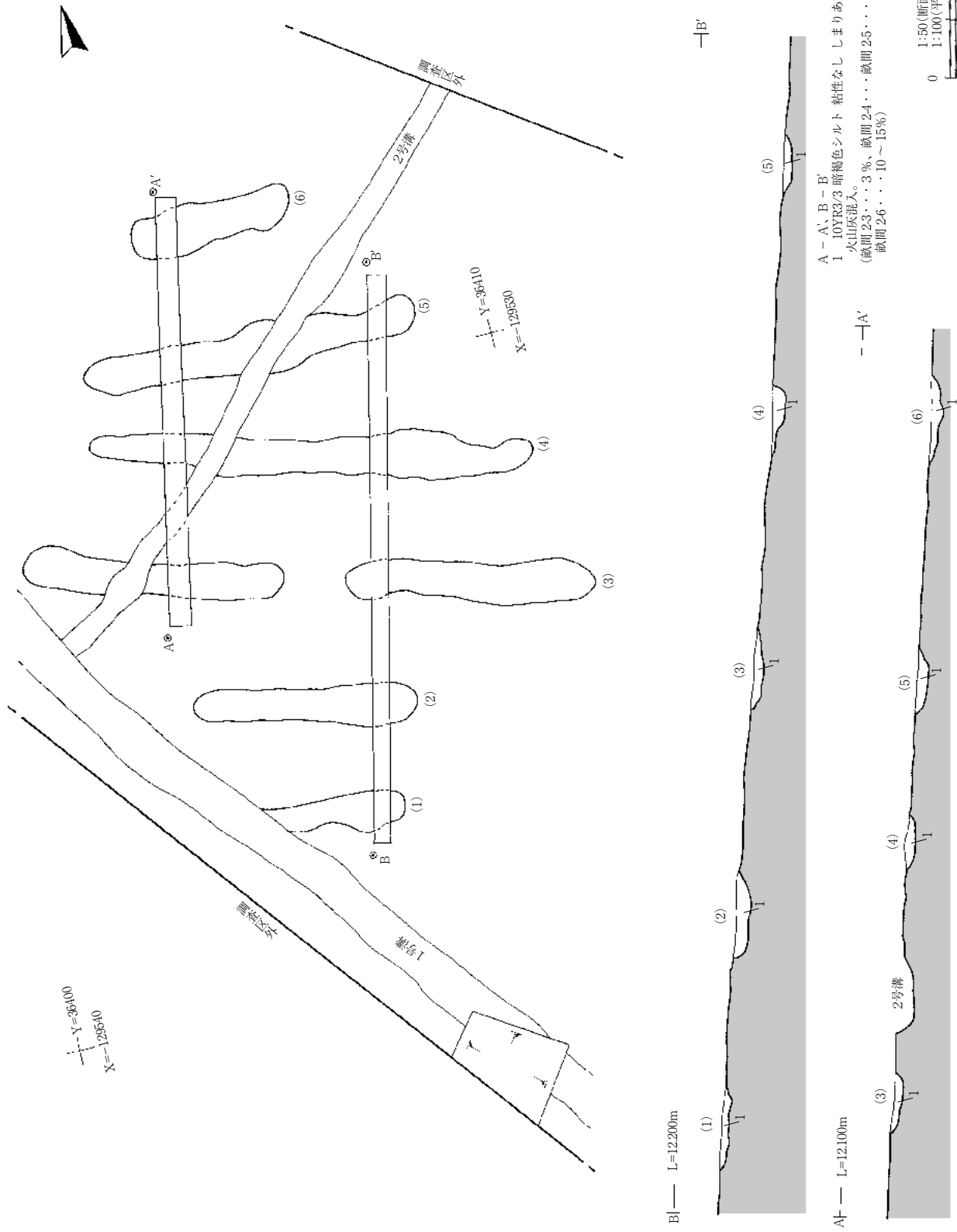
1号溝（第36図、写真図版15）

<位置・検出・重複関係> IVB区とIVC区に跨って位置し、IV層で検出した。2号溝と重複し、これを切る。遺構の南端は調査区外へと延びる。

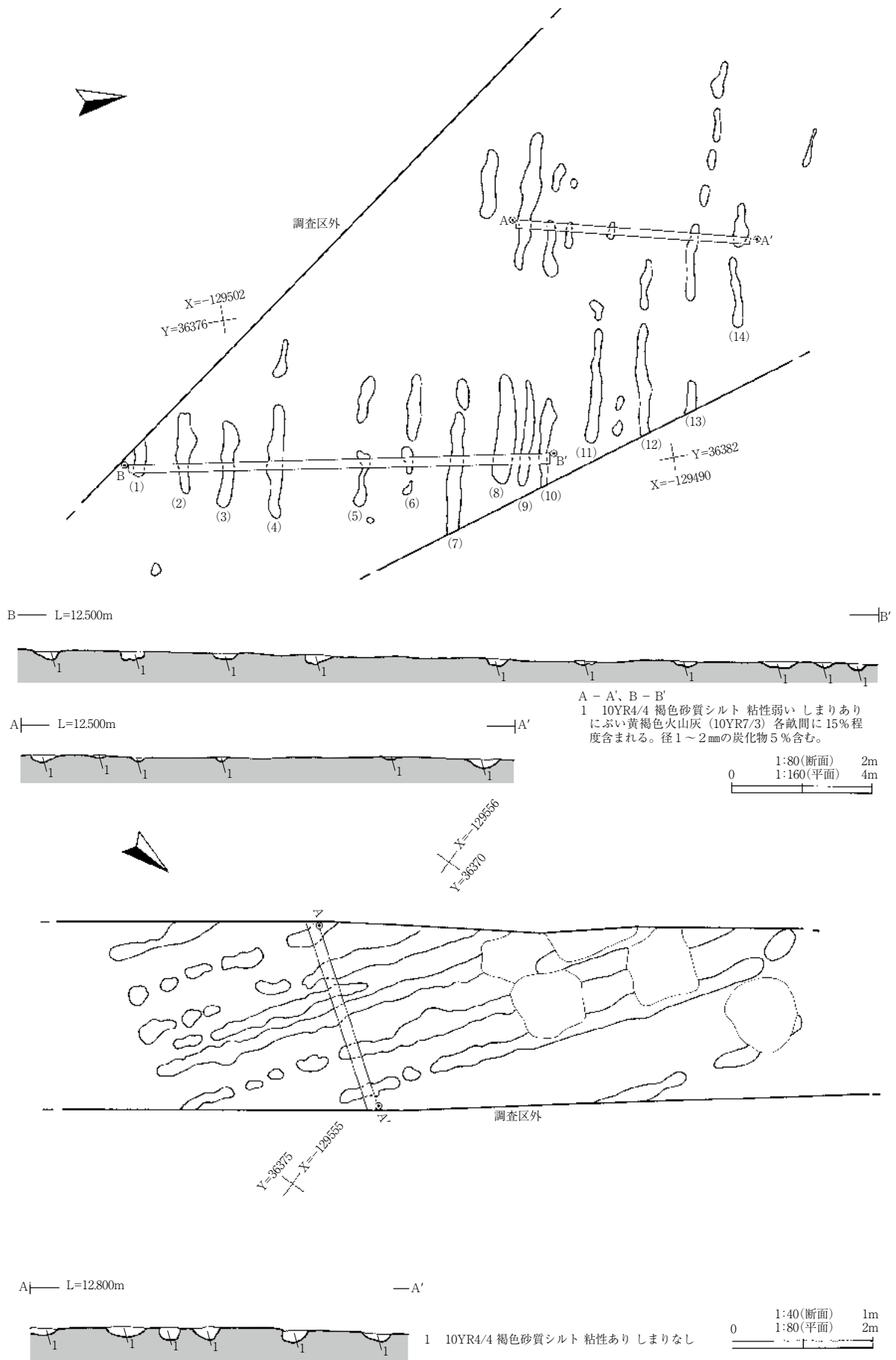
<規模・形態・方向> 遺構の南端が調査区外へと延びるため、全長は不明であるが、検出した長さは18.55m、上端幅57~77cm、検出面から底面までの深さは約20cmを測る。方向は北西-南東でN-35°-Wに軸方向をもつ。両端部底面の比高差はトレンチ断面確認箇所で約10cmで、北端が低い。



第31図 1号畝間状遺構

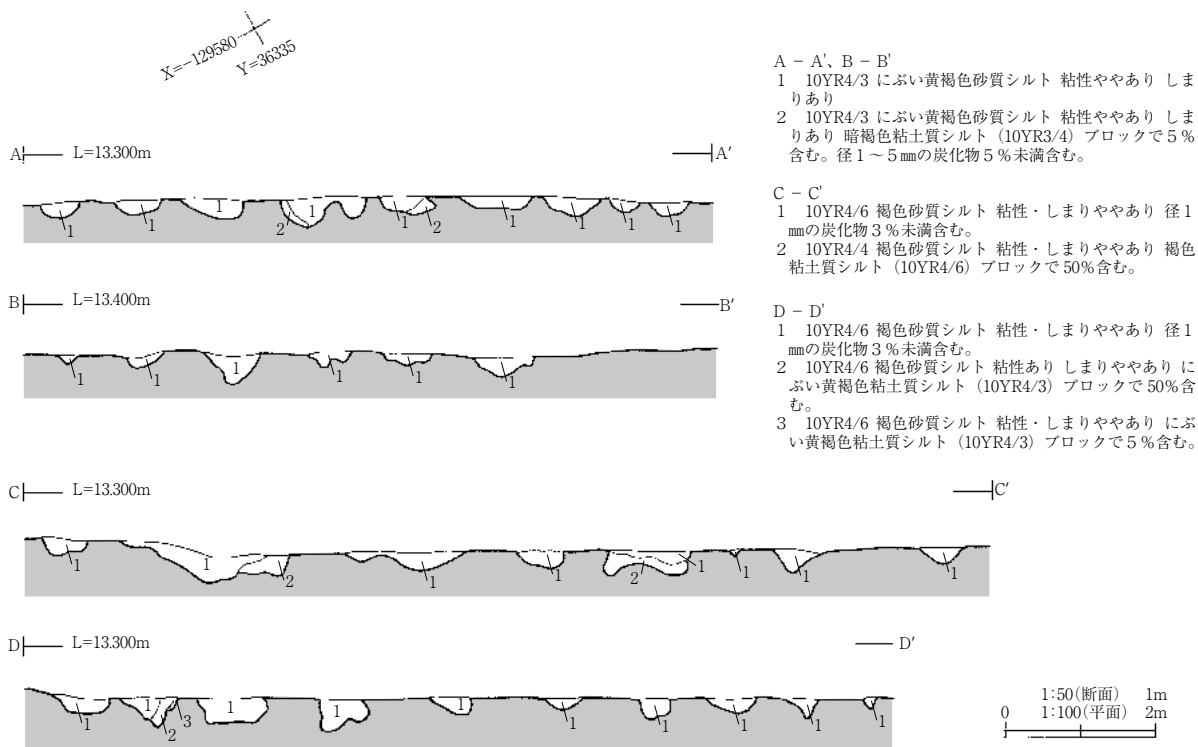
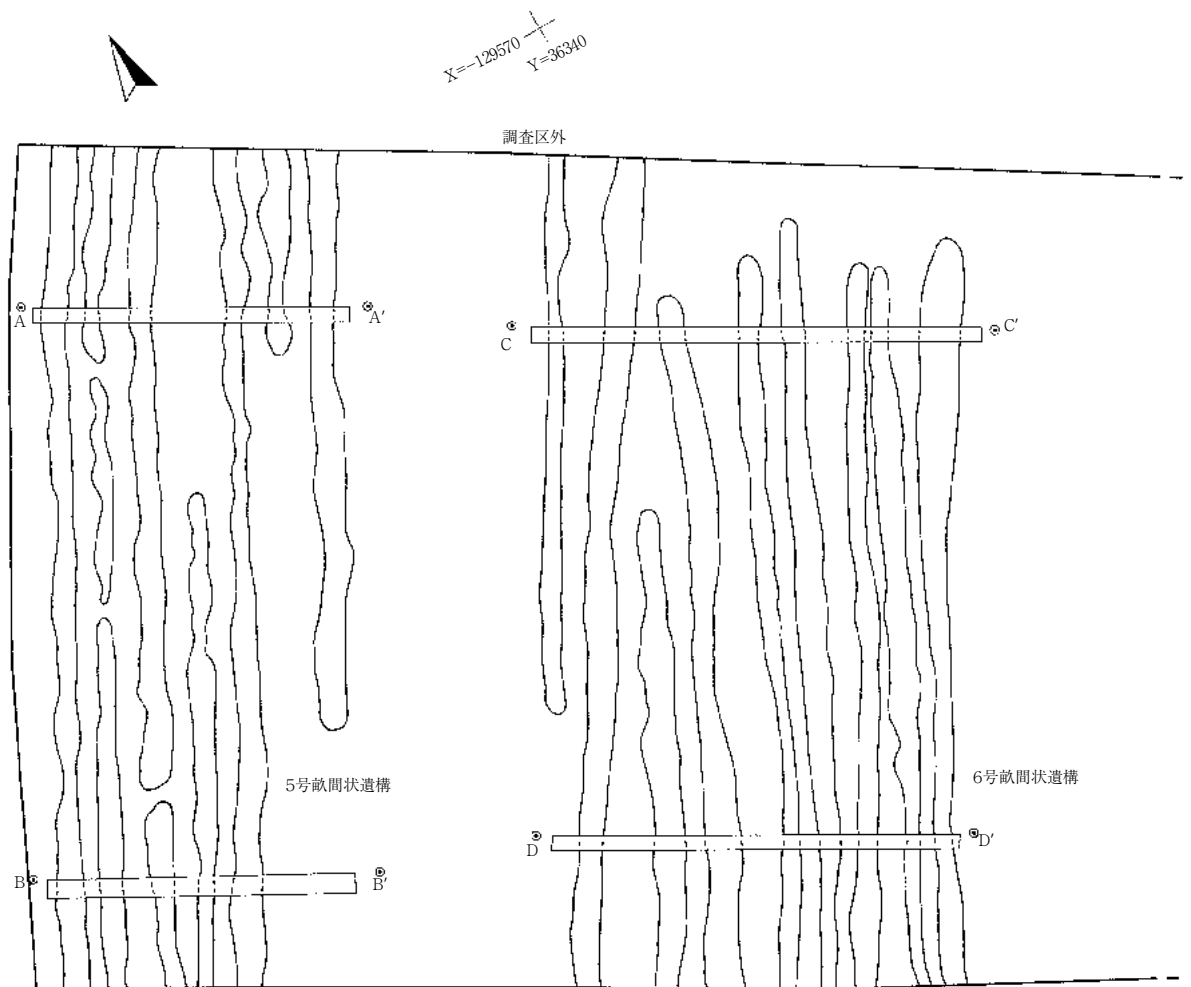


第 32 図 2号畝間状遺構

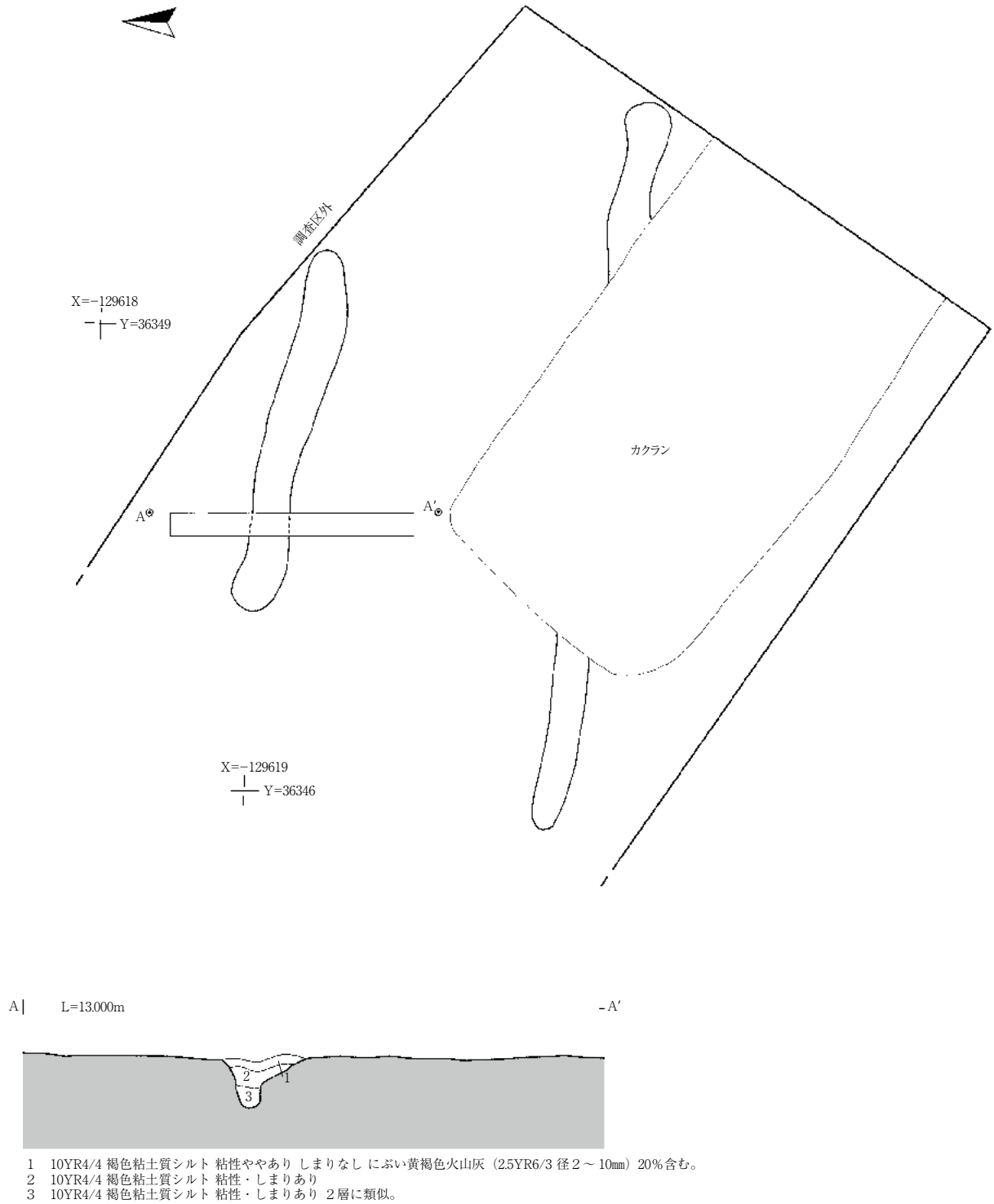


第 33 図 3・4号畝間状遺構

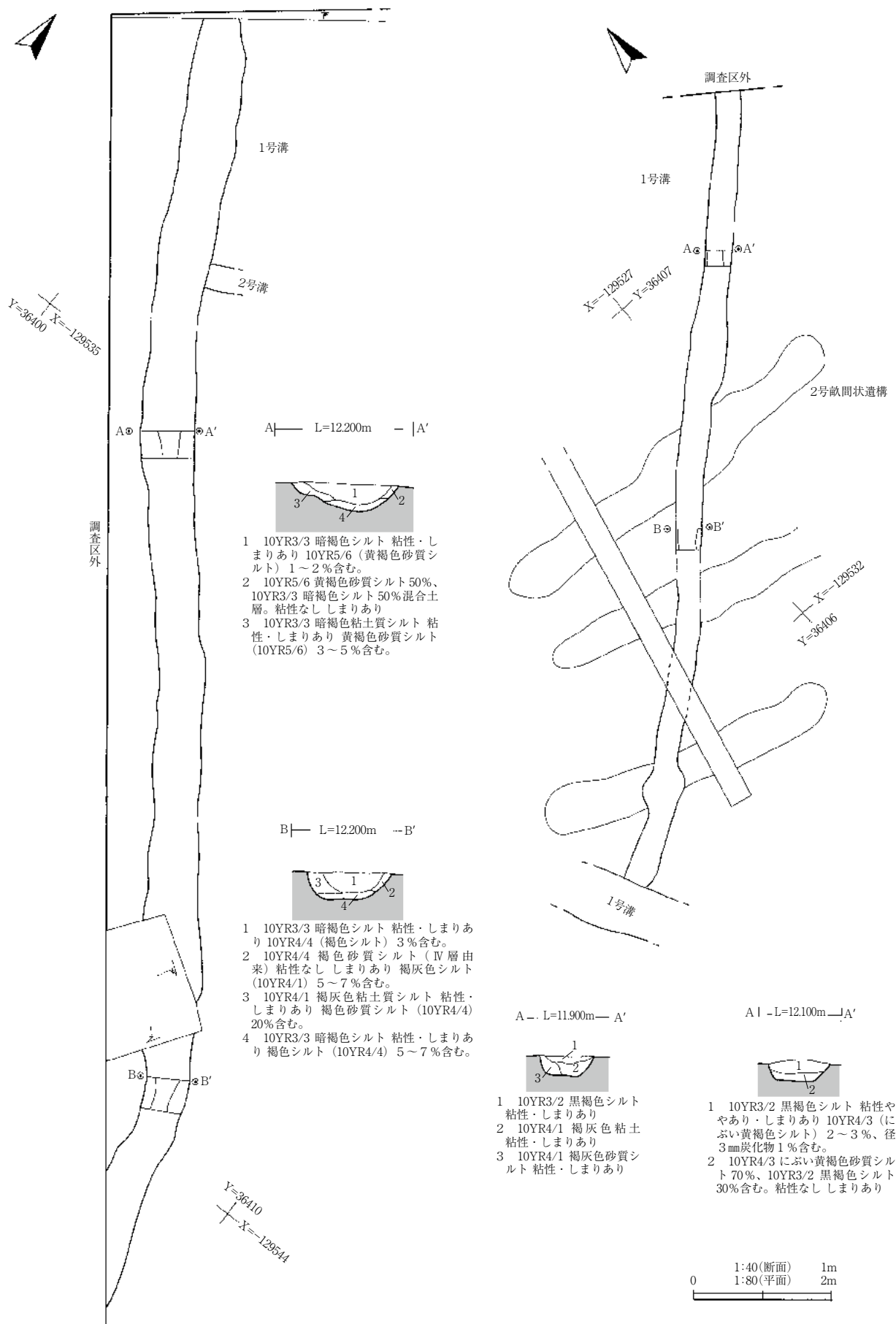
4 検出遺構



第34図 5・6号畝間状遺構



第35図 7号畝間状遺構



第36図 1・2号溝

<埋土> 埋土全体が暗黒色粘土質シルトを主体とし、層中には黄褐色砂質シルトを1～5%含んでいる。壁際は黄褐色砂質シルトと暗褐色シルトが混合して堆積している。

<遺物> 全体で約5.5gの土器片が出土した。小片のため図化・掲載は行っていない。

<時期> 2号畝間状遺構と重複し、これより新しいため、10世紀前半以降に属する。

2号溝（第36図、写真図版15）

<位置・検出・重複関係> IVC7a・6b・7bグリッドに跨がって位置し、IV層で検出した。1号溝と重複し、これに切られる。遺構の北東端は調査区外へと延びる。

<規模・形態・方向> 遺構は1号溝に切られ、北東端が調査区外へと延びるため、全長は不明であるが、検出した長さは11.67m、上端幅32～54cm、検出面から底面までの深さは約14cmを測る。方向は南西-北東でN-48°-Eに軸方向をもつ。両端部底面の比高差はトレンチ断面確認箇所5cmあり、北東側が低い。

<埋土> 埋土上～中位は黒褐色シルトを主体とし、下層はにぶい黄褐色砂質シルト主体に黒褐色シルトが混入する。東側の下層は湿気のため変色し、褐灰色を呈する。

<遺物> なし。

<時期> 2号畝間状遺構と重複し、これより新しいため、10世紀前半以降に属するが、詳細は不明である。

5 出土遺物（第37図、写真図版17、第14～16表）

遺物は土器が土師器381.0g、須恵器172.7g、陶器が114.5gでこのうち5点を図化・掲載した。

(1) 土師器・須恵器

A区の埋土に十和田aテフラが混入する畝間状遺構が検出されたIV層で1・2は出土した。1は高台付坏の体～台部破片、2は坏の口縁部破片で器面調整はいずれも外面ロクロナデ、内面は黒色処理後ミガキが施されている。

(2) 陶器

3はA区、4・5区はD区から出土した。器種は3が皿、4が碗、5は不明である。3は瀬戸・美濃産の皿で志野釉に鉄絵が描かれている。胎土は淡黄色で1mm弱の礫が少量含まれ、空隙がある。4は透明釉が施された大堀相馬産の碗の口縁部破片で18～19世紀頃の所産と考えられる。

第14表 土器観察表

No	出土地点	層位	種類	器種	部位	器面調整			計測値 (cm)			重量 (g)	備考	図版	写図
						外面	内面	底部	口径	器高	底径				
1	IVC7b	IV層	土師器	高台付坏	体～台部	ロクロナデ	ナデ	底部切り離し 後再調整		(3.1)	(8.0)	98.8		37	17
2	IVC7b	IV層	土師器	坏	口縁部	ロクロナデ	黒色処理、 ミガキ	回転ヘラ切り 後再調整	(13.2)	(4.1)		19.9		37	17

第15表 陶器観察表

No	出土地点	層位	器種	種類	胎土	重量 (g)	文様	備考	図版	写図
3	ⅢB18n	Ⅱ層	皿	陶器	2.5YR6/4にぶい橙	22.3	外面：刷毛目	産地不明	37	17
4	攪乱		碗	陶器	7.5YR6/4にぶい橙	9.6	内外面：刷毛目	唐津産	37	17
5	表採		不明	陶器	2.5YR8/2灰白色	4.1	内外面灰釉	大堀相馬産	37	17

* () は口径・底径が推定値、器高は残存値を示す。

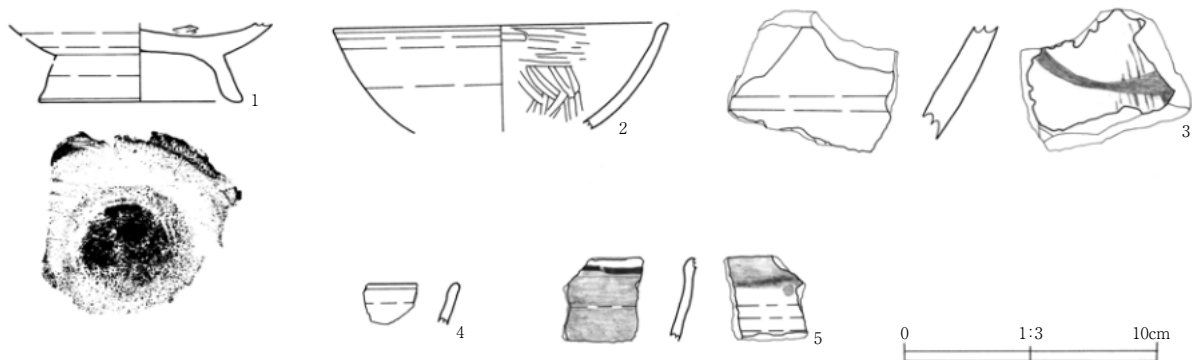
第16表 遺物総重量表（土器・陶器）

土器

調査区	出土地点	層位	重量 (g)	
			土師器	須恵器
A区	1号溝	埋土	5.5	
A区	IVB8 l	I層下	3.4	
A区	III B18 p	IV層 To-a検出面	10.5	
A区	III B19 o	IV層 To-a検出面	6.5	
A区	III B20 p	IV層 To-a検出面	77.7	
A区	IVC6 b	IV層 To-a検出面	38.5	
A区	IVC7 b	IV層 To-a検出面	350.3	
A区	IVC8 b	IV層 To-a検出面		84.1
A区	IVC8 c	IV層 To-a検出面		74.1
B区	表採		17.6	
C区	4号畝間状遺構	II層上		4.8
C区	IVB11 f	II層	23.0	9.7
C区	IVB15 r	III層内攪乱	84.2	
D区	5号畝間状遺構	III層直上	22.5	
D区	IVB15 i	II層	7.6	
D区	IVB16 g	III層	133.4	
D区	IVB16 i	II層	38.6	
D区	IVB16l	II層	33.2	
D区	IVB17i	II層	46.5	
D区	IVB19l	II層	5.5	
D区	表採		2.5	
E区	VB4 i	III層	33.9	
合計			940.8	172.7

陶器

調査区	出土地点	層位	重量 (g)
A区	中央	III層上	48.9
A区	中央	III層上	3.6
A区	1号畝間状遺構東側畝間	埋土	7.5
A区	III B16m	I層	14.0
B区	IVB14d	II層上	11.2
D区	IVB16g	III層	2.3
D区	IVB16l	II層上	7.1
D区	IVB16 i	II層上	20.1
合計			114.6



第37図 出土遺物

6 まとめ

町裏Ⅱ遺跡の調査は、「経営体育成基盤整備事業日形地区」のは場整備事業に伴うもので、主に平安時代と近世の遺構・遺物が見つかった。

今回の調査はすべて確認調査で確認したのは第一遺構検出面までで、精査も実施していないため、旧地形や遺跡の性格等の詳細は不明な点が多いが、東に隣接する町裏Ⅰ遺跡同様平安～近世の畝間状遺構と溝が検出されたことから、生産域として利用された場所であったと考えられる。古代の畝間状遺構はA区とE区で検出したが、両調査区の比高差は約1mあり、南側に位置するE区が高いことから、調査区全体では南側から北側に向かって下がる地形であると考えられる。

結果、町裏Ⅱ遺跡は洪水の影響を受けやすい自然堤防斜面部および低位面にあり、居住には不向きな場所であることから生産域として活用されたことが判明した。南に隣接した自然堤防高位には集落が展開し、そこに居住する人々の生活を支える上で重要な役割を担っていたと考えられる。

附編 自然科学分析

1 火山灰分析

株式会社 火山灰考古学研究所

I. はじめに

東北地方北部に位置する岩手県南部周辺には、十和田、焼石、栗駒、鳴子、肘折など東北地方の火山のほか、浅間、御岳、洞爺、阿蘇、始良など中部地方、北海道、九州など遠方の火山に由来する後期更新世以降のテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる（町田・新井，1992，2003など）。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの層位関係を考古遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、発掘調査の際にテフラ層が認められた小野遺跡、町裏Ⅰ遺跡、町裏Ⅱ遺跡でも、発掘調査担当者によって採取送付された3試料を対象に、テフラ検出分析、テフラ組成分析、さらに火山ガラスの屈折率測定を実施して、指標テフラとの同定を実施した。

II. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

分析対象の3試料を詳細に観察した後に、純度が高い部分から最大で8g採取した。具体的には小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）と町裏Ⅰ遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構－畝間6埋土内）が8g、とくに高純度部が認められた町裏Ⅱ遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構－畝間5埋土内）が7gとなった。そして、軽石、スコリア、火山ガラスなどのテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を、下記の手順で実施した。

- 1) 超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。
- 2) 80℃で恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下で観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。いずれも試料でも2mmより粗粒の軽石やスコリアは認められないものの、火山ガラスが多く検出された。

小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）には、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは、繊維束状やスポンジ状の軽石型のほか、平板状のいわゆるバブル型である。これらの火山ガラスの色調は、無色透明、白色、淡褐色、褐色である。

町裏Ⅰ遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構－畝間6埋土内）にも火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスは、やはり繊維束状やスポンジ状の軽石型のほか、平板状のいわゆるバブル型で、色調は無色透明、白色、淡褐色、褐色である。

町裏Ⅱ遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構－畝間5埋土内）には、火山ガラスがとくに多く含まれている。火山ガラスは、繊維束状やスポンジ状の軽石型のほか、平板状のいわゆるバブル型で、色調は無色透明、白色、淡褐色である。

Ⅲ. テフラ組成分析

(1) 分析試料と分析方法

テフラ検出分析は定性的で、分厚い中間型火山ガラスの認定などが難しいことから、より詳細なテフラに関するデータを得るために、火山ガラス比分析と重鉍物組成分析を合わせた定量的なテフラ組成分析を実施した。分析は、テフラ検出分析後の試料について、下記の手順に行った。

- 1) 分析篩により >1/4mm、1/4mm-1/8mm、1/8mm-1/16mm、<1/16mmの粒子を篩別。
- 2) 1/4mm-1/8mmの250粒子を偏光顕微鏡下で検鏡して、火山ガラス、軽鉍物、重鉍物の含有率を求める。火山ガラスについては形態・色調別に記載する（火山ガラス比分析）。
- 3) 1/4mm-1/8mmの重鉍物250粒子を対象に偏光顕微鏡下で検鏡して、重鉍物組成を明らかにする（重鉍物組成分析）。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析と重鉍物組成分析の結果を表2と表3に、またダイヤグラムにして図1に示した。小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）には、火山ガラス、軽鉍物、重鉍物が、それぞれ、16.0%、31.6%、4.8%含まれている。含まれる火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（7.2%）、中間型（4.8%）、スポンジ状軽石型（2.4%）、無色透明のバブル型（0.8%）、淡褐色および褐色のバブル型（各0.4%）である。重鉍物には、不透明鉍物（おもに磁鉄鉍、34.4%）、斜方輝石（33.6%）、単斜輝石（22.0%）、角閃石（63.8%）がある。

町裏Ⅰ遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構－畝間6埋土内）には、火山ガラス、軽鉍物、重鉍物が、それぞれ、16.0%、36.4%、2.0%含まれている。火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（6.4%）、中間型（5.2%）、スポンジ状軽石型（1.2%）、無色透明のバブル型（2.0%）、褐色のバブル型（0.8%）、淡褐色のバブル型（0.4%）である。含まれる重鉍物は、不透明鉍物（おもに磁鉄鉍、43.2%）、斜方輝石（36.8%）、単斜輝石（12.0%）、角閃石（6.8%）である。

町裏Ⅱ遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構－畝間5埋土内）には、火山ガラス、軽鉍物、重鉍物が、それぞれ、56.4%、36.4%、0.8%含まれている。火山ガラスは、含有率が高い順に繊維束状軽石型（37.6%）、スポンジ状軽石型（7.6%）、中間型（6.0%）、無色透明のバブル型（4.8%）、淡褐色のバブル型（0.4%）である。なお、含まれる重鉍物は1%未満と非常に含有率が低く、検鏡を実施しても規定の500粒子には達しない。500粒子検鏡を行うためには純度が低い部分も合わせて洗浄・検鏡を行う必要があり、その場合には高精度のテフラ同定のためのデータとはなり得ない。そこで、ここでは定性的な傾向記載に留める。この試料に含まれる重鉍物の組成は不透明鉍物（おもに磁鉄鉍）>斜方輝石>単斜輝石で、角閃石は認められない。

Ⅳ. 屈折率測定（火山ガラス）

(1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度をさらに向上させるために、小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）、町裏Ⅰ遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構－畝間6埋土内）、町裏Ⅱ遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構－畝間5埋土内）に含まれる火山ガラスを対象に屈折率測定を実施した。測定対象は1/8-1/16mm粒径の火山ガラスで、測定には温度変化型屈折率測定装置（京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000）を使用した。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表4に示す。小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）に含まれる火山ガラス30粒子の屈折率(n)は、1.496-1.508である。町裏I遺跡火山灰試料(8号畝間状遺構-6号畝間6埋土内)に含まれる火山ガラス30粒子の屈折率(n)は、1.497-1.507である。町裏II遺跡（2号畝間状遺構-畝間5埋土内）火山灰試料に含まれる火山ガラス30粒子の屈折率(n)は、1.503-1.507である。

V. 考察

小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）、町裏I遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構-畝間6埋土内）、町裏II遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構-畝間5埋土内）には、火山ガラスの形態、色調、屈折率特性から、915年に十和田火山から噴出したと考えられている十和田a火山灰（To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981）が含まれていると考えられる。

ただし、小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）および町裏I遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構-畝間6埋土内）は、町裏II遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構-畝間5埋土内）と比較して火山ガラスの含有率が低く、また屈折率のrangeも低い方に広く、さらにTo-aでは認められていない（町田・新井, 2003など）角閃石が含まれている。このことは、小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）および町裏I遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構-畝間6埋土内）が、町裏II遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構-畝間5埋土内）と比較して純度が低いことを示す。

小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）および町裏I遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構1-畝間6埋土内）に含まれる火山ガラスの屈折率特性のうち、低い値については、給源の十和田火山に近い青森県域に降灰しているTo-aで認められる。しかしながら、今回分析の対象となった地域では、最近、宮城県北部の後期旧石器時代の指標テフラである鳴子潟沼上原テフラ（NK-U, n:1.492-1.500, 早田, 1989, 町田・新井, 2003など）が降灰した可能性が高くなっていることから（火山灰考古学研究所, 未公表資料）、To-a以外のテフラに由来している可能性も考えられる。テフラ粒子の起源をより詳細に把握するためには、信頼度が高い電子線マイクロアナライザー（EPMA）による火山ガラスの主成分分析などが実施されると良い。

VI. まとめ

小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）、町裏I遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構-畝間6埋土内）、町裏II遺跡火山灰試料（2号畝間状遺構-畝間5埋土内）の3試料を対象に、テフラ検出分析、テフラ組成分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、試料により純度に違いはあるものの、十和田aテフラ（To-a, 915年）を多く検出することができた。

文献

- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.
 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.
 大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究，11，p.232-233.
 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰．第四紀研究，5，p.29-35.
 早田 勉（1989）テフロクロノロジーによる前期旧石器時代遺物包含層の検討．第四紀研究，28，p.269-282.

1 火山灰分析

表1 テフラ検出分析結果

遺跡	地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
			量	色調	最大径	量	形態	色調
小野遺跡	1号畝間状遺構	火山灰試料	***	pm (fb, sp)>bw		無色透明, 白, 淡褐, 褐		
町裏I遺跡	8号畝間状遺構-畝間6埋土	火山灰試料	***	pm (fb, sp)>bw		無色透明, 白, 淡褐, 褐		
町裏II遺跡	2号畝間状遺構-畝間5埋土	火山灰試料	****	pm (fb, sp)>bw		無色透明, 白, 淡褐		

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない. 最大径の単位は, mm.

bw: バブル型, pm: 軽石型.

表2 火山ガラス比分析結果

遺跡	地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
小野遺跡	1号畝間状遺構	火山灰試料	2	1	1	12	6	18	79	12	119	250
町裏I遺跡	8号畝間状遺構-畝間6埋土	火山灰試料	5	1	2	13	3	16	91	5	114	250
町裏II遺跡	2号畝間状遺構-畝間5埋土	火山灰試料	12	1	0	15	19	94	46	2	61	250

bw: バブル型, pm: 軽石型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状. 数字は粒子数.

表3 重鉱物組成分析結果

遺跡	地点	試料	ol	opx	cpx	am	bi	opq	その他	合計
小野遺跡	1号畝間状遺構	火山灰試料	0	84	55	17	0	86	8	250
町裏I遺跡	8号畝間状遺構-畝間6埋土	火山灰試料	0	92	30	17	0	108	3	250
町裏II遺跡	2号畝間状遺構-畝間5埋土	火山灰試料	(opq>opx>cp>am)							

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, bi: 黒雲母, opq: 不透明鉱物(おもに磁鉄鉱). 数字は粒子数.

町裏II遺跡については, 重鉱物の含有率が1%未満のために重鉱物組成の傾向を示す.

表4 屈折率測定結果

遺跡・地点・試料	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定点数	
小野遺跡1号畝間状遺構火山灰試料	1.496-1.508	30	本報告
町裏I遺跡8号畝間状遺構-畝間6埋土内	1.497-1.507	30	本報告
町裏II遺跡2号畝間状遺構-畝間5埋土内	1.503-1.507	30	本報告
指標テフラ			
白頭山苦小牧(B-Tm, 10世紀)	1.511-1.522 (1.515-1.520)		町田・新井(2003)
十和田a(To-a, 915AD)	1.496-1.508*1 1.500-1.508*2 1.503-1.507*3		町田・新井(2003) 町田・新井(2003) 町田・新井(2003)
標名二ツ岳伊香保(Hr-FP, 6世紀中葉)	1.500-1.503		町田・新井(2003)
十和田中郷(To-Cu, 6ka)	1.508-1.512		町田・新井(2003)
(安家火山灰, 岩手県岩泉町)	1.507-1.513		早田ほか(1988)
(吾妻火山灰, 福島県東吾妻)	1.507-1.512		早田ほか(1988)
鬼界アカホヤ(K-Ah, 7.3ka)	1.508-1.516		町田・新井(2003)
肘折尾花沢(Hj-O, 11-12ka)*4	1.499-1.504		町田・新井(2003)
十和田八戸(To-H, 15ka)	1.505-1.509		町田・新井(2003)
浅間草津(As-K, 15-16.5ka)	1.501-1.503		町田・新井(2003)
浅間板鼻黄色(As-YP, 15-16.5ka)	1.501-1.505		町田・新井(2003)
鳴子湯沼上原(NK-U)	1.492-1.500		町田・新井(2003)
始良Tn(AT, 28-30 ka)	1.499-1.501		町田・新井(2003)
十和田大不動(To-Of, ≥32ka)	1.505-1.511		町田・新井(2003)
鳴子柳沢(Nr-Y, 41-63 ka)	1.500-1.503		町田・新井(2003)
阿蘇4(Aso-4, 85-90 ka)	1.509-1.512		町田・新井(2003)
鳴子荷坂(Nr-N, 90 ka)	1.500-1.502		町田・新井(2003)
肘折北原(Hj-Kth, 90-100 ka)	1.499-1.501		町田・新井(2003)
御岳第1(On-Pm1, 100 ka)	1.500-1.503		町田・新井(2003)
三瓶木次(SK, 110-115 ka)	1.495-1.498		町田・新井(2003)
洞爺(Toya, 112-115 ka)	1.496-1.498		町田・新井(2003)

*1: 青森地域, *2: 岩手・秋田地域, *3: 仙台・福島地域, *4: ¹⁴C年代, (): modal range, ka: 1,000年前.

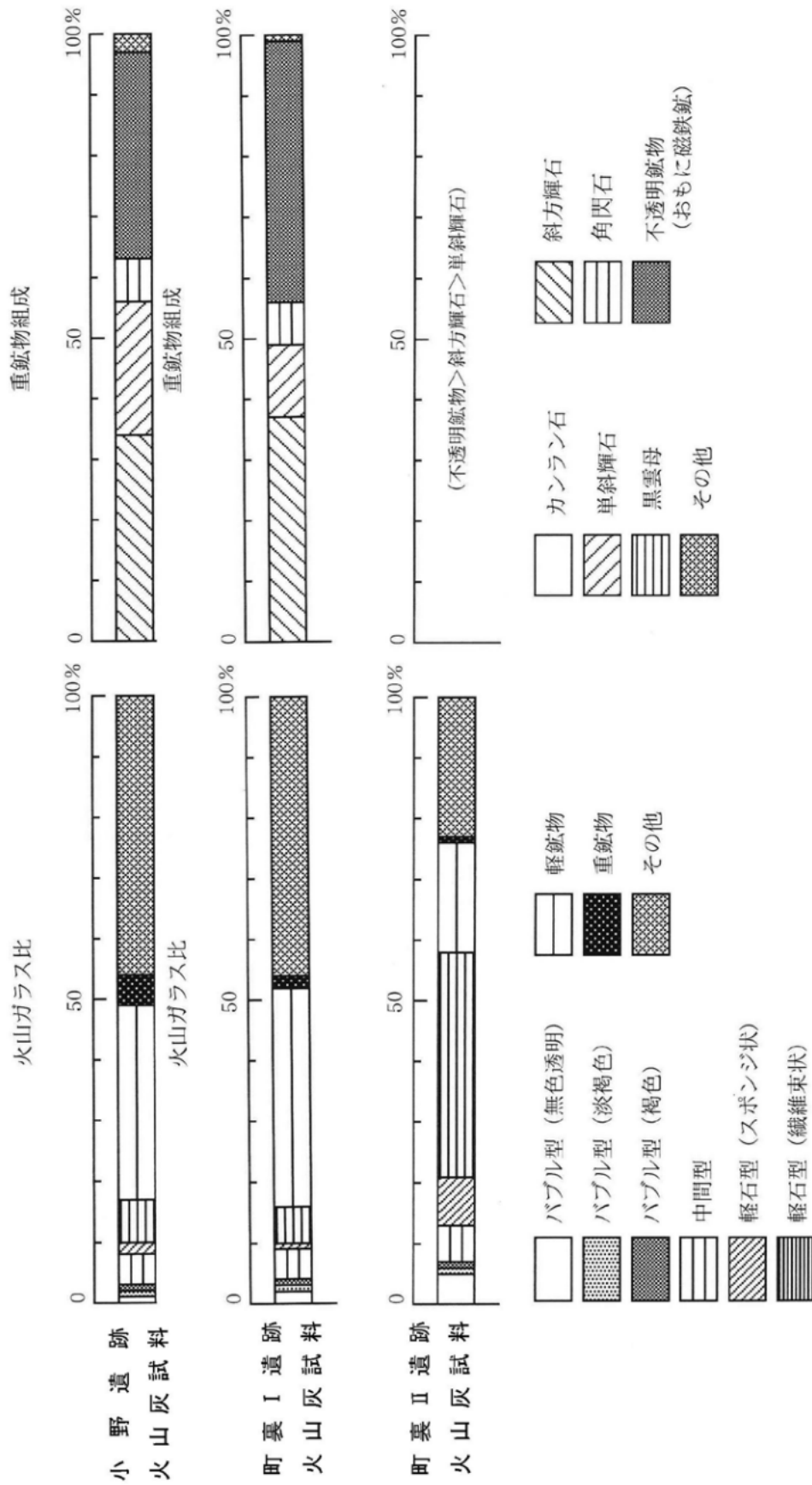


図1 町裏II遺跡のテフラ組成ダイヤグラム
重鉱物組成については規定の検鏡粒子数に達しないため
に相対的表示.



写真1 小野遺跡火山灰試料（1号畝間状遺構）
中央：繊維束状軽石型ガラス。

0.2mm



写真2 町裏I遺跡火山灰試料（8号畝間状遺構・6号畝間埋土内）
中央：繊維束状軽石型ガラス，中央左：斜方輝石。

0.2mm



写真3 町裏Ⅱ遺跡火山灰試料(2号畝間状遺構・5号畝間埋土内)

中央：繊維束状軽石型ガラス, 中央左：斜方輝石.

0.2mm

2 植物珪酸体分析

北方ファイトリス研究室 佐瀬 隆

I. はじめに

町裏Ⅰ・Ⅱ遺跡で検出された畝間状遺構の土壌について、その栽培履歴の情報を得るために植物珪酸体分析を実施した。本報告はその結果についてまとめたものである。

II. 分析試料

町裏Ⅰ遺跡で検出された1～8号の8箇所の畝間状遺構を、また、町裏Ⅱ遺跡で検出されたA区1～3号、C区1号、D区1号、E区1号の6箇所の畝間状遺構を分析対象とした。いずれの遺構についても、畝間と畝の各1箇所から採取された土壌を分析試料とした（採取地点の詳細は報告書の当該項を参照）。なお、町裏Ⅰ遺跡の7・8号遺構、同Ⅱ遺跡のA区2・3号とE区1号遺構は、Ⅳ層上面で検出された遺構で十和田aテフラを含むⅢ層に被われる。他の遺構はⅢ層上面で検出され、近世の遺物を含む洪水堆積物のⅡ層に被われる。

III. 分析方法

植物珪酸体分析は佐瀬（2003）、近藤（2010）に準じ以下の手順で実施した。

(1) 各試料から乾土当たり1～2gを秤量（秤量値a）。(2) 過酸化水素法で有機物の分解。(3) 超音波処理による土塊の破碎。(4) ジチオナイト法による脱鉄処理。(5) 篩と沈底法により粒径10-100μm画分を分離、50ccメスフラスコに移しメスアップ。(6) 十分に混濁させ直ちにマイクロピペットで20マイクロリットル採取してスライドガラス上に移し乾燥させた後、希釈カナダバルサムを一滴落としてカバーガラスを被せプレパラート作成。(7) 鏡下で植物珪酸体、珪化組織片を全て鑑定計数（各珪酸体・各珪化組織片の計数値b）。(8) 鑑定計数値に基づいて、次式：各珪酸体・各珪化組織片の密度 = 計数値b × 2500 ÷ 秤量値aにより各珪酸体、各組織片密度（乾土1g当たり）を算出。(9) 算出された密度値から組成表、組成図を作成。

IV. 結果

1. 検出された植物珪酸体、珪化組織片

本分析で検出された植物珪酸体、珪化組織片を以下に記す。このうち☆印を付した珪酸体、珪化組織片は栽培種の指標になりうるものである。図1に検出された主要な植物珪酸体、珪化組織片の光学顕微鏡写真を示す。

「植物珪酸体群」

a. イネ科機動細胞起源・ファン型

(1) タケ亜科起源（図1の4）

タケ・ササ類起源の洗濯板状や肉厚チューブの断面の一部を切り取った形状を示す一群。

(2) 非タケ亜科起源

・イネ属タイプ☆（図1の1・2）

端面観の上辺はなめらかな弧を描き端部で鐮状に突出、上面の亀甲紋が特徴的である。

・ススキ属タイプ（図1の3）

上辺部が連続弧状に落ち込む特徴を示す。

・ヨシ属タイプ（図1の5）

ヘルメット状を呈する。

・その他

上記以外の非タケ亜科起源タイプを一括する。

b. イネ科短細胞起源

(1) タケ型（図1の17）

タケ亜科を特徴づける上面の皺で特徴づけられる鞍状珪酸体内の一群。

(2) ヒゲシバ型（図1の20）

ズズメガヤ亜科、ダンチク亜科のヨシ属などを特徴づけ、またタケ亜科にも見られる。上面端部の皺のない鞍状珪酸体の一群。

(3) キビ（亜科）型（図1の18・19）

キビ亜科を特徴づける亜鈴状珪酸体の一群。ダンチク亜科のトダシバ、ヌマガヤなどにも見出される。

(4) ウシノケグサ（亜科）型（図1の22・23）

ウシノケグサ（イチゴツナギ）亜科を特徴づけるボート状珪酸体で一般に側縁が波状を呈する。

(5) イネ型☆（図1の16）

イネ類に特徴的な小型の亜鈴状珪酸体。植物組織中ではその長軸が葉脈と直交して配列し、それが平行するキビ（亜科）型とは明らかに相違する。

(6) その他（図1の21）

(1)～(5)に該当しない短細胞起源珪酸体を一括。

c. イネ科トゲ細胞起源（ポイント型）

石鋸状、鍵状を呈する一群。

d. 棒状型

(1) 平滑

直線的側縁を有する群。

(2) 鋸歯

鋸歯状縁を有する珪酸体で次の3群に区分。

・ムギ様☆（図1の24 - 26）

鋸歯は鋭く尖り鋸歯間が弧状に落ち込む特徴を示す。ムギ類種皮組織に多く見られる。

・導管細胞起源

導管細胞に由来する棒ヤスリ状を呈する。

・その他（図1の8）

ムギ様、導管細胞起源以外を一括。

e. その他

シダ植物起源などを一括する。

「珪化組織片群」

f. イネ科植物種皮起源

・ヒエ・キビ様☆（図1の11）

ヒエ類、キビ類種皮に起源すると推定されるはめ絵パズル状の文様が特徴で板状を呈する。

・ムギ様☆ (図1の14・15)

ムギ様鋸歯縁棒状珪酸体、スナップ状の珪酸体を含む珪化組織片である。

g. イネ科植物葉部表皮起源

・イネ様☆ (図1の13)

短細胞起源イネ型珪酸体を含む組織片。垂鈴状珪酸体がその長軸を葉脈に対して直交して配列するのが特徴である。

・キビ亜科様

短細胞起源キビ(亜科)型珪酸体を含む組織片。垂鈴状珪酸体がその長軸を葉脈に並行して配列する。

h. その他

・おろし金状☆

多数の小突起で特徴づけられる。イネ類はこの種の組織片の主要供給源の一つである。

・その他

珪化した長細胞の集合体など。

2. 植物珪酸体群、珪化組織片群の組成

各試料の植物珪酸体群集、珪化組織片群集の組成を表1、図2に示す。

(町裏I遺跡)

いずれの遺構の畝間試料、畝試料でも、イネ科機動細胞起源(ファン型)で非タケ亜科起源、イネ科短細胞起源でウシノケグサ・イチギツナギ(亜科)型、キビ(亜科)型を主とする非タケ亜科起源珪酸体が卓越する。各遺構における栽培種の指標となりうる珪酸体、珪化組織片の検出状況を以下に記述する。

- ・1号畝間状遺構：畝間試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体が 2×10^3 個/乾土gで検出された。
- ・2号畝間状遺構：畝間試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体とムギ様鋸歯縁棒状型珪酸体がそれぞれ 2×10^3 個/乾土gで検出された。
- ・3号畝間状遺構：畝試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体が 6×10^3 個/乾土gで検出された。
- ・4号畝間状遺構：栽培種の指標となりうる珪酸体、珪化組織片は、検出されなかった。
- ・5号畝間状遺構：畝間試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体が 2×10^3 個/乾土g、畝試料からムギ様鋸歯縁棒状型珪酸体が 5×10^3 個/乾土g、イネ属タイプ機動細胞珪酸体、イネ様葉部珪化組織片、ヒエ・キビ様種皮珪化組織片、ムギ様種皮珪化組織片が 1×10^3 個/乾土gで検出された。
- ・6号畝間状遺構：畝間試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体が 2×10^3 個/乾土g、畝試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体、ムギ様種皮珪化組織片が 2×10^3 個/乾土gで検出された。
- ・7号畝間状遺構：畝試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体が 2×10^3 個/乾土gで検出された。
- ・8号畝間遺構：畝間試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体、ムギ様種皮珪化組織片が 2×10^3 個/乾土gで検出された。

(町裏II遺跡)

町裏I遺跡と同様、いずれの遺構の畝間試料、畝試料でも、イネ科機動細胞起源(ファン型)で非タケ亜科起源、イネ科短細胞起源でウシノケグサ・イチギツナギ(亜科)型、キビ(亜科)型を主とする非タケ亜科起源珪酸体が卓越する。各遺構における栽培種の指標となりうる珪酸体、珪化組織片の検出状況を以下に記述する。

- ・A区1号畝間状遺構：畝間試料からイネ科葉部おろし金状珪化組織片が 2×10^3 個/乾土g、畝

試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体が 4×10^3 個 / 乾土 g、イネ様葉部珪化組織片が 2×10^3 個 / 乾土 g で検出された。

- ・ A 区 2 号畝間状遺構：畝試料からムギ様種皮珪化組織片が 2×10^3 個 / 乾土 g で検出された。
- ・ A 区 3 号畝間状遺構：栽培種の指標となりうる珪酸体、珪化組織片は、畝間試料から検出されなかった。
- ・ C 区 1 号畝間状遺構：畝間試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体、短細胞起源イネ型が 2×10^3 個 / 乾土 g、畝試料からムギ様鋸歯縁棒状型珪酸体が 1×10^4 個 / 乾土 g、ムギ様種皮珪化組織片、おろし金状珪化組織片が 2×10^3 個 / 乾土 g で検出された。
- ・ D 区 1 号畝間状遺構：畝間試料からムギ様鋸歯縁棒状珪酸体が 4×10^3 個 / 乾土 g、ヒエ・キビ様種皮珪化組織片が 2×10^3 個 / 乾土 g、ムギ様種皮珪化組織片が 4×10^3 個 / 乾土 g、おろし金状珪化組織片が 2×10^3 個 / 乾土 g、畝試料からイネ属タイプ機動細胞珪酸体とムギ様種皮珪化組織片が 2×10^3 個 / 乾土 g、ムギ様鋸歯縁棒状珪酸体が 1×10^4 個 / 乾土 g で検出された。
- ・ E 区 1 号畝間状遺構：栽培種の指標となりうる珪酸体、珪化組織片は、検出されなかった。

V. 考 察

前項で記したように、町裏 I 遺跡では、1 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、2 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体とムギ様鋸歯縁棒状型珪酸体、3 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、5 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、イネ様葉部珪化組織片、ムギ様種皮珪化組織片、ムギ様鋸歯縁棒状型珪酸体、ヒエ・キビ様種皮珪化組織片、6 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、ムギ様種皮珪化組織片、7 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、8 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、ムギ様種皮珪化組織片が検出された。一方、町裏 II 遺跡では、A 区 1 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、イネ様葉部珪化組織片、イネ科葉部おろし金状珪化組織片、A 区 2 号畝間状遺構でムギ様種皮珪化組織片、C 区 1 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、短細胞起源イネ型珪酸体、ムギ様鋸歯縁棒状型珪酸体、ムギ様種皮珪化組織片、おろし金状珪化組織片、D 区 1 号畝間状遺構でイネ属タイプ機動細胞珪酸体、ヒエ・キビ様種皮珪化組織片、ムギ様種皮珪化組織片、ムギ様鋸歯縁棒状珪酸体、おろし金状珪化組織片が検出された。したがって、町裏 I 遺跡では、4 号畝間状遺構を除く 7 つの遺構から、また、同 II 遺跡では A 区 3 号畝間状遺構、E 区 1 号畝間状遺構を除く 3 つの遺構からイネ科作物に関わる珪酸体、珪化組織片が検出されたことになる。これらの珪酸体、珪化組織片の密度（個数 / 乾土 g）は、町裏 II 遺跡の C 区 1 号畝間状遺構で検出されたムギ様鋸歯縁棒状型珪酸体の 1×10^4 個 / 乾土 g を最大値として必ずしも高いわけではないが、イネ類、ムギ類を主としたイネ科作物が栽培された可能性を示唆する。

なお、町裏 I・II 遺跡の畝間状遺構は、古代、近世の少なくとも 2 時期に帰属するが、今回の分析からは栽培種の時期的差異を示す珪酸体情報を得られなかった。

引用文献

- 佐瀬 隆 (2003) 植物ケイ酸体. 竹内均 (監)「地球環境調査計測事典 陸域編 (第 1 巻)」, 974-981, フジテクノシステム.
 近藤錬三 (2010) プラントオパール図譜 走査型顕微鏡による植物ケイ酸体学入門. 北海道大学出版会. 387p.

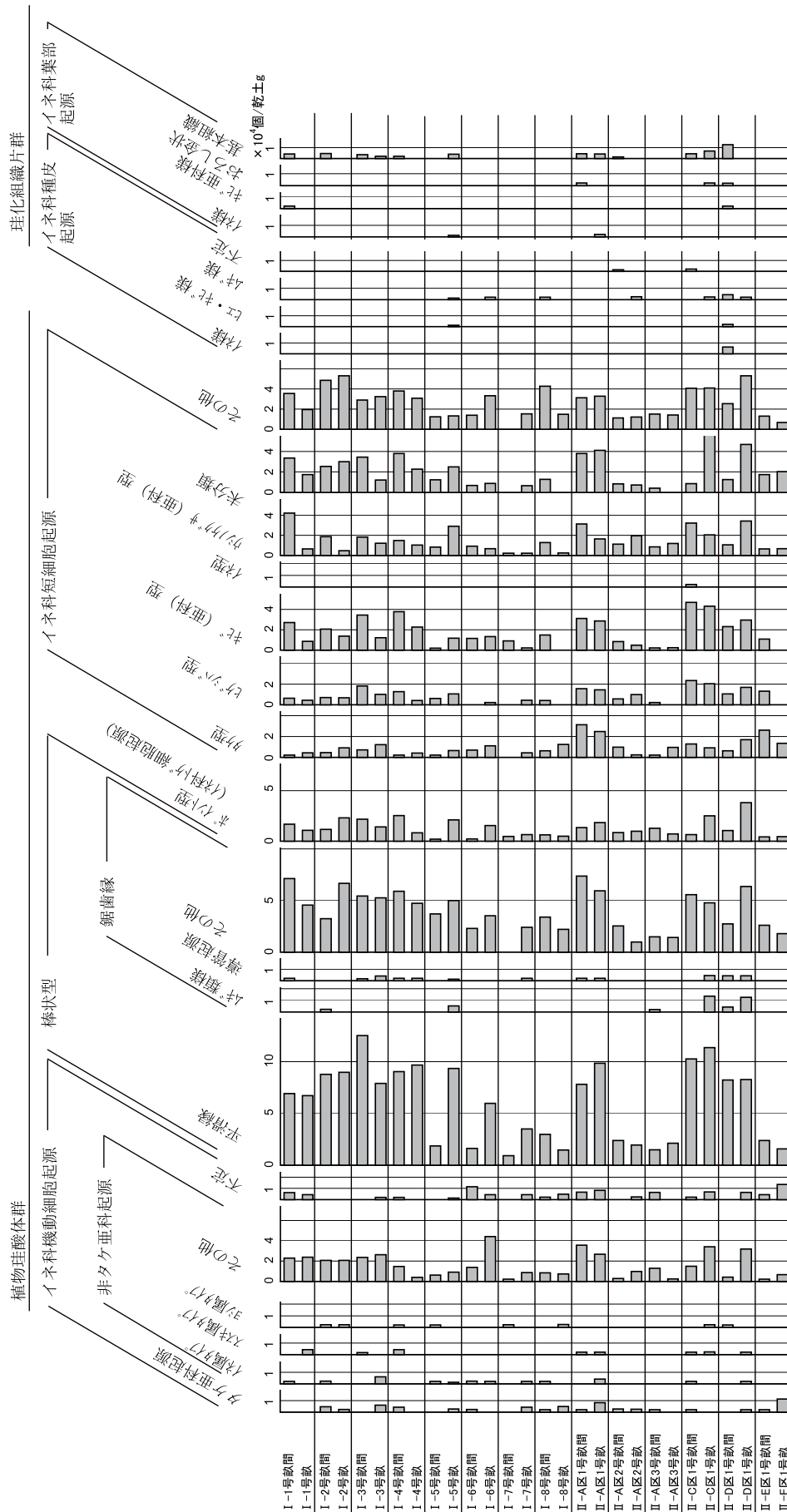


図2 町裏 I・II 遺跡、畝間状遺構土壌の植物珪酸体、珪化組織片組成図

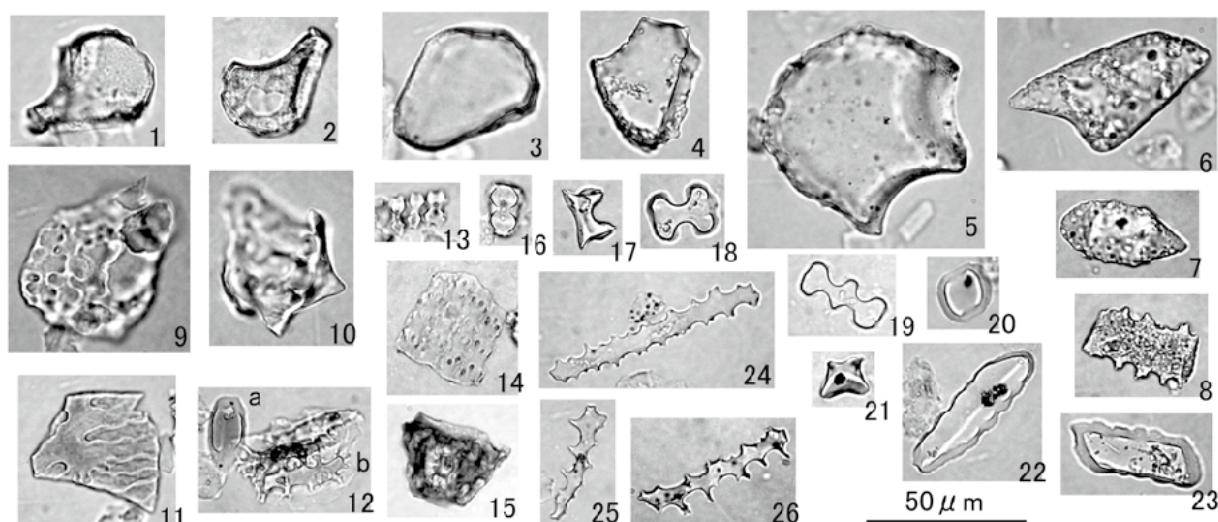


図1 町裏 I・II 遺跡の畝間状遺構土壌から検出された代表的な植物珪酸体、珪化組織片の光学顕微鏡写真

1-5: イネ科機動細胞珪酸体・ファン型(1-3・5: 非タケ亜科起源(1-2: イネ属タイプ, 3: ススキ属タイプ, 5: ヨシ属タイプ), 4: タケ亜科起源ササ属タイプ), 6・7: イネ科トゲ細胞珪酸体ポイント型, 8・24-26: 棒状珪酸体鋸歯縁(8: その他, 24-26: ムギ様), 9-11・12b・15: イネ科種皮珪化組織片(9・10: イネ様, 11: ヒエ・キビ様, 12b・15: ムギ様), 13・14: イネ科葉部珪酸組織片(13: イネ様, 14: おろし金状), 16-23: イネ科短細胞珪酸体(16: イネ型, 17: タケ型ササ属タイプ, 18・19: キビ(亜科)型, 20: ヒゲシバ型, 21: 未分類, 22・23: ウシノケグサ型)

1・7・11・12a・12b・13・23・24: I 遺跡5号遺構畝, 2・8: I 遺跡3号遺構畝, 3・5・20: II 遺跡C区1号遺構畝, 4・6: II 遺跡D区1号遺構畝, 9・10・14・15・18・21・25・26: II 遺跡D区1号遺構畝間, 16・17・19: II 遺跡C区1号畝間, 22: II 遺跡A区1号畝

写 真 图 版



遺跡遠景・S→



小野遺跡調査区全景・上が南西



遺跡近景・SW →



基本土層・SE →



1号畝間状遺構検出・S→



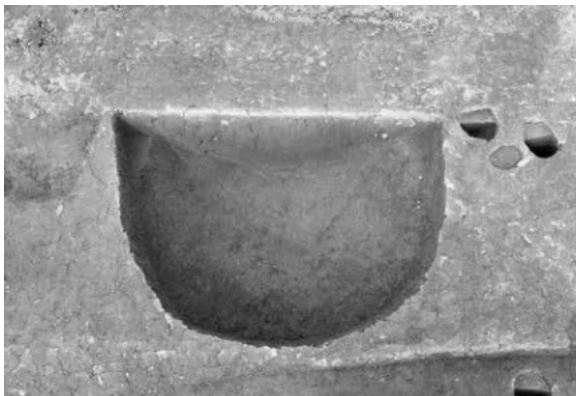
1号畝間状遺構完掘・SW→



1号畝間状遺構断面・SW→



1号畝間状遺構断面・S→



1号土坑完掘・SW→



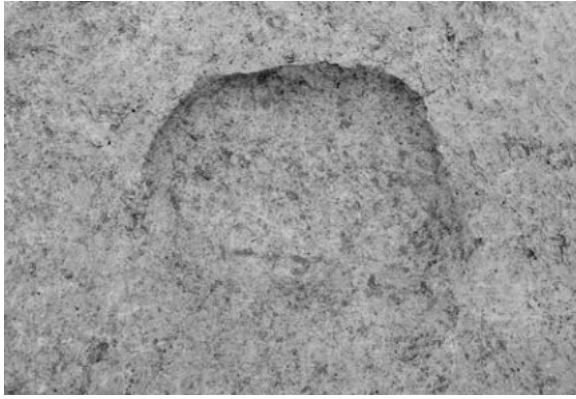
1号土坑断面・SW→



2号土坑完掘・SW→



2号土坑断面・SW→



3号土坑完掘・E→



3号土坑断面・E→



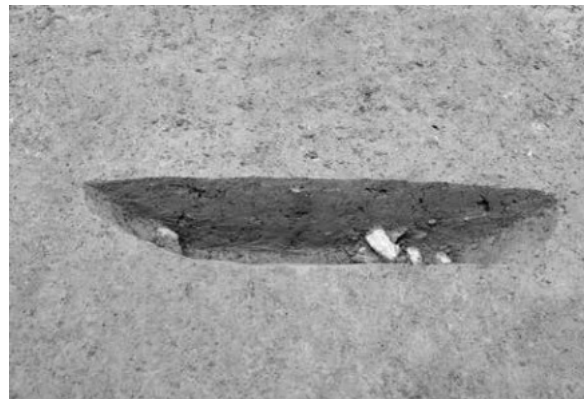
4号土坑完掘・SE→



4号土坑断面・SE→



5号土坑全景・SE→



5号土坑断面・SE→



6号土坑完掘・NW→



6号土坑断面・SE→



7号土坑完掘・N W→



7号土坑断面・S W→



1号烧成土坑検出1・W→



1号烧成土坑検出2・S→



1号烧成土坑NW-S E断面・S W→



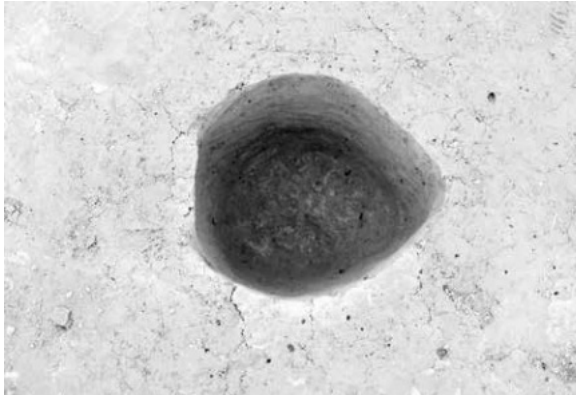
1号烧成土坑S W-N E断面・S E→



1号烧成土坑完掘・S→



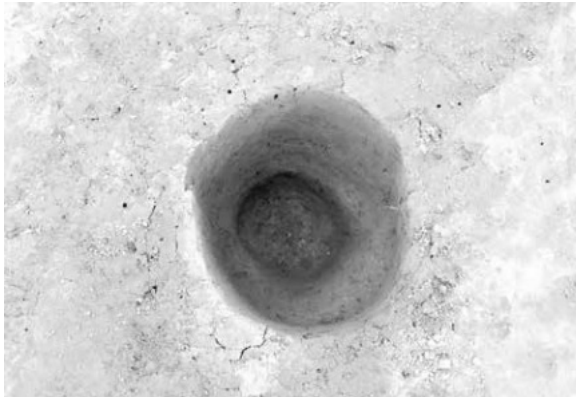
1号柱穴列 (P 7~9・19)・N→



P7 完掘・S W →



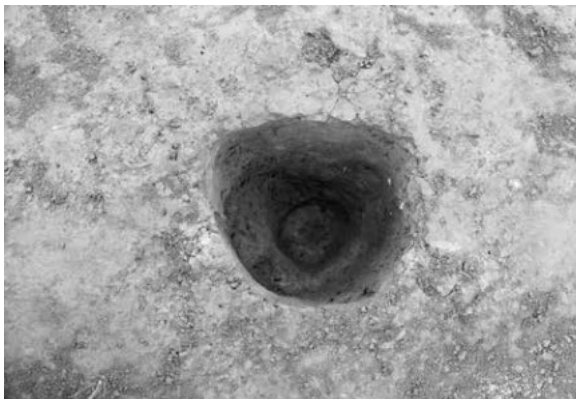
P7 断面・S W →



P8 完掘・S W →



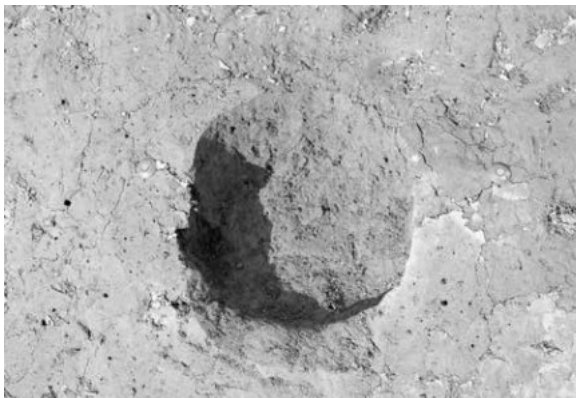
P8 断面・S W →



P9 完掘・S W →



P9 断面・S W →



P19 完掘・S W →



P19 断面・S W →



町裏Ⅰ遺跡調査区全景（上が東）



B区近景・S→



E区西壁断面・E→



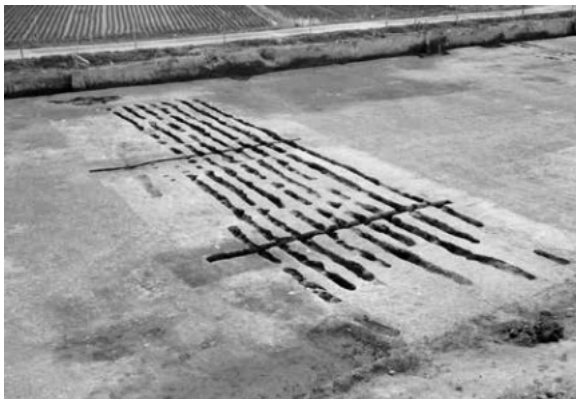
1号畝間状遺構・NW→



1号畝間状遺構検出・W→



1号畝間状遺構畝間2断面・W→



1号畝間状遺構全景・NW→



1号畝間状遺構完掘（一部）・W→



2号畝間状遺構検出・W→



2号畝間状遺構畝間3断面・W→



2号畝間状遺構全景・W→



2号畝間状遺構完掘（一部）・W→



3号畝間状遺構完掘・W→



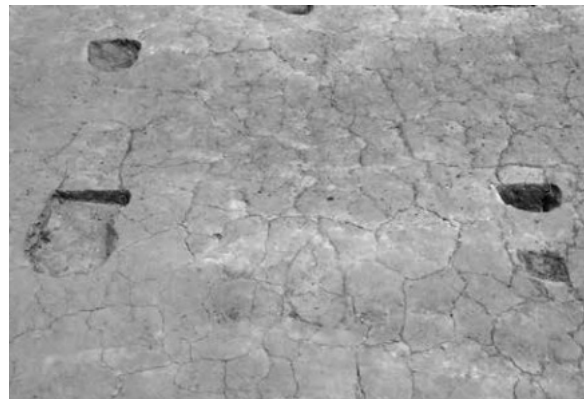
3号畝間状遺構断面・W→



3号畝間状遺構C断面・W→



4号畝間状遺構完掘・W→



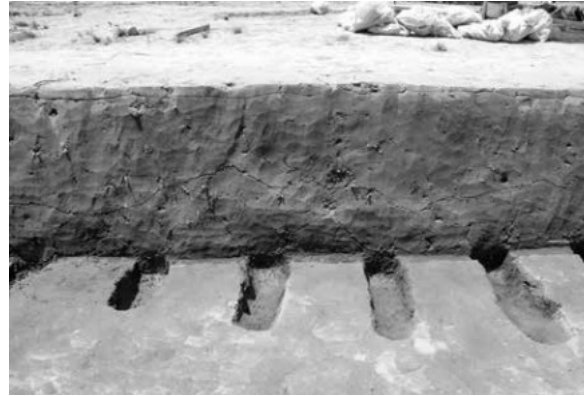
4号畝間状遺構東側断面・W→



4号畝間状遺構西側断面・W→



5号畝間状遺構完掘・NE→



5号畝間状遺構断面・E→



6号畝間状遺構完掘・W→



6号畝間状遺構断面・W→



7号畝間状遺構完掘・SW→



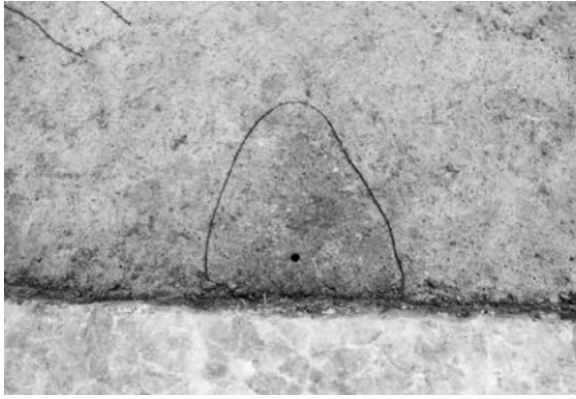
7号畝間状遺構・畝間2断面・W→



8号畝間状遺構完掘・N→



8号畝間状遺構A断面・W→



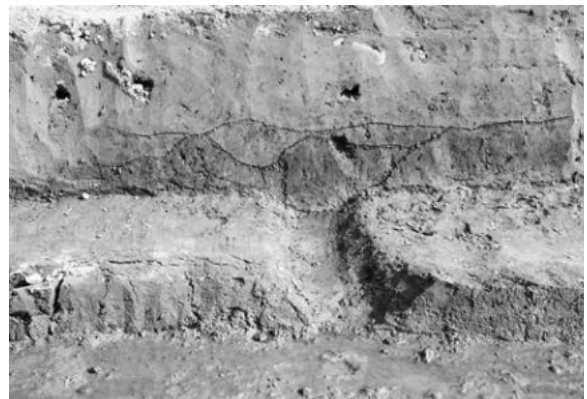
1号土坑検出・W→



1号溝断面・NW→



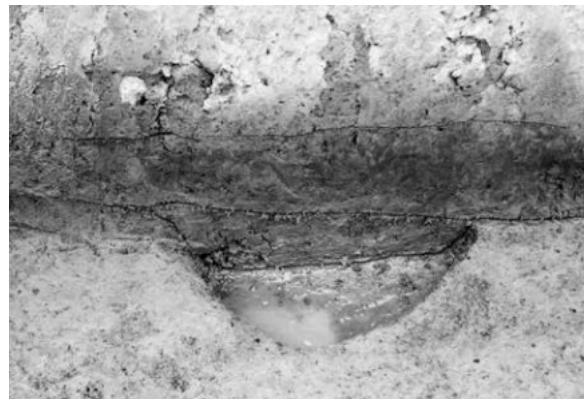
16号溝完掘・SE→



16号溝断面・NW→



7号溝完掘・SW→



1号柱穴断面・W→



D区全景・E→



E区全景・S→

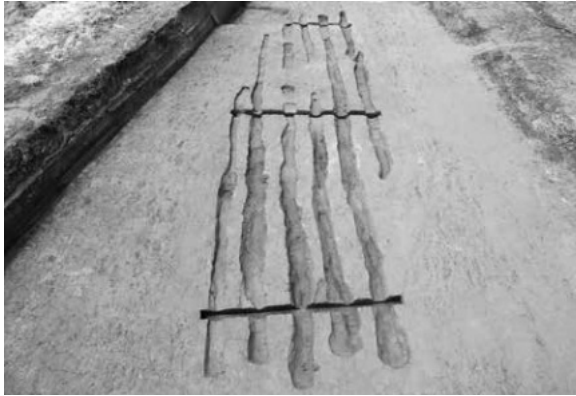
写真図版 12 1号土坑、1・7・16号溝、1号柱穴、調査区



町裏Ⅱ遺跡遠景・S→



基本土層・NE→



1号畝間状遺構完掘・SE→



1号畝間状遺構断面・NW→



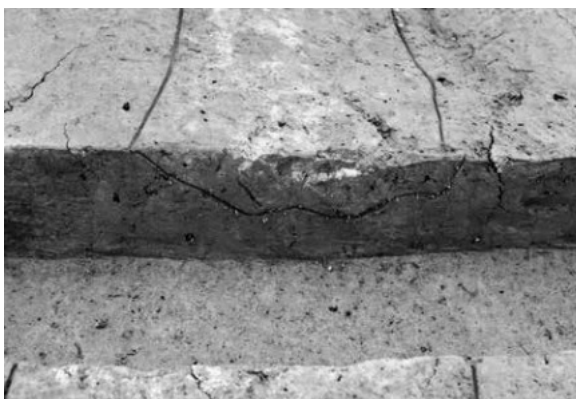
2号畝間状遺構検出・W→



3号畝間状遺構検出・NW→



2号畝間状遺構断面・E→



3号畝間状遺構断面・NE→



3号畝間状遺構断面・NE→



4号畝間状遺構断面・SE→



5・6号畝間状遺構検出・SW→



5号畝間状遺構東断面・SW→



7号畝間状遺構検出・W→



1号溝検出・SE→



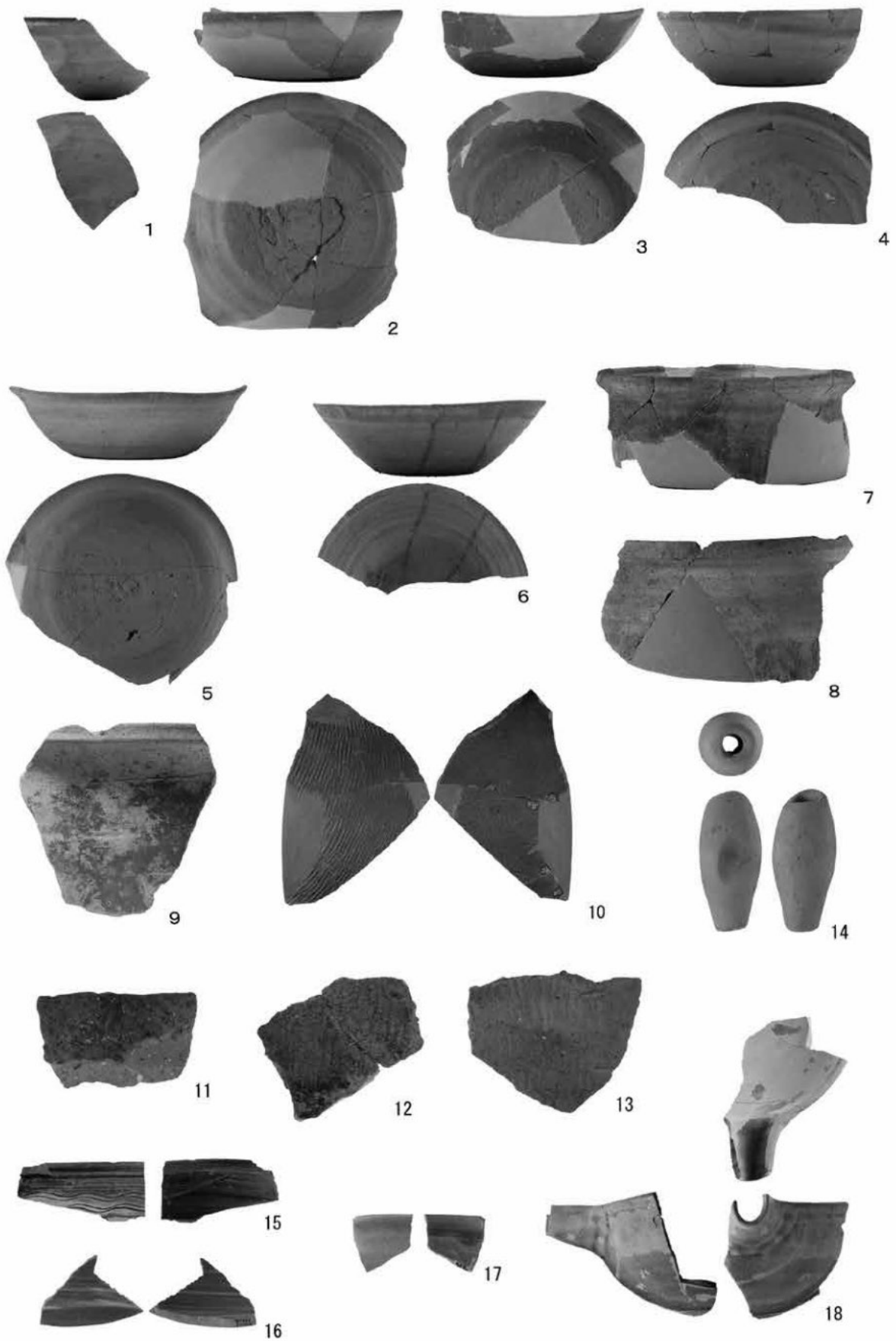
1号溝北側断面・S→



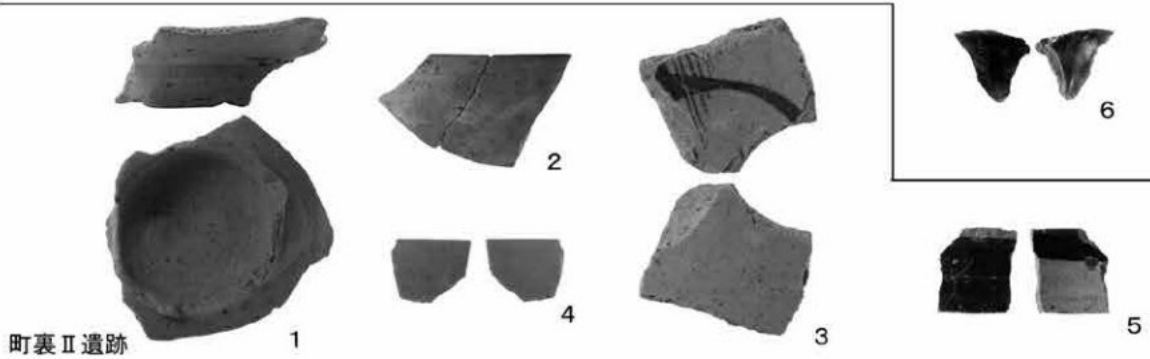
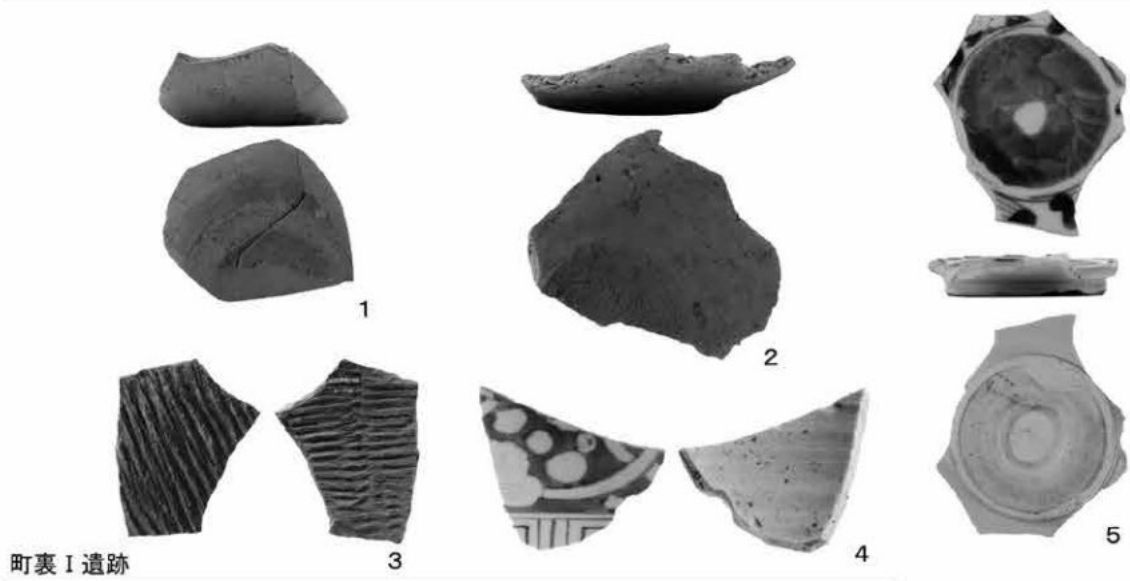
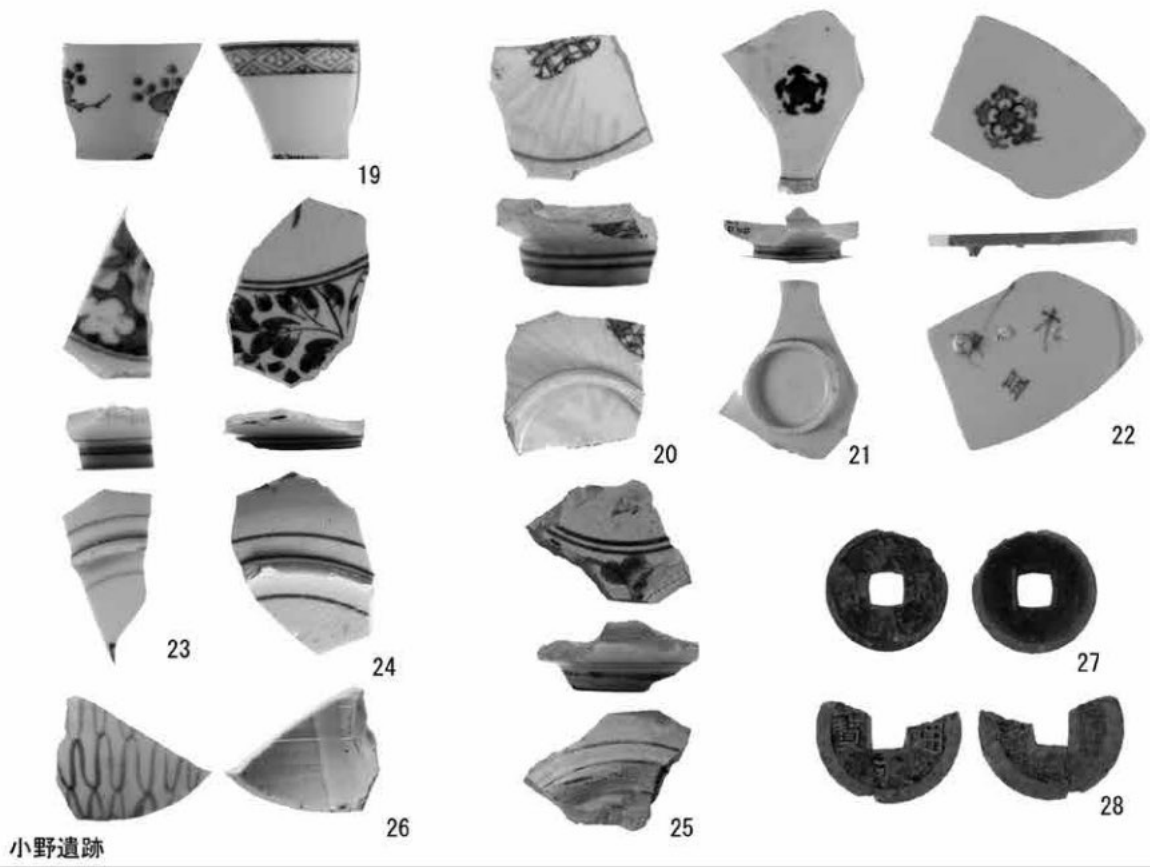
2号溝検出・SW→



2号溝中央断面・W→



写真図版 16 小野遺跡出土遺物



写真図版 17 小野遺跡・町裏Ⅰ遺跡・町裏Ⅱ遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	このいせき・まちうら1いせき・まちうら2いせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	小野遺跡・町裏Ⅰ遺跡・町裏Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第634集							
編著者名	溜 浩二郎							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2015年2月■日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
このいせき 小野遺跡	いわてけんいちのせきし 岩手県一関市 はなすみまちあざまちうら 花泉町字町裏 159-2ほか	03209	OE39-1017	38度 49分 50秒	141度 15分 03秒	2013.04.08～ 2013.05.17	423㎡	経営体育成 基盤整備事 業日形地区 関連事業
まちうら1いせき 町裏Ⅰ遺跡	いわてけんいちのせきし 岩手県一関市 はなすみまちあざまちうら 花泉町日形字 まちうら 町裏71ほか	03209	OE39-0161	38度 50分 03秒	141度 15分 20秒	2013.04.08～ 2013.06.18	2,506㎡	経営体育成 基盤整備事 業日形地区 関連事業
まちうら2いせき 町裏Ⅱ遺跡	いわてけんいちのせきし 岩手県一関市 はなすみまちあざまちうら 花泉町日形字 まちうら 町裏22ほか	03209	OE39-0086	38度 49分 56秒	141度 15分 07秒	2013.04.08～ 2013.06.18	2,609㎡	経営体育成 基盤整備事 業日形地区 関連事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小野遺跡	集落・ 生産遺跡	弥生		土器				
		古代	畝間状遺構 1基 土 坑 2基	土師器、須恵器、土錘				
		時期不明 (近世含む)	柱 穴 列 1基 柱 穴 33個 土 坑 6基	陶磁器、古銭				
町裏Ⅰ遺跡	生産遺跡	古代	畝間状遺構 2基	土師器、須恵器				
		時期不明 (近世含む)	畝間状遺構 6基 溝 1条 柱 穴 1個 土 坑 1基	陶磁器				
		古代	畝間状遺構 3基	土師器				
町裏Ⅱ遺跡	生産遺跡	時期不明 (近世含む)	畝間状遺構 5基 溝 2条	陶器				
		古代	畝間状遺構 2基	土師器				
要 約	3遺跡からはいずれも生産遺構である畝間状遺構が見つかり、古代～近代まで島地として利用された場所であることが明らかになった。小野遺跡は畝間状遺構の他に古代～近世の柱穴状土坑や土坑、隣接する平成23年度調査区で竪穴建物が見つかり、居住域に隣接していることがわかった。一方、町裏Ⅰ・町裏Ⅱ遺跡は畝間状遺構の他に溝が見つかるが、竪穴建物はなく出土遺物も極めて少ないことから居住域である集落からは離れた場所にあると考えられる。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 634 集
小野遺跡・町裏Ⅰ遺跡・町裏Ⅱ遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業日形地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成 27 年 2 月■日

発 行 平成 27 年 2 月■日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地
電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局農政部一関農村整備センター
〒 029-0803 岩手県一関市千厩町千厩字北方 85-2
電話 (0191) 52-4931

(公財) 岩手県文化振興事業団
〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号
電話 (019) 654-2235

印 刷 セーコー印刷
〒 020-0877 岩手県盛岡市下の橋町 2-23
電話 (019) 651-3606

